

宮ノ下遺跡  
発掘調査報告書

1996

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

み や の し た  
**宮 ノ 下 遺 跡**  
**発 掘 調 査 報 告 書**

平成 8 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査 A・B 区全景 (正面の小山が剣龍神社西薙跡)



墨書き土器 (SG1200河川跡出土)

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが<sup>5</sup>発掘調査を実施した、宮ノ下遺跡の調査成果をまとめたものです。

宮ノ下遺跡は山形県の北部に位置する遊佐町にあります。遊佐町は県内有数の稻作地帯であり、北に鳥海山を望み、月光川河口には吹浦漁港をひかえて、豊かな海山の幸に恵まれたところです。

この度県営整備事業（高瀬川地区）に伴い、工事に先立って宮ノ下遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では「大伴」や「伴」・「漢」氏など氏族名を記した貴重な墨書き土器が多数出土しました。また、調査D区河川跡からは仏を描いた木製品をはじめ曲物・挽物なども多く出土し、木製品の製作場の存在が推定されます。土器も底部がヘラ切りの須恵器が多く、飽海一帯における平安時代の集落の形成期を追究する貴重な資料となることが期待されます。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的遺産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

## 例　　言

- 1 本書は県営ほ場整備事業(高瀬川地区)に係る「宮ノ下遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 宮ノ下遺跡(AYZMS) 遺跡番号 2086  
所在地 山形県鶴岡市遊佐町大字北目字宮ノ下・矢口・中瀬  
調査期間 発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日  
現地調査 平成7年5月8日～平成7年9月13日  
調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター  
発掘調査・資料整理担当者  
調査第一課長 佐々木 洋治  
主任調査研究員 野尻 侃  
調査研究員 斎藤 俊一  
嘱託職員 黒沼 幹男

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区、遊佐町教育委員会等関係機関並びに遊佐町の方々から協力をいただいた。また、報告書作成に当たっては、国立歴史民俗博物館教授平川南氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、斎藤俊一、黒沼幹男が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。  
現地調査における平面図等の作成については、株式会社日本テクニカルセンターに委託した。  
土器胎土分析・出土柱根の樹種同定・出土種子同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。  
木製品の保存処理については新日本製鉄株式会社釜石製鉄所釜石文化財保存処理センターに委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S B……掘立柱建物跡	S K……土壤	S G……河川跡		
S D……溝跡	E B……柱跡	S P……ピット・小穴		
S A……杭列・板材列	S X……性格不明遺構			
R P……登録土器	P…土器	S…礫	W…木製品	M…金属製品

2 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲したが、建物跡等については本書で新たに付したものがある。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構平面図中の方位は真北を示している。
- (2) 今調査区に設定したグリッドの南北軸はN-63°-Wを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/50・1/80・1/100・1/160・1/500で採録し、各々にスケールを付した。
- (4) 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土はFを付して区別した。
- (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (6) 遺物実測図・拓影図は1/4縮尺で採録したが、古鉄と石帯については原寸とした。各々にスケールを付した。実測図中の次の各スクリーントーンは木・黒色処理・墨痕部分・漆塗部分・炭化部分を表している。



- (7) 遺物観察表中の計測値で( )内の数値は図上復元による推定値を示す。
- (8) 遺構覆土の色調記載については、1993年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 自然環境	4
2 歴史的環境	
(1) 周辺の遺跡について	4
(2) 古代における飽海の歴史的背景	5
3 遺跡の層序	6
III 検出遺構と出土遺物	
1 遺構・遺物の分布	7
2 掘立柱建物跡	11
3 ピット列	15
4 土壙	16
5 溝跡	19
6 井戸跡	27
7 河川跡	30
8 その他の遺物	49
IV まとめと考察	
(1) 墨書き土器について	58
(2) 遺跡の性格と年代観について	60
付編 「宮ノ下遺跡理化学的資料分析」	
I 土器胎土分析	69
II 掘立柱材の樹種同定	77
III S G 1200河川跡出土の種子同定	78
報告書抄録	80

## 表

表1 掘立柱建物跡観察表	12	表6 S G 1200河川跡土器観察表(3)	54
表2 S D 73溝跡遺物観察表(1)	28	表7 S G 1200河川跡土器観察表(4)	55
表3 S D 73溝跡等遺物観察表(2)	29	表8 S G 1200河川跡木製品観察表(5)	56
表4 S G 1200河川跡土器観察表(1)	52	表9 A・B区グリッド等遺物観察表(6)	57
表5 S G 1200河川跡土器観察表(2)	53	表10 墨書き土器出土地点一覧	62

## 挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第19図 S G1200河川跡出土土器(2)	36
第2図 遺跡概要図	3	第20図 S G1200河川跡出土土器(3)	37
第3図 遺構配置図	9	第21図 S G1200河川跡出土土器(4)	38
第4図 S B1・2・3掘立柱建物跡	13	第22図 S G1200河川跡出土土器(5)	39
第5図 S B4・5掘立柱建物跡	14	第23図 S G1200河川跡出土木製品(6)	40
第6図 S B6掘立柱建物跡	15	第24図 S G1200河川跡出土木製品(7)	41
第7図 S A1ピット列	15	第25図 S G1200河川跡出土木製品(8)	42
第8図 S K22-97-111-158-390土壤	17	第26図 S G1200河川跡出土木製品(9)	43
第9図 S K1224-1241等土壤・ピット	18	第27図 S G1200河川跡出土木製品(10)	44
第10図 S D73-77溝跡	21	第28図 S G1200河川跡出土木製品(11)	45
第11図 S D109-341-549-649溝跡	22	第29図 S G1200河川跡出土木製品(12)	46
第12図 S D73溝跡出土土器(1)	23	第30図 S G1200河川跡出土木製品(13)	47
第13図 S D73溝跡出土土器(2)	24	第31図 S G1200河川跡出土木製品(14)	48
第14図 S D73溝跡出土土器(3)	25	第32図 A・B区グリッド出土土器(1)	49
第15図 S D73-77溝跡出土土器(4)	26	第33図 A・B区グリッド出土土器(2)	50
第16図 S E266井戸跡	27	第34図 その他出土遺物	51
第17図 S G1200河川跡遺物出土状況等	33	第35図 墨書き文字集成	64
第18図 S G1200河川跡出土土器(1)	35	第36図 刺龍神社西窓跡土器	65

## 図 版

図版1 遺跡遠景	図版12 出土土器(5)
図版2 遺構検出状況(1)	図版13 出土土器(6)
図版3 遺構検出状況(2)	図版14 出土土器(7)
図版4 遺構検出状況(3)	図版15 出土土器(8)
図版5 遺構検出状況(4)	図版16 出土土器(9)
図版6 遺構検出状況(5)	図版17 出土木製品(10)
図版7 遺構検出状況(6)	図版18 出土木製品(11)
図版8 出土土器(1)	図版19 出土木製品(12)
図版9 出土土器(2)	図版20 出土土器(13)
図版10 出土土器(3)	図版21 出土土器(14)
図版11 出土土器(4)	図版22 出土遺物(15)



## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

遊佐町には鳥海南麓に縄文時代の遺跡、平野部には平安時代を主とする遺跡が確認されている。なかでも庄内高瀬川や月光川の流れに沿って連なる数多くの平安時代の遺跡が広範囲に分布している。

近年の大規模で継続的なほ場整備事業や種々の開発の波を遺跡は直接かつ広範に受けるようになってきており、その保存と活用を含めた調整が今日的緊急課題となっている。

宮ノ下遺跡は昭和38年と51年に行われた遺跡確認調査によって、平安時代の集落跡として認定され、県遺跡台帳に遺跡番号2086として登録されることとなった。

本遺跡はJR羽越本線遊佐駅の北方2.5kmの水田中に位置し、庄内高瀬川右岸の自然堤防上に立地する。標高は約8.5~9.3mを測る。昭和63年と平成3年度に県営ほ場整備事業(高瀬川地区)との調整を図るために試振調査を実施した結果、遺跡は羽越本線を挟んで東西250m・南北750m、約10万m<sup>2</sup>に及ぶ範囲を持つ平安時代の集落跡であることが明らかとなった。今回の発掘調査も継続的に進められている高瀬川地区のほ場整備事業との関連で、山形県埋蔵文化財センターが主体となって実施することとなった。本遺跡では既に平成4年度にJR羽越本線の東側水路付設にあたり発掘調査が実施され、井戸跡や溝跡が検出されている。この度の調査は遺跡範囲のうち最も北端と南端に位置する部分を主として、また、羽越本線近くに付設される水路及び管水路部分についても深く掘削されることから、やむを得ず壊れると判断された部分併せて10,150m<sup>2</sup>について緊急の発掘調査を行い、記録保存することとなった。

### 2 調査の方法と経過

現地調査は平成7年5月8日から9月13日までの実働87日間の日程で行った。

5月8日に発掘機材を搬入し調査を開始した。次に地表面、遺物包含層確認のため調査区内にテストトレーン(坪掘り)を行った。その結果に基づいて、重機等を導入して水田耕作土(表土)を除去、併行して面整理を行なながら遺構の確認にあたった。次に調査区内に10m毎に杭打ちをして、グリッド(方眼区画)を設定した。南北の基本軸(Y軸)はJR羽越本線と民有地との境界杭を結んで、線路にほぼ平行している。X軸は西から東にA~R、Y軸は北から南に1~66として、A-1グリッドというように表現した。

面整理を繰り返しながら、遺構検出そしてマーキングにつとめた。統いて7月から遺構精査に入った。その間適宜平面図・断面図の作成や写真撮影等記録作業にあたった。

8月8日にD区、9月5日にはA・B区の空中撮影による写真実測を行った。

なお、9月7日に調査結果を公表し、埋蔵文化財に対する理解と保護思想の普及を目的とした現地説明会を実施し、9月13日機材を撤収し、現地調査を終了した。

I 調査の経緯

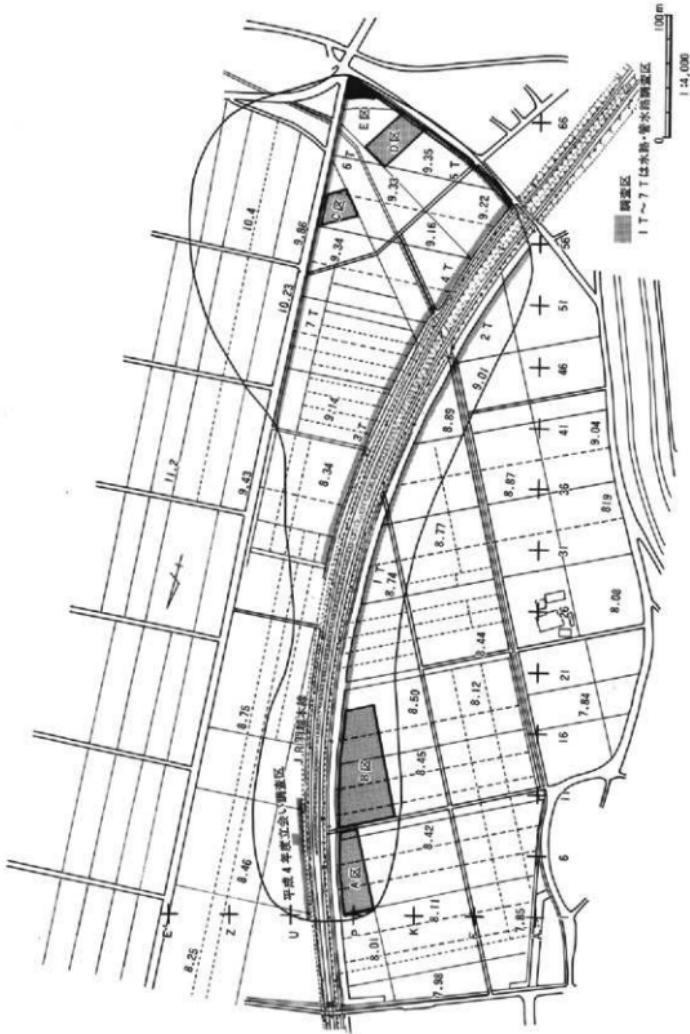


国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「吹浦」「羽後精奇寺」を縮小して使用 (1 : 50,000)

- |           |          |          |           |            |            |            |
|-----------|----------|----------|-----------|------------|------------|------------|
| 1:宮ノ下遺跡   | 2:中田浦遺跡  | 3:野瀬遺跡   | 4:上山崎遺跡   | 5:田中遺跡     | 6:地蔵田遺跡    | 7:北目長田遺跡   |
| 8:室田遺跡    | 9:鳩町遺跡   | 10:木戸下遺跡 | 11:道内遺跡   | 12:木原遺跡    | 13:上高田遺跡   | 14:石田遺跡    |
| 15:宅田遺跡   | 16:道内遺跡  | 17:古屋敷遺跡 | 18:大坪遺跡   | 19:仁田遺跡    | 20:三田遺跡    | 21:我冷遺跡    |
| 22:北子橋下遺跡 | 23:小深田遺跡 | 24:東田遺跡  | 25:下長橋遺跡  | 26:浮橋遺跡    | 27:尻遺跡     | 28:佐渡遺跡    |
| 29:前田遺跡   | 30:地正面遺跡 | 31:塙田遺跡  | 32:長田遺跡   | 33:水上C遺跡   | 34:水上B遺跡   | 35:水上A遺跡   |
| 36:村前遺跡   | 37:橋畠遺跡  | 38:若王子遺跡 | 39:向田遺跡   | 40:豊原遺跡    | 41:豊原B遺跡   | 42:国指定城輪櫛跡 |
| 43:後田遺跡   | 44:堂の前遺跡 | 45:八森遺跡  | 46:サナミ坂窯跡 | 47:劍電神社西窯跡 | 48:劍電神社東窯跡 | 49:天狗窯跡    |
| 50:唐戸岩窯跡  |          |          |           |            |            |            |

第1図 遺跡位置図

図2 図 造成概要図



## II 遺跡の立地と環境

### 1 自然環境

遊佐町は山形県北部にあり、秋田県とは県境を共にする町である。庄内平野は、最上川をはさんで大きく南半の鶴岡市・田川郡と酒田市・鮎ヶ瀬郡に分けられる。

本遺跡が所在する鮎ヶ瀬郡は西に日本海、砂丘地をかかえ、北東は酒田東部丘陵と鳥海山にかこまれた冲積平野に位置する。遊佐町はその最も北端部にある。

標高5~20mを測るこの広大な冲積地には最上川の他に日向川・月光川・庄内高瀬川等が流れしており、これら河川は時には水害をもたらしながらも住まいする人々に肥沃な土地を与えており、水田地帯に散在する現在の集落は地吹雪を遮る防風林に囲まれて立地しているが、今も昔も厳しい自然との闘いである。

平安時代は、海岸近くにまだ砂丘が発達せず、河川は幾筋も流路をつくり蛇行し、いたるところに潟湖や三日月湖が残り、現在の景観とはかなり異なっていたと考えられる。

また、河川覆土の理化学分析からはこれらの河川に沿ってクリ・クルミ・ナラ等の河畔林があったことが想定されている。

農業經營及び居住域として好適な場所は、後背湿地をかかえた自然堤防上の微高地であり、そこに遺跡が集中するのは当然であろう。従来の発掘調査においても建物跡等がこの微高地に重なり、帶状に連なって存在していることが確認されている。

### 2 歴史的環境

#### (1) 周辺の遺跡について

これまで発掘調査の成果をふまえ、宮ノ下周辺の遺跡について概観したい。遊佐町には平安時代の遺跡が多く確認されている。ほ場整備事業に関連して現在まで30余りの遺跡が調査されている。それら多くは赤焼土器を主体とする遺跡であり、年代的には9世紀後半以後が当てられる。殆どの遺跡で遺物包含層の前後に灰白色火山灰が検出される。これは理化学分析の結果から十和田a(To-a)である可能性が高いとして、年代比定の重要な根拠ともなっている。『扶桑略記』延喜15(915)年7月13日条に所見する出羽国に降った火山灰である。概して一般集落の様相がつよいが、遺物・遺構等からみて注目される遺跡も少なくない。公的施設を伴う、或いは公的性格を帯びると考えられる遺跡について述べたい。官衙的な配置の大型の掘立柱建物跡が検出された下長橋遺跡は遺物の面からも多くの縄文・灰釉陶器、地鎮のための埋設土器等が出土し、墨書き土器にも「如件」という文章体が所見される。小深田遺跡や中田浦遺跡、大坪遺跡では板材列が検出され、圍繞施設を有することが推定される。小深田遺跡は「田家」を含む47点、大坪遺跡では130点の墨書き土器が確認されている。とくに大坪遺跡からは「葛」(甘葛)の負担者を記録した木簡と19点の灰釉陶器が出土している。小深田遺跡、北目長田遺跡や上高田遺跡からはヘラ切り須恵器环が多く出土しており、9世紀前後にさかのぼる可能性も指摘されている。明確に官衙とは

断じられないが、一般集落とは異なる要素をもつことは確かであろう。剣龍神社東・西窓跡や天狗森・唐戸岩窓跡等まだ未調査ながらも8～9世紀前半における窓跡が東部丘陵に確認されている。その内最も古いと推定される剣龍神社西窓跡は本遺跡の東方約500mの所にあり、8世紀第3四半期頃に比定されている。

## (2) 古代における飽海の歴史的背景

和銅元年（708）に出羽郡、その4年後の和銅5（712）年には陸奥国最上郡と置賜郡を加えて出羽国がつくられた。東海・東山・北陸より移民が出羽柵の柵戸としておくられた。律令制支配を行うにあたって、人口不足を補うための措置であろう。当時出羽国府・出羽郡衙も含むと推定されるこの出羽柵の所在地は未だ解明されていない。その後蝦夷に対する前線は天平5（733）年に一気に秋田まで北上し、秋田城がつくられる。軍事的拠点として先ず城柵を核に、その内部から支配を漫透していくと考えられる。抵抗する蝦夷にはおそらく軍事的な武力というよりは饗応等柔軟の手段が用いられた。一定期間彼らの生活様式は保証され、その範囲で負担を課していたと推測される。それが一般的な律令制的税負担を強いるときには集団として蝦夷は激しく抵抗することになる。ただ最前線はあくまで秋田であり、庄内ではない。軍事的な緊張は一律には論じられないし、歴史的位置についても異なるが、蝦夷と生活領域を接し、対峙している秋田のいわば後方支援を担い、軍事的物心の供給地として最上川以北の地域は期待されていたのではないか。

しかし、いまは美田が広がり、我が國でも有数の穀倉地帯となっている庄内平野も8・9世紀段階は多くの中小河川が複雑に蛇行し、それらに沿う形で自然堤防が帶状に連なり微高地を形成していた。その周辺には後背湿地が広がり、田地とするにはかなりの労力を強いる所ではなかったろうか。現在の地形・景観をこの時代にも想定することはできず、生産力も低かったことが予想される。何より開発・整備に携わる人口の不足が深刻な問題であった。かかる事情は越後国においても同様であったことが指摘されている。が、『日本三代実録』仁和3（887）年5月20日条により、この段階で出羽郡井口に出羽国府が所在していたことは明白な事実である。また、これまでの発掘調査によって、酒田市・飽海郡内にはほぼ同時期に形成される多くの集落があることも明らかである。国府周辺に広がる集落は密接な関連をもち、強い支配下にある計画村落であることも自明であろう。

井口国府については正殿と東西脇殿をもつ政庁が調査され、確認されている酒田市城輪柵跡が有力な候補地である。その創建期は延暦年間説と弘仁年間説があるが、ここに周辺集落との時期的な隔たりが生じ、井口国府に先行する集落あるいは遺跡が極めて少ないと指摘される。出羽国は職員令規定によれば大国であり、国府に出仕する官人・掾丁の人員は500人以上を数える。その家族を含めれば、最低でもこの3倍か4倍の住民がこの地域に居住し、集落が営まれていると思われる。国府が行政的に機能しているならば、創建期に先行しないまでも同時期にかかる相当の集落があったのではなかろうか。当時の建郡は領域的な支配が先行し、その後確保した地域に人々を移住させ生産基盤をつくる方法がとられており、それは出羽郡において、また、そこから分かれた田川・飽海郡においても

同じ事情と推定される。

本遺跡が所在する飽海郡は『統日本後紀』承和7(840)年7月26日条が史料的初見であるが、秋田城第25次調査で出土した木簡には「飽海郡」の文字が所見し、天平6(734)年から天平勝宝5(753)年の間には成立していたことが知られる。

しかし、形成期の集落を追究するため、これまで調査した遺跡から出土したヘラ切り須恵器に着目してみると量的に多い地域は酒田市生石2遺跡・平田町桜林遺跡周辺及び遊佐町上高田遺跡・宮ノ下遺跡周辺にほぼ限定される。この段階では平野部にまで及んでいないように感じられる。前述の如く須恵器窯跡で最も古いとされる劍龍神社東・西窯跡でさえ8世紀前半まではさかのばらない。絶じて先のヘラ切り須恵器坏も同様である。確かに8世紀前半に郡は建てられたが、発掘調査の成果からはその段階では殆ど集落は形成されていず、後葉頃から徐々につくられ9世紀後半になって急増したと理解されるのである。その間出羽郡井口に国府が創建された。これまでの土器編年に大過なければ、国府創建時出羽・飽海郡域の集落は極めて地域的に限定されており、人口も希薄であったことが推測される。然も、その後しばらくの間同じような状況は続いたと考えられる。この地域における集落の増加・整備は9世紀後半にかかる。宮ノ下遺跡はD区河川跡周辺は井口国府創建後まもない頃、A・B区は相当の整備が進んだ後にそれぞれ形成されたのではなかろうか。

### 3 遺跡の層序

調査区全体にわたり、かなり削平されており、平安時代の地山が削られ遺構の遺存状態は良くない。羽越線側の土層観察により、本遺跡の基本層序について述べたい。

#### A・B区

- I 10Y R3/3暗褐色シルト…耕作土
- II 10Y R3/2黒褐色シルト…耕作土
- III 10Y R2/2黒褐色シルト(炭化粒・土器含む)
- IV 10Y R4/2灰黄褐色シルト(炭化粒・土器含む)
- V 10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルト…地山

#### D区

- I 10Y R4/1褐灰色シルト…耕作土
- II 10Y R5/1褐灰色シルト…耕作土
- III 10Y R5/3にぶい黄褐色砂質シルト

A・B区では上部2層が表土=耕作土であるが、下にいくほどしまっており、粘質を帯びてくる。次のIII・IVが遺物包含層であり、赤焼土器破片等が目立つ。A区では2~4cmの厚さでほぼ全域で所見され、とくに中央部では羽越線に向かって遺構が多く絡んでいることが確認された。B区ではQ-10グリッドの南西以後の断面においては殆ど黒褐色及び灰黄褐色のシルト層は確認されず、耕作土直下が地山層という層序である。遺構検出面は調査前の耕作土から20~30cm下である。

D区については耕作土下のにぶい黄褐色砂質シルトが地山面であるが、削平のためか遺物包含層はほとんど確認できない。南隅には疊層がみられる。

### III 検出遺構と出土遺物

#### 1 遺構・遺物の分布

##### (1) 調査区全体の概要

今調査区はほ場整備に関連して削平等やむを得ず影響を受ける箇所について行った。遺跡全体から見れば、北端及び南端に位置する部分に該当している。それぞれ北端部分A・B区の2ヶ所=面積で約5,500m<sup>2</sup>、南端部分はC・D・E区の3ヶ所=面積で約1,800m<sup>2</sup>を面的な調査対象としている。更に水路・管水路の掘削部分=面積で約2,850m<sup>2</sup>について2m幅で縦掘りの調査も行った。限定されながらも調査は遺跡全体にかかるものである。

遺跡中央部をJR羽越本線が走っており、これを挟んで遺跡は東西に分かれている。全体的に遺構の遺存状況は決して良いものではなかった。相当の削平を受けており、本来の起伏に富んだ地形は殆ど原形をとどめていない。とくに羽越本線の両脇は敷設時の盛土に伴う土取りの跡がみられ、また、昭和20年代のほ場整備の際の削平も結果的に遺構等を破壊することになった。本遺跡は庄内高瀬川の自然堤防上に立地したと考えられるが、周囲と比べて高い所に位置する居住域は削平され、ある程度の深さをもつ例えれば溝や河川等は削平を受けながらも遺存した。土壌や柱穴等については概して上面が削られ、底面に近い部分が遺存したものであろうと考えられる。羽越線東にあるC区とE区については遺構は検出されなかつた。

以下遺構が検出されたA・B・D区及び水路・管水路部分の調査区について遺構と遺物の分布を述べていきたい。

##### (2) 調査A・B区

遺跡北端に位置し、面積では最も広く調査している。羽越線を挟みA区と反対側の水路部分は平成4年に調査が行われ、井戸跡や溝跡が検出された。A区は線路に近い所で一部土取りの跡が見られるものの遺構の遺存状況は良好であった。掘立柱建物跡5棟をはじめ、溝跡・土壌・井戸跡等が確認され、遺物の出土も多かった。遺構は後述するがSD73溝跡を境としてその東に集中し、西には全く見られないことからこの溝は集落の境界的な意味をもつものと思われる。遺構はA区中央部で集中的にみられ、更に羽越線の方に延びており主体をなす建物等は線路下にあると推測される。土器は85%以上を赤焼土器が占めており、須恵器の割合が低いことが特徴的である。墨書「伴」は全体で21点出土したが、その内の19点がA区からであり、SE266井戸跡の検出火山灰とともにこの集落が営まれた年代を探る大きな手掛かりを与える。先のSD73からは土器や石・木の投棄場が確認され、7箱の土器が出土した。

B区は全面とも相当の削平が行われ、平安時代にかかる遺構は殆ど破壊されており、検出されたものについても底の部分と考えられる。遺物の出土も約3箱と少ないが、A区に近接する所からはヘラ切り須恵器壺の底部等も出土し、遺物的には先掲SD73溝跡及びその周辺と比較して、先行するものが多い。SD549溝跡と平行するSA1ピット列や総柱の

掘立柱建物跡 1 棟、また、これらの検出面より 15cm 程度下の面で確認された S D 649 溝跡等が注目される。A・B 区は当初農道によって分けられていたが、A 区から建物跡が続いていることが予想され、この農道を取り除いた。このため両区は最終的に連続する調査区となつた。この S B 5 掘立柱建物跡は全体が確認され、母屋と推定された。

#### (3) 調査 D 区

羽越線東に位置する調査区は面的には C 区から E 区まで 3 区あるが、前述のようにかなりの削平が行われ、遺構が検出されたのは D 区のみである。当時は上流部から枝分かれして河川は幾筋もの流れをつくり、堅固な護岸工事が施された現在とは全く異なる様相を呈していた。庄内高瀬川水系に連なる幅 6m 程の河川跡が D 区東から検出された。西側道路沿い近くに深さ 5cm 程度の浅い溝が切られているが、その西には疊層が広がり河川敷と推定される。検出した河川は南から北に流れていると推測されるが、その左岸に居住域を形成していた。柱穴が数多く検出されたが、建物の確認には至らなかった。右岸においても左岸と同じ墨書き土器が出土しており、同様と思われるが削平され、また北目新堀が掘削され遺構は検出されない。この S D 1200 河川跡覆土 1 層には灰白色の火山灰が含まれ、遺物はその下層から出土している。下層は削平を免れ、遺物の遺存が良かったのは深さのある河川であったためである。8 箱の土器と 30 箱に及ぶ木製品が出土した。土器は須恵器が多く、坏類ではヘラ切りが主体的であり遊佐町では初めての例である。

木製品においても出土点数としては酒田市・鮫海郡内にとどまらず県内においても特筆すべきもので、貴重な資料となる。また、墨書き土器は 52 点確認され、「大伴」が 2 点含まれるが、A 区で多く見られる「伴」は全く出土していない。

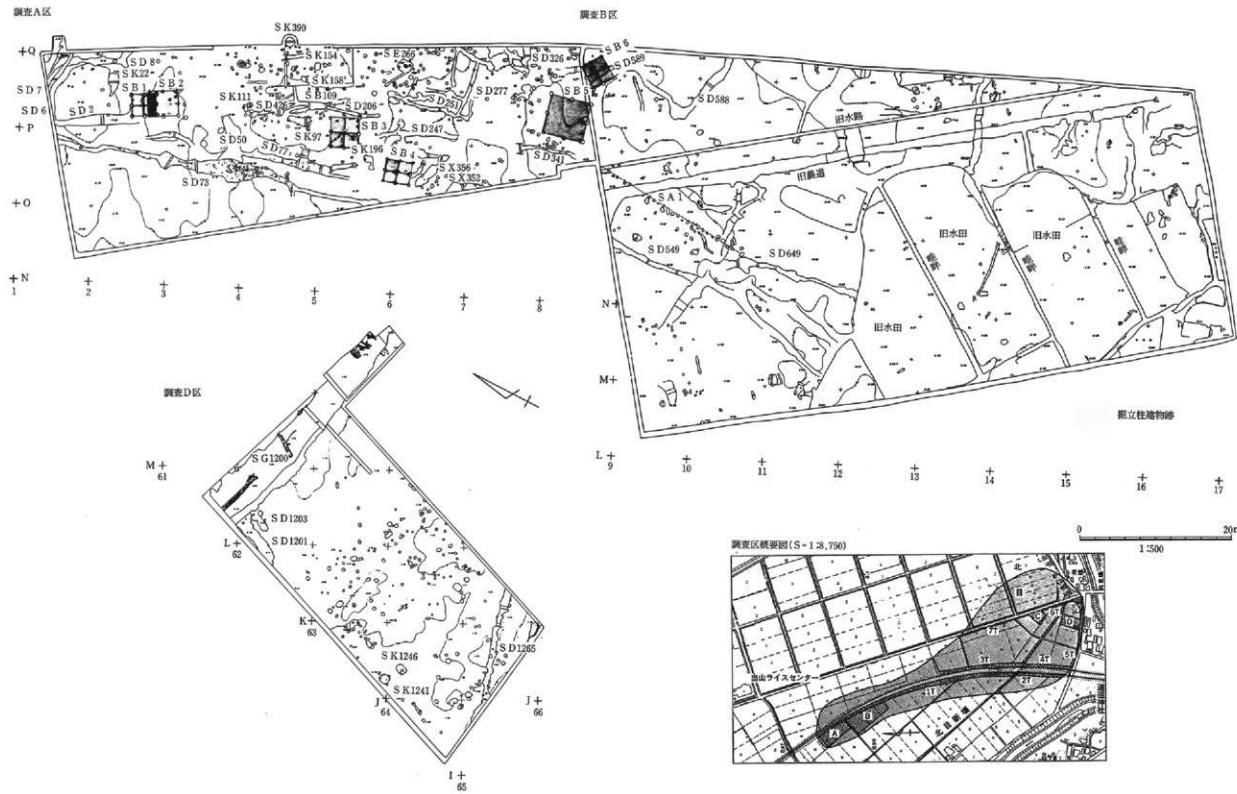
#### (4) 水路・管水路付設調査区

遺跡南北端を面的に調査したが、水路・管水路がつくられるためにそれらをつなぐ形で 2m 幅の線掘り調査を行った。羽越線西では線路沿いに B 区から連続して 1T、2T と設定した。1T は削平が甚だしく、等間隔で近・現代の畦畔が確認され遺物の出土も少ない。2T では北目新堀の南約 10m の地点で幅 3m、検出面からの深さ 30cm の溝跡が 1 条検出され、その周囲に直径 40cm 程のピットも 5 基みられ、この地点からは合わせて赤焼土器と内黒土師器が 2 袋出土した。D 区及び 4T で検出された河川跡が全く検出されなかった。羽越線東に 3T ~ 7T が位置する。3T は泥炭地であり、遺構は全くみられない。

4T は北目新堀南約 2m の所に D 区の SG 1200 と同じく、樹木が重なり合う河川跡が検出され、遺物としてはヘラ切り須恵器高台付坏が 1 点のみ出土し、更に線路側に向かってつながることが確認された。が、概して線路際ほど削平されていた。

5T は柱穴が多く確認され、その中には SG 1200 河川跡出土の墨書き「宜」と同筆のヘラ切り須恵器坏が出土したものがあることから、D 区に面的に連続する居住域である。赤焼土器が出土した土壤 1 基も検出された。

6T は道路敷設にあたり、土取りが行われ C 区との境付近で墨書き「宜」が出土しているものの遺構は確認されない。7T は安定した比較的堅い地盤であるが全く遺構が検出されない。



### 第3図 遺構配置図

## 2 堀立柱建物跡（第4～6図）

建物跡はA・B区で合計6棟確認している。その内4棟は確実に総柱建物であり、SB5のみ母屋であると推測される。柱根が遺存しているのは3棟あり、何れもクリ材が用いられており、柱材としては周辺遺跡でも広く使われているものである。

以下建物規模及び主軸傾き等について述べたい。

**SB1** Q-3グリッドに位置している。桁行、梁行ともに2間の総柱の堀立柱建物跡である。東西軸より南北軸が0.5m程長く、真北から32°西に傾く南北棟である。柱間寸法は桁間が1.6m（約5尺）、梁間が1.2m（約4尺）である。EB25・EB27・EB29・EB31・EB38には各々直径40cm前後の柱根が遺存している。掘り方深さは約25～40cmである。SD2溝跡が建物北柱列を切っているが、溝跡は後世のものである。

**SB2** Q-3～4グリッドに位置している。北側がSB1と重複しているが時期的にはそれより新しいと考えられる。傾きはSB1より1°東に向くがほぼ同じような傾きである。桁行、梁行ともに2間であるが、間尺がSB1より広く規模としてはひとまわり大きい。EB57には直径40cm程の石がおかれており、礎石というよりは廃絶時に投げ込まれたものであろう。

**SB3** P～Q-6グリッドに位置している。SD109・206に東辺で隣接している。桁行、梁行とも2間の総柱の堀立柱建物跡である。東西軸が南北軸より0.2m程短いがほぼ方形の建物である。覆土は黒褐色砂質シルトであり、先の2棟と比べると黒っぽい感じがする。

掘り方の径は40～50cm、深さは20～30cmと浅く、柱根は遺存していない。周辺部には柱穴（SP431）を含むピットが数多く見られ、周辺に居住していたある時期における主体的部分をなすと思われる。赤焼土器が多く出土しているSD109とほぼ同じ傾きをもつことから、この溝とは密接な関わりを有する。

**SB4** P-6～7グリッドに位置している。SB1建物跡とほぼ同規模で総柱の堀立柱建物跡である。小規模な倉庫と考えられる。桁行・梁行とも2間で主軸は真北から20°西に傾く。南北軸が東西軸より0.4m長く、南北棟である。柱間寸法は桁間が1.7m（約5尺）、梁間が1.3m（約4尺）を測る。掘り方の径は40cm、深さは25～35cmであるが、柱根の遺存状態が良く、EB368・EB369・EB370・EB371・EB373・EB374にみられる。また、EB372とEB375にも柱根の一部と思われる材が残る。

**SB5** Q-8～9グリッドに位置している。A・B区で検出された建物跡の中で唯一明確な母屋であり、桁行、梁行とも2間であるが、柱間寸法が広く7～8尺あり、規模はSB1・4と比べて約3倍、SB3と比較しても倍近い広さをもつ。掘り方の径は約50cm、深さは約30～40cmある。掘り方覆土の土層をみると何れも柱根が腐食したような痕跡がないことから居を移す際に抜き取られたものと考えられる。東西軸に比べ、南北軸が0.3m程長いがほぼ方形の建物といえる。建物西側にはSD341溝跡が通っているが、同じ傾きでありこの建物にかかる雨落ち溝かと推測される。この周辺部にはピットが多く見られ、また、ヘラ切り須恵器壺の出土もA区の中では多い。

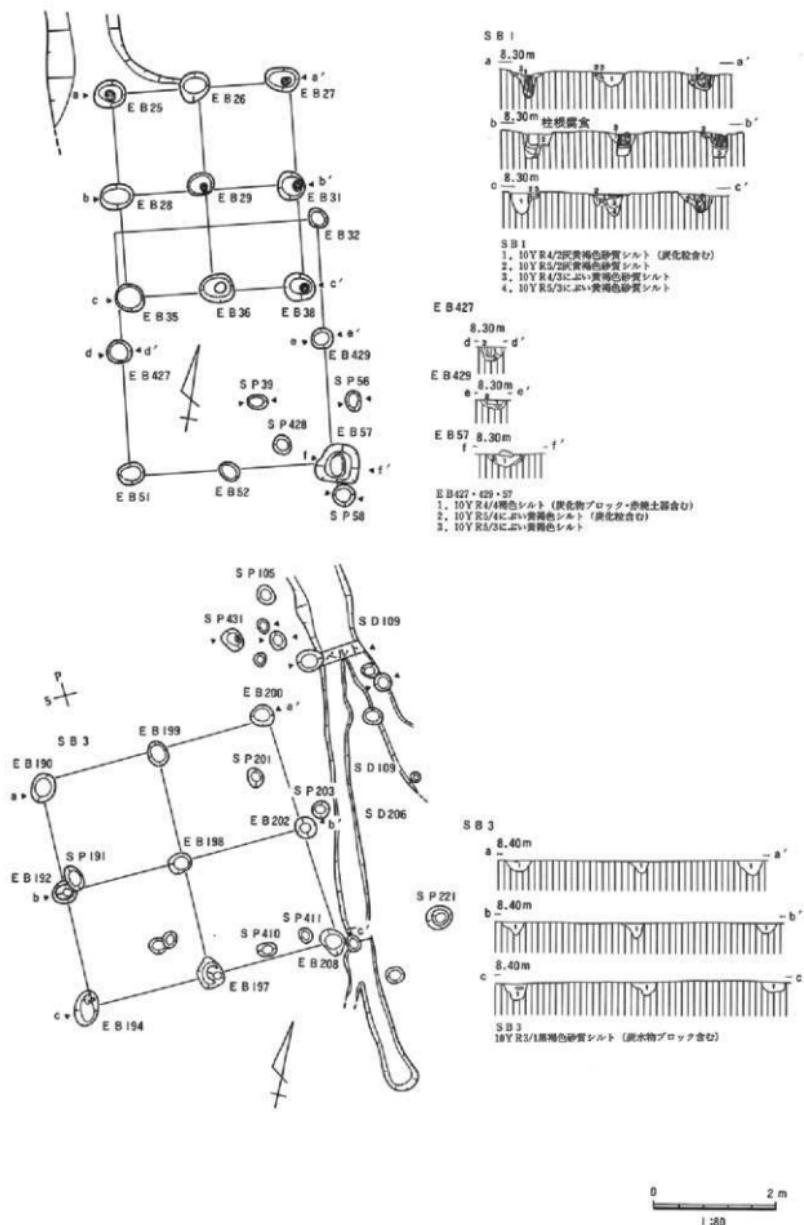
S B 6 Q～R-9 グリッドに位置している。桁行、梁行とも 2 間でほぼ方形の純柱の建物跡である。規模は S B 4 に等しい。柱間寸法は 1.3～1.6m を測る。E B 783・E B 526 にはクリ材の柱根が残る。南北軸は 57° 西に傾き、他の建物とは異なる。掘り方は 40～48cm、深さは 30cm 前後である。東及び南周辺はかなりの削平を受けている。

以上検出された建物跡について概観したが、建物としては周辺遺跡と比較しても全体的に小規模なものが多い。また、6 棟の内 4 棟が純柱の建物であり、倉庫と考えられ、それらの立地が居住域の境近くにあることも注目される。傾きや覆土からみて、これらは同時期にかかるものではなく、10世紀初頭を前後しての時期差が想定される。とくに前述のとおり、S B 5 はその周辺部においてヘラ切り須恵器壺の出土が多いことから他の建物に先行する可能性がある。S B 3 の周辺は柱穴を含むピットが多数検出され、炭化物等の拡散も確認され、煮炊きが広く行われたことが窺え、ある時期の居住の主体的な場所であった。その東西に位置する S D 109・73溝跡から多量の赤焼土器が出土していることは居住時期を追究するうえで大きな手掛かりを与えてくれる。先のピット等の遺構は更に面的に東の羽越線側に延びており、また、線路東側で井戸跡が検出されていることからもこの倉庫を付属する母屋については今調査区の東に所在すると推測される。

表1 摂立柱建物跡観察表

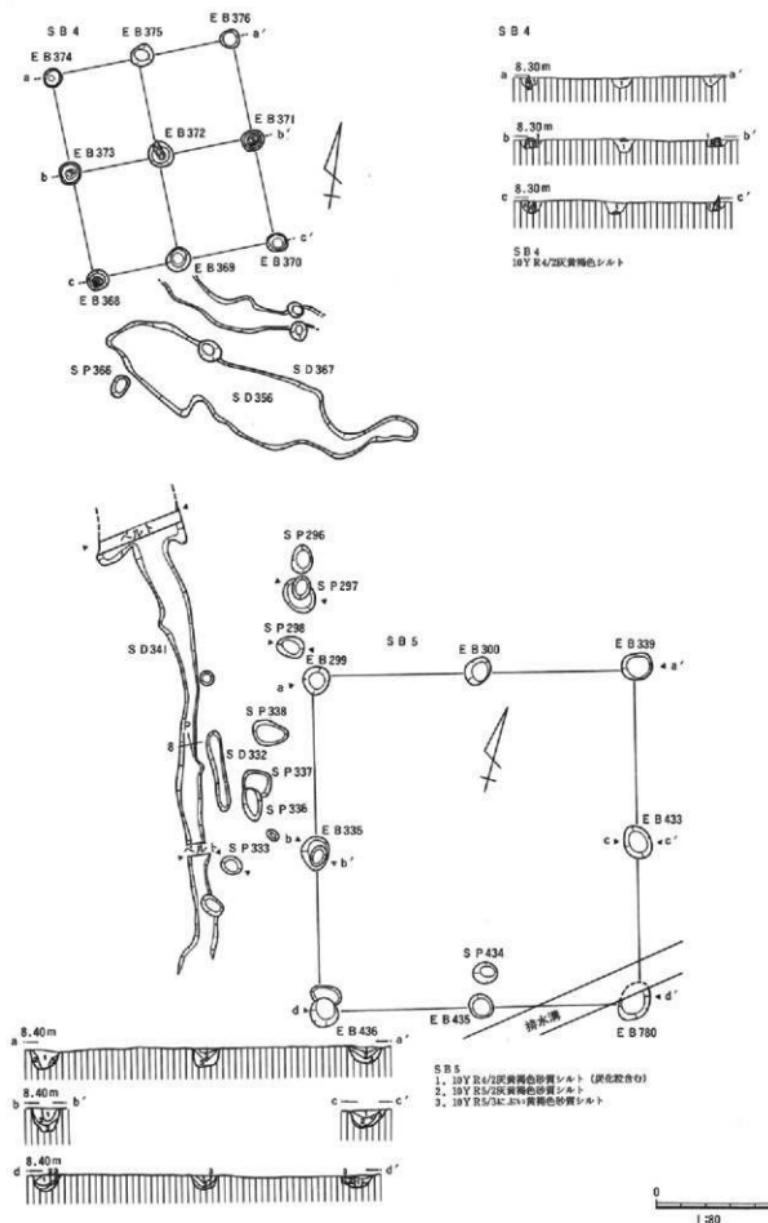
遺物番号	所 在 グリッド	長軸方向	規模(桁行×梁行m) 面 積(m <sup>2</sup> )	柱 間 寸 法	備 考
S B 1	Q-3	N-32°-W 南北棟	2間2間(3.4×2.9) 9.9m <sup>2</sup>	桁間1.6m(5尺) 梁間1.2m(4尺)	純柱・柱根(クリ材)
S B 2	Q-3～4	N-31°-W 南北棟	2間2間(4.0×3.4) 13.6m <sup>2</sup>	桁間1.9m(6尺) 梁間1.4m(4尺)	S B 1 と一部重複
S B 3	P～Q-6	N-24°-W	2間2間(4.0×3.8) 15.2m <sup>2</sup>	桁間1.9m(6尺) 梁間1.6m(5尺)	純柱
S B 4	P-6～7	N-20°-W 南北棟	2間2間(3.4×3.0) 10.2m <sup>2</sup>	桁間1.7m(5尺) 梁間1.3m(4尺)	純柱・柱根(クリ材)
S B 5	Q-8～9	N-20°-W 南北棟	2間2間(5.5×5.2) 28.6m <sup>2</sup>	桁間2.6m(8尺) 梁間2.3m(7尺)	母屋
S B 6	Q～R-9	N-57°-W 南北棟	2間2間(3.3×3.1) 10.2m <sup>2</sup>	桁間1.6m(5尺) 梁間1.4m～1.3(4尺)	純柱・柱根(クリ材)

### III 検出遺構と出土遺物

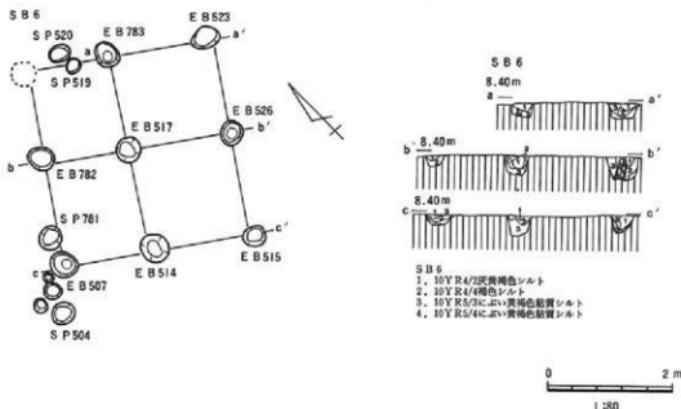


第4図 SB 1・2・3 据立柱建物跡

III 検出遺構と出土遺物



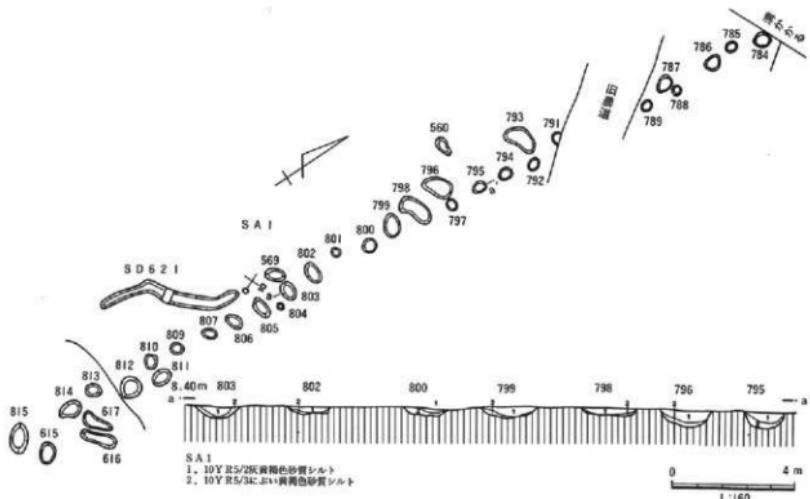
第5図 S B 4・5 挿立柱建物跡



第6図 SB 6 据立柱建跡

## 3 ピット列(第7図)

O-10からP-9グリッドにかけて連続するピット列である。1回目の面整理後、一定のまとまり・規則性を有することが想定されたが、更に10cm程度掘り下げた結果、B区所在的SP 815から704まで直線でつながることが判明した。上層はかなりの削平を受けているため不明だが検出面からの深さは概ね10cm前後と浅い。そのため材を打ち込んだ様相ではなく、また、大坪遺跡や小深田遺跡で検出されたような板材列の布堀り等も伴っていないと推定される。が、SD 549とほぼ平行して直線的に連なることは明白であり、SB 5西のピットまで続くことも考えられる。その性格に関しては今後とも重要な検討課題である。



第7図 SA 1 ピット列

## 4 土壙（第8・9図）

土壙は小規模のものが数基ある程度であり、遺物の出土も極めて少なく、性格不明のものが多い。A区では溝跡が多く見られるのに対して、土壙は少ない。

D区は前述の如く、S G 1200河川跡の左岸に居住域が確認されるが、全体的に地山自体が削平され、検出した遺構についても深さは10~20cm程度と浅く、底床に近い面と推測される。建物跡も確認されなかったが、いくつかの土壙が検出された。河川等が近いとそこが投棄場になり、遺物は土壙等に残らない場合が多い。

以下主要なものについて述べていきたい。

S K22 Q-3グリッド、S B 1・2 建物跡の北西に位置している。東西3m・南北0.3~1.5m、深さは検出面から20cm前後の壺状の形の土壙である。遺物は赤焼土器・内黒土器等が1袋出土している。器形はS B 1~2 建物跡及び調査区北隅に検出された S D 5~8 溝跡出土のものと同じであり、同時期と推定される。

S K97 A区Q-5グリッドに位置する。南北3m・東西0.7~1.3mで東に隣接するS D 109溝跡と同じ傾きをもつ。深さは16cm程度であり、覆土1・2層から赤焼土器の小破片が出土している。

S K111 A区Q-5グリッドに位置する。直径0.7mの円形土壙である。深さは12cmを測り、赤焼土器の小破片が出土しているが性格は不明である。

S K158 A区Q-5グリッドに位置する。南北2m・東西0.6~0.9m、深さは34cmあり、須恵器壺・赤焼土器破片が出土している。Q-4グリッドのS K66で根本と思われるものが出土しているが、この土壙と同じような性格であろうか。

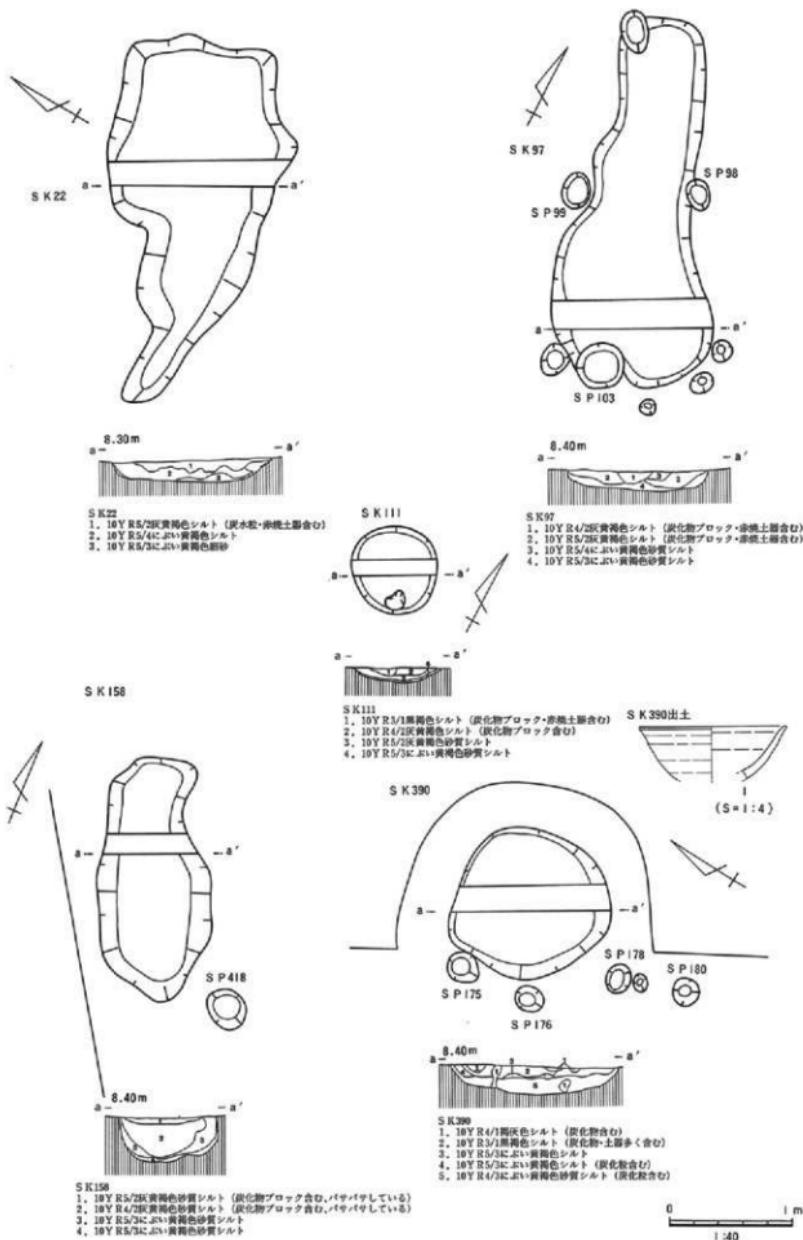
S K390 A区R-5グリッドに位置する。一部が調査区内で確認され、北西に少し広げて全体が検出できたが、直径1.3m前後の円形の土壙である。周囲は方形に土取りか盤下げの跡があり、上部が削られ横乱もみられる。赤焼土器を主として小破片が3袋出土しており、捨て場になっていたと考えられるが復元、図化できたものは1点のみである。

S K1224 D区K~L-64グリッドに位置している。周囲にピットのまとまりが認められるが、柱穴なのは不明である。径1.36mの不整円形で、10cmの深さである。

S K1241 D区K-64グリッドに位置する。径1.3mの円形で、深さは20cmを測るがグライ化しているため底床が判別しにくい。須恵器・赤焼土器・内黒土器等の遺物が3袋程出土している。二次加熱を受けて、火燐ね痕のある内黒土器について図化している。

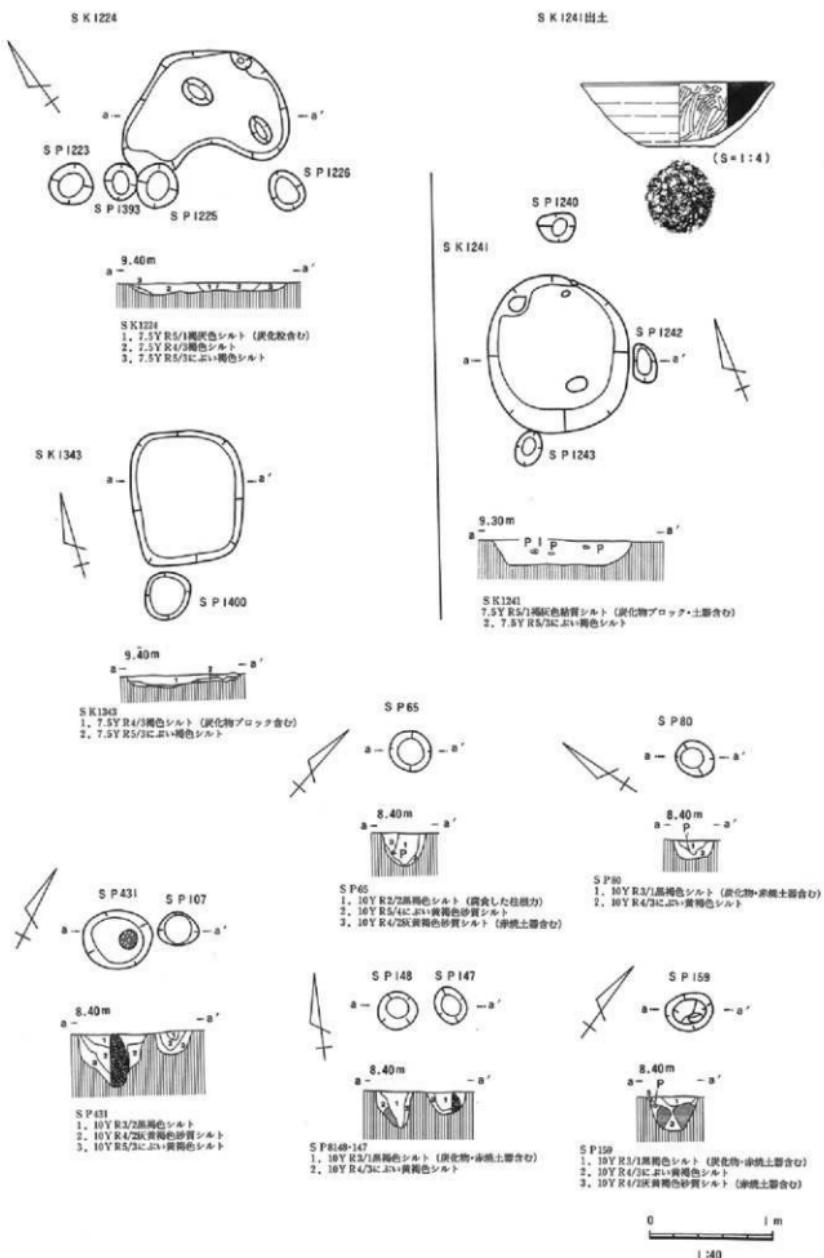
S K1343 D区L-65グリッドに位置している。長軸1.1m、短軸0.8mの隅丸方形である。深さは10cmである。

図に示したS P65・S P80・S P431・S P147・148・S P159については柱根の遺存が確認されるものと土器や石が含まれる典型的なものである。



第8図 土壌平面図・断面図(1)

III 検出遺構と出土遺物



第9図 土壌平面図・断面図(2)

### 5 溝跡（第10～15図）

調査A区で溝跡が多くみられ、赤焼土器を中心に遺物も比較的多く出土した。大別して、南北方向に走るものと東西に走るのがみられる。A区のS E266井戸跡あたりを境として南部分は東西に走るものが北部分に比べ多く確認される。溝がとくに集中しているのはSD109を主としてSB3建物跡の北東周辺で、ピットの集中する所でもある。溝は自然の高低差を巧みに利用して、排水を目的とした掘り込みと考えられる。当時の地形を勘案すれば、流れの方向は東から西に、そして南から北にと思われる。概して検出長は13m前後とあまり長くない。B区において検出された殆どの溝跡はかなり新しいものだが、A区に近い所でのSD549やSD649については覆土に含まれた土器から明らかに建物や井戸跡と同じ平安期のものである。また、このSD549溝跡の西には土壤やピット等の遺構が散在するが覆土中に炭化物を含むものではなく、性格不明ながら時期的には随分新しいと推定される。以下主要な溝跡について述べていきたい。

SD73 A区で最も長く検出されたものである。傾きはN-23°-Wである。約1.2～2.4m東にはほぼ平行してSD77が掘られている。この溝は傾きがB区のSD549と同一であり、ちょうど両方を結ぶ部分が調査区外になっているため確認はされないが、連続していると考えられる。そして、溝から西側には平安期にかかる遺構が認められないことからこの居住域の境界的機能をもつものである。こういった性格や機能を有す溝は他の遺跡でもみられ、単に排水だけではない溝のもつ機能に注目する必要があろう。

SD73のP-4～5グリッド地点で検出面から14～25cm下に土器や石等の捨て場が検出された。土器は覆土2～4層の細砂に含まれ、図示したように上下2面で出土したが、器形的にみて共通していることからほぼ同じ時期の投棄と推定される。全部で7箱の土器が出土したが、全体的に供膳形態土器が多いが、須恵器坏は殆どみられない。赤焼土器坏が主体的であり、使用及び廃棄年代を端的に示すものである。20の土器は体部下にケズリがあり、底部に延痕のみられるものが1点含まれ、土師器であろう。周辺では木原遺跡に土師器坏と甕に類似がある。

出土した赤焼土器坏は底部は全て回転糸切りであるが、底部から口縁部にかけての立ち上がりや口唇部のつくり等の特徴により次の5つに類型化できる。

- (a) 底部から口縁部にかけて体部が直線的にひらくタイプ(31・32・33・41・31・67・77等)
- (b) 底部から丸味を帯びて立ち上がり、やや内弯するタイプ(19・25・51・61・78等)
- (c) 底部から丸味を帯び、やや内弯して立ち上がり、口唇部で外反するタイプ(9・26・30・44・66)
- (d) 底部から丸味を帯び、やや内弯して立ち上がり、体部の口縁部近くの3分の1あたりから外反するタイプ(14・63・76・87)
- (e) 口径が15cm以上の比較的大形のタイプ(15・38・57・61・65)

内黒土師器では無台と有台のものがある。須恵器坏ではD区河川跡で出土しているヘラ切り坏で墨書「木」と同じものが1点確認される。墨書土器は全部で13点出土しているが、

赤焼土器坏が6点・須恵器坏が4点・内黒土師器が3点であり、出土数に対しては須恵器に墨書きされる割合が高いことが窺える。それらの中でとくに注目されるのは「伴」であり、A区で特徴的な墨書きである。また、79の「四天王」及びその右に記された「導」も遺跡の性格に関わる興味深い墨書きと思われるが、その背景等については今後の課題である。「導」は特異な墨書きだが、周辺の大坪遺跡で所見例がみられる。

S D77 先のS D73のすぐ東に位置する。幅0.6~1.2m、程度の狭い溝跡だが、土層が5袋出土している。器形としてはS D73の(d)を除いたタイプがみられ、S D73に共通していることから推してほぼS D73と同時期のものと考えられる。4のような糸切り須恵器坏が含まれる。墨書き「伴」も1点確認される。

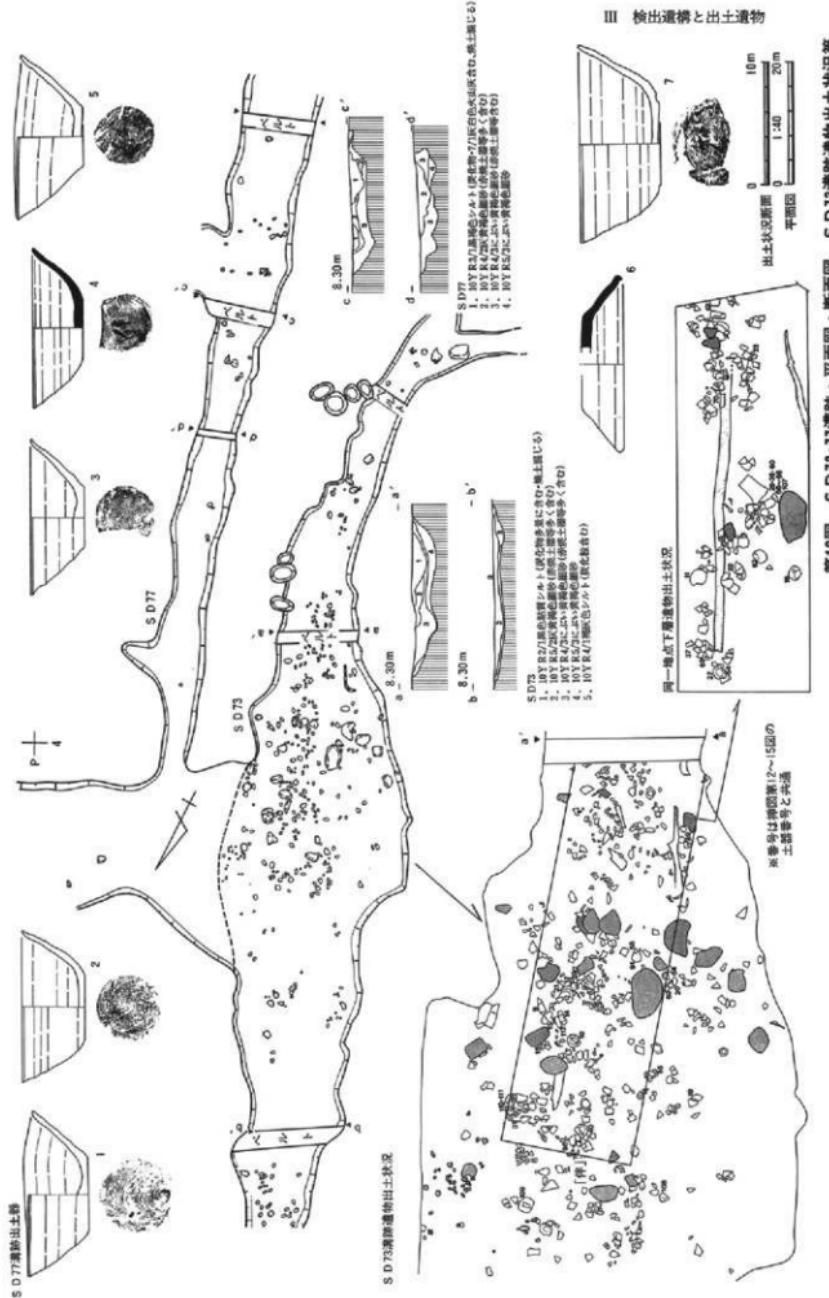
S D341 S B 5 種類の跡のすぐ西に位置し、その南北軸にはほぼ平行する。幅0.3~0.6m、検出面からの深さ8~12cm程の浅い溝である。断面の観察から南から北に流れることが確かめられ、建物に関わる雨落ち溝かとも思われる。この溝と建物の間にピットが所在し、溝を切っていることから、これらが前述のS A 1 ピット列に連続するものと考えられるなら、時期的に溝が先行していたととらえ得る。

S D109 S B 4 建物跡の東に隣接する。S D73と同じ傾きをもつ。幅0.4~1.0m、その周辺部に柱穴が集中しており、居住域の中心をなしていた所と推定される。これらの柱穴は溝を切っており、時期的に新しいが溝跡から出土している土器は赤焼土器が大半を占めており、時期差はさほどないと考えられる。建物との関係についてはE B208が溝を切っていることから建物の方が新しい。

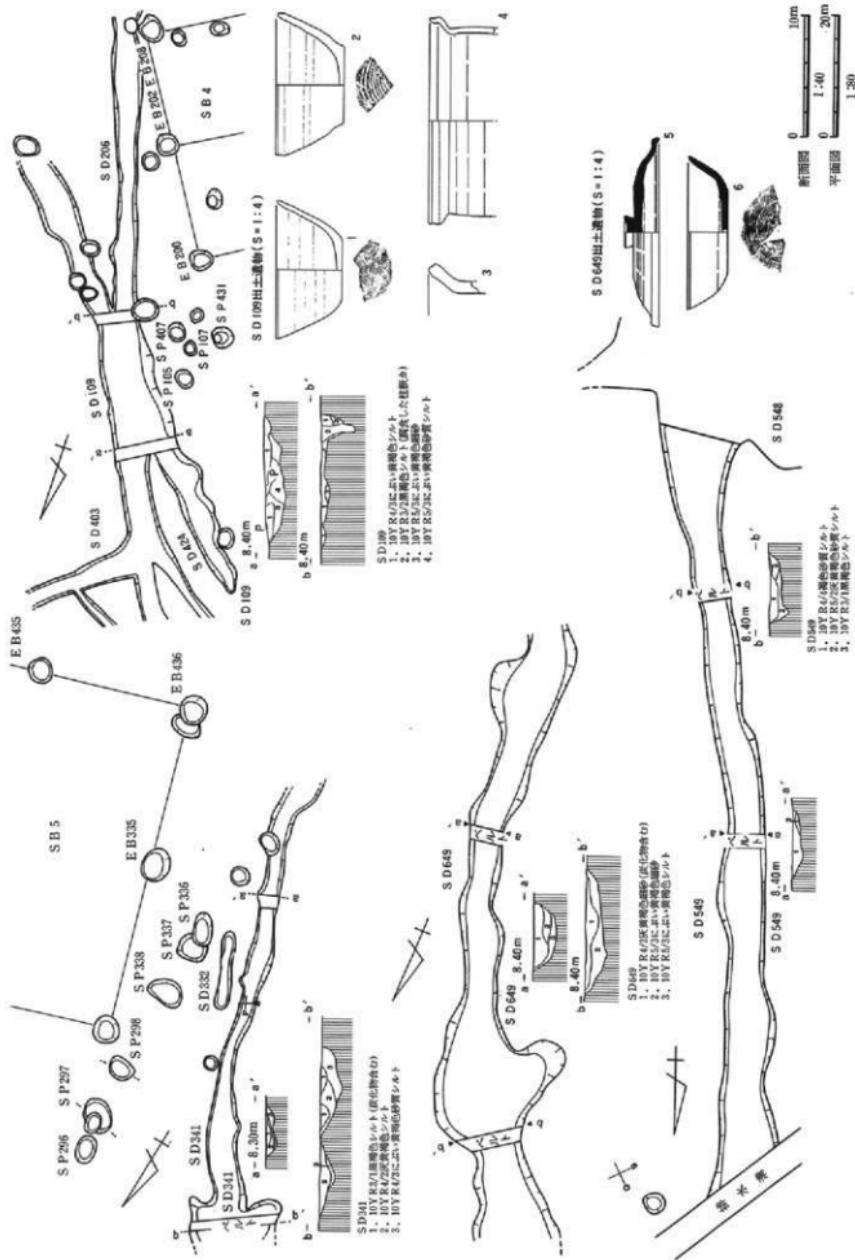
S D549 B区のO-9~11グリッドで検出された。幅は0.7m前後、検出面からの深さは上部がかなり削平されており、10cmと浅い。赤焼土器が1袋出土している。南にもっと続くと推定されるが新しいS D548溝跡に切られて検出できなかった。東にピット列がみられるが、それとほぼ平行している。また、先のS D73とも同一の傾きをもつ。S D73との間が調査区外になるため確定されないが、連続した溝と考えられるのではなかろうか。その機能については前述のとおりである。

S D649 B区のO-12グリッドで検出された。1回目の面整理では確認されなかった溝跡である。幅0.6~1mで南から北西に向かって緩やかに曲がる。傾きは北に位置するピット列、S D549とは異なる。深さは検出面から40cmを測り、この調査区で検出された溝跡の中では最も深い。遺物は2袋出土したが、須恵器の割合が高く、A・B区の中では最も古いと推定される。6のヘラ切り須恵器坏はD区河川跡で出土しているものと同時期である。この溝の存在から周辺部においてもD区と同時期にかかる遺構が所在したことが窺える。しかし、上部が相当削平され、結果的に検出できなかった。

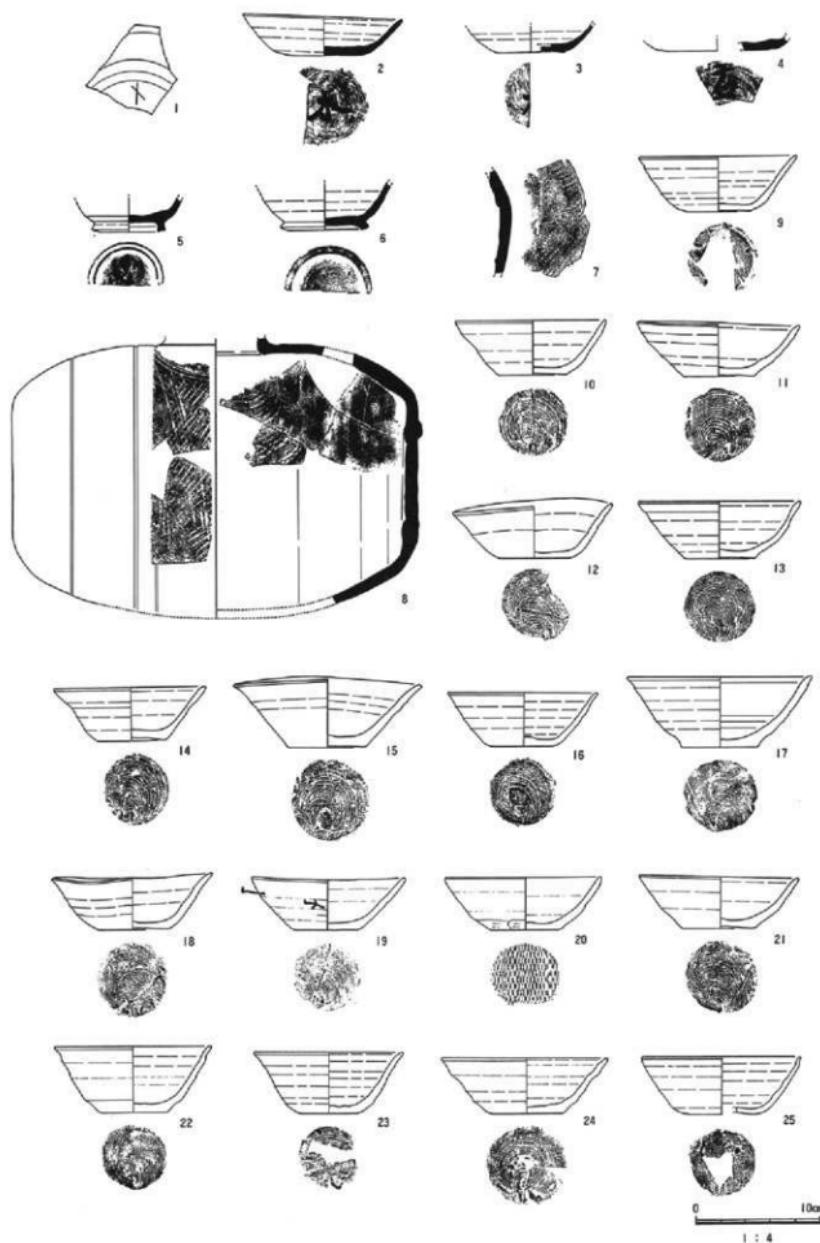
### III 検出遺構と出土遺物



III 検出遺構と出土遺物

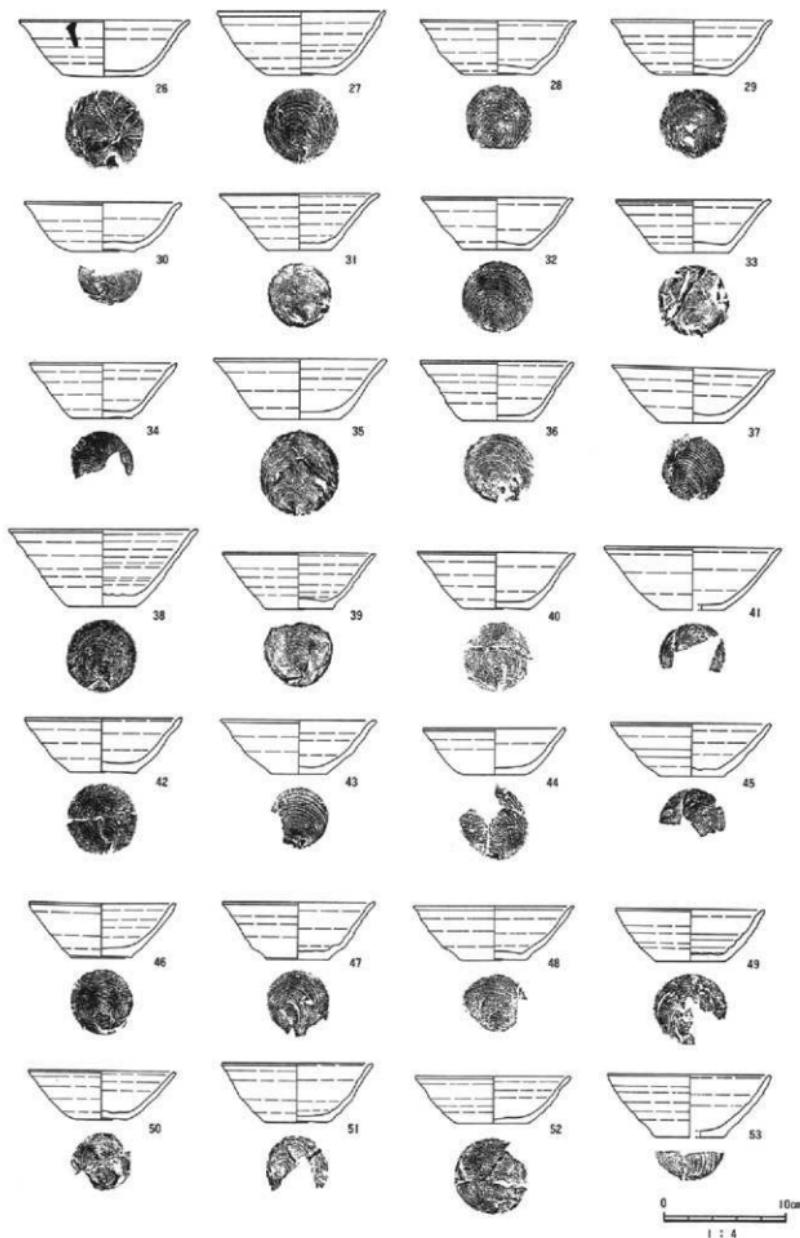


第11図 SD 549-649溝跡平面図・断面図

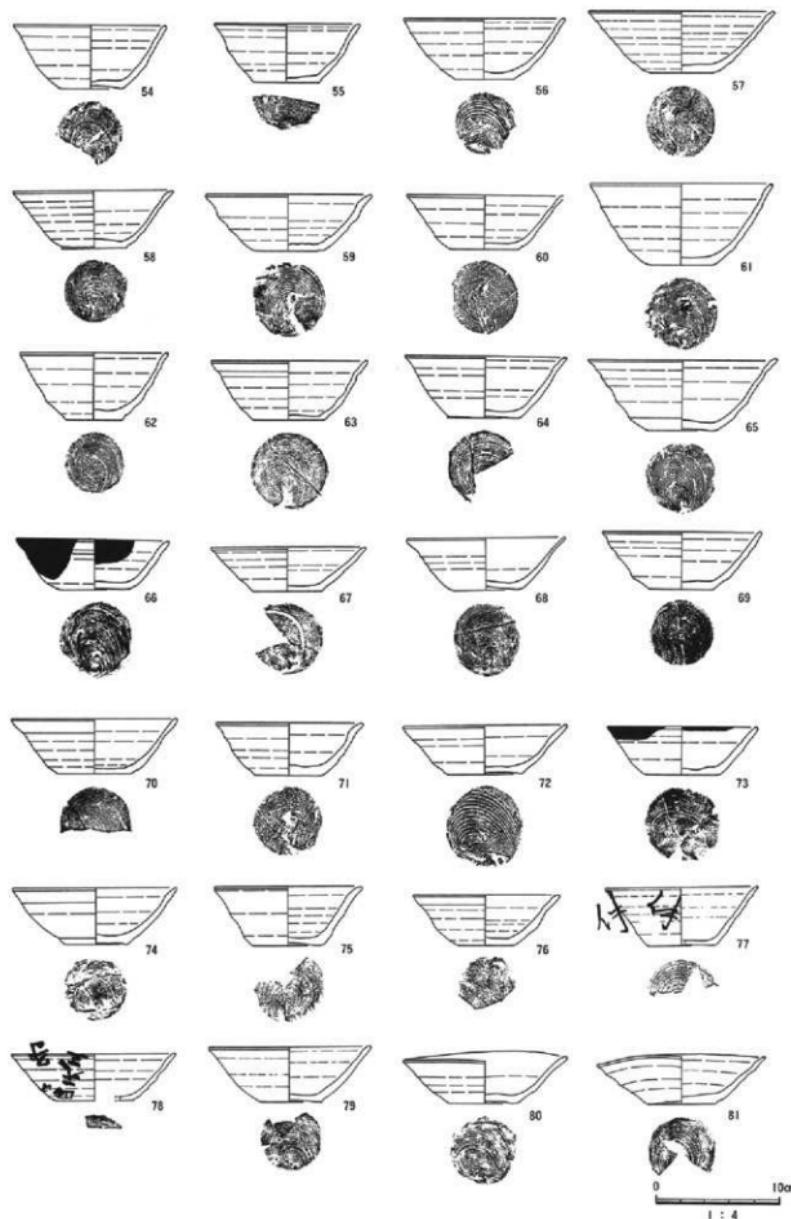


第12図 S D73溝跡土器実測図(1)

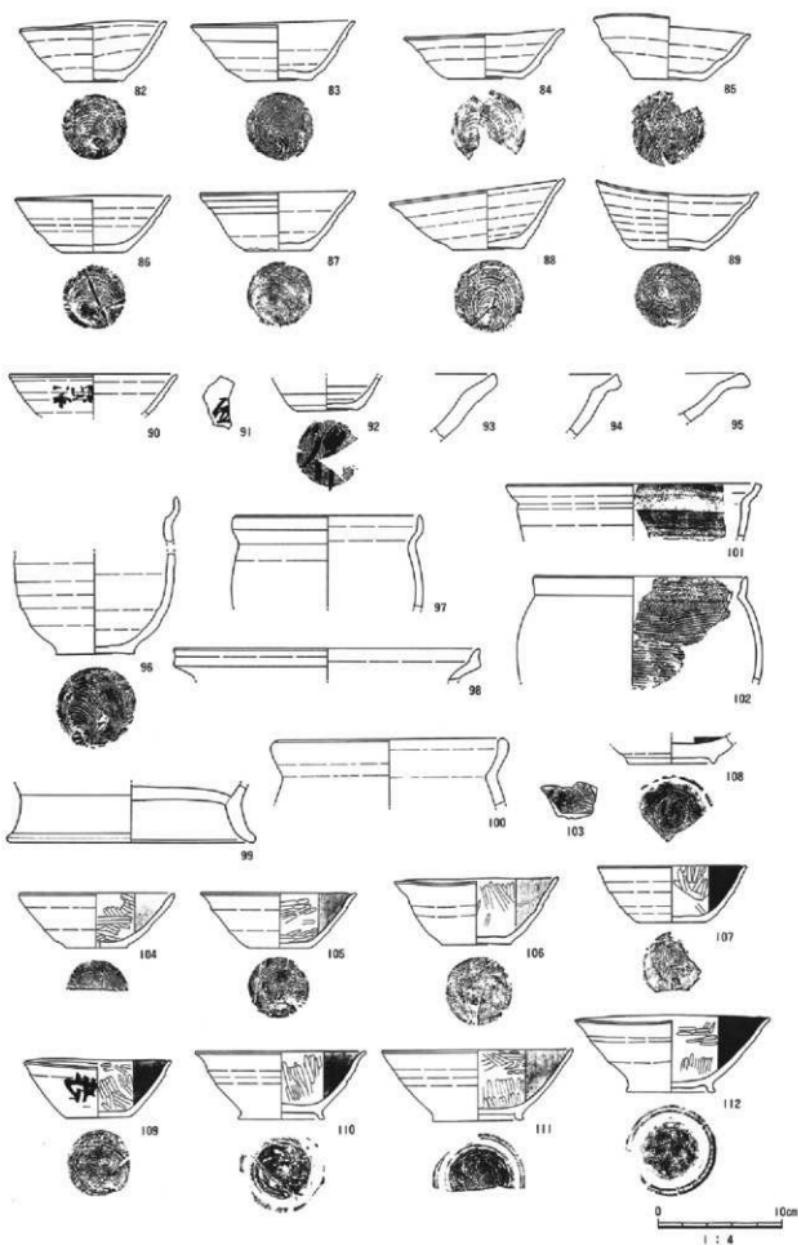
III 検出遺構と出土遺物



第13図 SD73溝跡土器実測図(2)



第14図 S D73溝跡土器実測図(3)



第15図 S D 73-77溝跡土器実測図(4)

## 6 井戸跡 (第16図)

調査区全体を通じて井戸跡が1基検出された。A区Q～R—7グリッドに位置している。羽越線を挟んで平成4年度実施の水路部分の立ち会い調査でも1基確認されている。今回検出されたのは素掘りの井戸であり、使用段階において井戸枠が組まれていたのかは不明である。3層には濾過のためか玉石が径0.5mの範囲に整然と敷かれている。

注目されるのはその下の粗砂層に灰オリーブ色火山灰が多く含まれていることである。つまり、この井戸は火山灰降下時にはまだ使用されていたものと考えられる。また、覆土1層にも灰白色火山灰ブロックが確認され、降灰後まもなく、この井戸は埋められたと推測される。火山灰はD区河川跡や溝跡でもみられた十和田aであり、降灰年は915年である。遺物は赤焼土器を主体に内黒土器・須恵器が3袋、3層からは斎串1点が出土した。

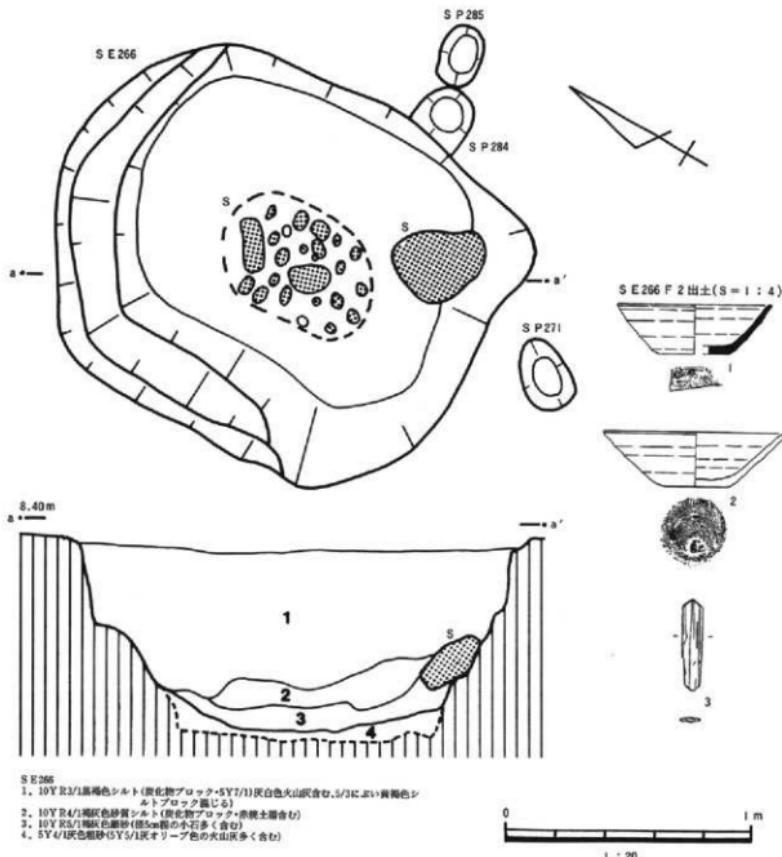


表2 S D73溝跡等遺物観察表(1)

探査番号	種別	器種	計測値(cm)				底面切離	調整・成形		出土地点	備考	
			口径	底径	高さ	器厚		外面	内面			
第8回	1	赤陶土器	环	(120)	55	52	5	不明	ロクロ	ロクロ	K390	
第9回	1	土師器(内黒)	フ	160	55	52	5	ヘラ切り	フ	ロクロ+ミガキ	S K1241	
第10回	1	赤陶土器	フ	136	60	47	4	回転糸切り	フ	ロクロ	S D77	内外面に輪郭力
	2	フ	フ	(126)	52	45	3.5	フ	フ	フ	フ	内面基底
	3	フ	フ	(128)	50	43	4	フ	フ	フ	フ	
	4	須恵器	フ	(132)	50	40	3.5	フ	フ	フ	S D77 P5G	墨書「伴」
	5	赤陶土器	フ	(136)	48	52	4.5	フ	フ	フ	S D77	
	6	須恵器	フ	(146)		35	5.5	フ	フ	フ	フ	
	7	赤陶土器	环	(162)	(68)	66	4.5	フ	フ	フ	フ	媒痕力
第11回	1	赤陶土器	フ	(112)	50	54.5	4	フ	フ	フ	S P96	
	2	フ	フ	(116)	(64)	57	7	フ	フ	フ	S D109	
	4	フ	斐	(166)			5	フ	フ	フ	S D109	
	5	須恵器	フ	(155)		28	6	フ	ロクロ+ケズリ	フ	S D649	
	6	フ	环	(126)	(70)	32	4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	フ	
	7	須恵器	フ				4.5	ロクロ	ロクロ	S D73	縫隙	
第12回	2	フ	环	(131)	66	31	4.5	ヘラ切り	フ	フ	フ	墨書「木」
	3	フ	フ	(56)			2.5	回転糸切り	フ	フ	フ	墨書「木」
	4	フ	フ	(90)				ヘラ切り	フ	フ	フ	墨書「在カ」
	5	フ	フ	60		4	フ	フ	フ	フ	フ	墨書「委」
	6	フ	フ	71		4.5	回転糸切り	フ	フ	フ	フ	
	7	フ	横瓶			6.5		ハケメ	タタキ	フ	フ	
	8	フ	フ			7		ハケメタタキ	タタキ	ロクロ	ロクロ	S D73 S D77
	9	赤陶土器	环	128	51	45	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	S D73	
	10	フ	フ	122	54	45	5	フ	フ	フ	フ	
	11	フ	フ	133	58	42	5	フ	フ	フ	フ	
	12	フ	フ	130	58	42	5	フ	フ	フ	フ	
	13	フ	フ	132	57	47	4.5	フ	フ	フ	フ	
	14	フ	フ	127	57	43	4.5	フ	フ	フ	フ	
	15	フ	フ	158	65	54.5	5	フ	フ	フ	フ	
	16	フ	フ	122	54	44	4	フ	フ	フ	フ	
	17	フ	フ	149	60	58	6	フ	フ	フ	フ	
	18	フ	フ	132	60	42	5	フ	フ	フ	フ	墨書文字不明
	19	フ	フ	127	56	43	5	フ	フ	フ	フ	
	20	土師器(内黒)	フ	128	56	43	5			ハラケズリ	フ	縄代痕
	21	赤陶土器	フ	131	57	43	5	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	フ	
第13回	22	フ	フ	130	56	55	5	フ	フ	フ	フ	
	23	フ	フ	(124)	50	52	4	フ	フ	フ	フ	
	24	フ	フ	(136)	62	45	4.5	フ	フ	フ	フ	
	25	フ	フ	129	52	47	4	フ	フ	フ	フ	
	26	フ	フ	141	65	47	3.5	フ	フ	フ	フ	黒紙
	27	フ	フ	(138)	60	52	4	フ	フ	フ	フ	
	28	フ	フ	(129)	57	44	4	フ	フ	フ	フ	
	29	フ	フ	(132)	57	45	4	フ	フ	フ	フ	
	30	フ	フ	130	54	40	4.5	フ	フ	フ	フ	
	31	フ	フ	(134)	53	40.5	3.5	フ	フ	フ	フ	
	32	フ	フ	125	58	43	4	フ	フ	フ	フ	
	33	フ	フ	(126)	58	43	4	フ	フ	フ	フ	
	34	フ	フ	122	52	45	4	フ	フ	フ	フ	
	35	フ	フ	(141)	68	48	4	フ	フ	フ	フ	
	36	フ	フ	(126)	59	48	3.5	フ	フ	フ	フ	内面輝
	37	フ	フ	132	51	45	4	フ	フ	フ	フ	
	38	フ	フ	(159)	60	63	4.5	フ	フ	フ	フ	
	39	フ	フ	(126)	56	46	3	フ	フ	フ	フ	
	40	フ	フ	(116)	57	51	3.5	フ	フ	フ	フ	
	41	フ	フ	144	53	51	5	フ	フ	フ	フ	
	42	フ	フ	(130)	58	45	5	フ	フ	フ	フ	
	43	フ	フ	(126)	48	44	4	フ	フ	フ	フ	
	44	フ	フ	(116)	54	37	4	フ	フ	フ	フ	
	45	フ	フ	(132)	(54)	43	5.5	フ	フ	フ	フ	
	46	フ	フ	122	52	44	3.5	フ	フ	フ	フ	
	47	フ	フ	(126)	52	47	3	フ	フ	フ	フ	
	48	フ	フ	(132)	(56)	44	4	フ	フ	フ	フ	
	49	フ	フ	(121)	57	43	4	フ	フ	フ	フ	

表3 S D73溝跡等遺物観察表(2)

鉢 回 N	種 別	器 形	計 測 値 (mm)				底部切跡	調 整・成 形		出土地点	備 考	
			口径	底径	器高	器厚		外 面	内 面			
第13回	50	赤陶土器	环	(124)	46	41	4	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	S D73	内面墨痕
	51	#	#	(124)	53	48	3.5	#	#	#	#	
	52	#	#	(128)	61	38	3	#	#	#	#	
	53	#	#	134	(58)	51	4.5	#	#	#	#	内外面煤
第14回	54	#	#	(124)	51	52	3.5	#	#	#	#	内外面煤
	55	#	#	(118)	(55)	48	3.5	#	#	#	#	
	56	#	#	(132)	51	50	3.5	#	#	#	#	内外面煤
	57	#	#	(156)	55	50	3.5	#	#	#	#	内外面煤
	58	#	#	130	52	46	3	#	#	#	#	
	59	#	#	(135)	59	46	4.5	#	#	#	#	
	60	#	#	(130)	58	44	4	#	#	#	#	
	61	#	#	150	57	67	6	#	#	#	#	
	62	#	#	(122)	48	55	4.5	#	#	#	#	
	63	#	#	(128)	60	48	4	#	#	#	#	
	64	#	#	(134)	58	50	4	#	#	#	#	
	65	#	#	(154)	58	58	3.5	#	#	#	#	
	66	#	#	(126)	56	42	5.5	#	#	#	#	内外面煤
	67	#	#	(126)	57	36	4	#	#	#	#	
	68	#	#	(130)	56	43	3.5	#	#	#	#	
第15回	69	#	#	(130)	52	47	4.5	#	#	#	#	
	70	#	#	(136)	62	45	3.5	#	#	#	#	
	71	#	#	121	55	43	5	#	#	#	#	
	72	#	#	(137)	63	40	3.5	#	#	#	#	
	73	#	#	124	61	39	5	#	#	#	#	内外面煤
	74	#	#	(134)	52	46.5	5	#	#	#	#	
	75	#	#	(120)	58	48	5	#	#	#	#	
	76	#	#	(122)	47	41.5	5	#	#	#	#	
	77	#	#	(126)	(56)	48	3.5	#	#	#	#	墨書「件」
	78	#	#	(134)	(64)	39	3	#	#	#	#	
	79	#	#	(132)	51	45	5	#	#	#	#	
	80	#	#	135	56	42	4	#	#	#	#	
	81	#	#	138	60	35	4.5	#	#	#	#	
	82	#	#	123	54	46	5	#	#	#	#	
	83	#	#	(130)	55	45	4	#	#	#	#	
第16回	84	#	#	(132)	62	36.5	5	#	#	#	#	
	85	#	#	128	58	47.5	4.5	#	#	#	#	
	86	#	#	128	52	45	4.5	#	#	#	#	外面煤
	87	#	#	128	54	48	4.5	#	#	#	#	内面煤
	88	#	#	145	57	50	5	#	#	#	#	
	89	#	#	132	54	46	3.5	#	#	#	#	
	90	#	#	(140)			4 不明	#	#	#	#	墨書文字不明
	92	#	#		53		3.5 回転糸切り	#	#	#	#	墨書「件」
	96	#	蓋		65		6 #	#	#	#	#	
	97	#	甕	(150)			6 #	#	#	#	#	
第18回	98	#	(248)					#	#	#	#	
	99	#	不明		46	16						
	100	#	甕	(184)			9	ロクロ	ロクロ	#	#	
	101	#		(206)			5.5	#	#	#	#	
	102	土器器(内層)	#	(164)			5	ロクロ+ハケメ	ロクロ	#	#	
	104	#	环	(126) (52)	45	4.5	回転糸切り	ロクロ+ミガキ	ロクロ	#	#	
	105	#	#	(128)	50	45	3	#	#	#	#	
	106	#	#	133	56	53.5	3.5	#	#	#	#	
	107	#	#	120	(57)	46	3.5	#	#	#	#	
	108	#	高台付	(70)			#	#	#	#	#	墨書「件」
第16回	109	#	环	122	54	44.5	4	#	#	#	#	墨書文字不明
	110	#	#	(140)	70	56	5 ヘラ切り	#	#	#	#	
第18回	111	#	#	(156)	74	58	3.5 回転糸切り	#	#	#	#	
	112	#	#	159	72	60	4 #	#	#	#	#	
1	1	須恵器	#	(126) (58)	41		#	ロクロ	ロクロ	S E 266		
	2	赤陶土器	#	(150)	52	45	4.5	#	#	#	#	
3	3	木製品	畜牛	長 75 幅 16			厚3.5			#		
	1	須恵器	蓋				7	ロクロ	ロクロ	東水路	墨書「宜」	
2	2	#	#	(147)			30 5.5	#	ロクロ+ハケメ	S G 1200	転用組 外面煤痕	

## 7 河川跡

調査D区東で河川跡が1条検出された。川幅は約6.4~3.8m、深さは西が約1.1m、東が約0.8m程度の小河川であるが、箱数にして8箱の土器と30箱の木製品が出土している。周辺部は全体的に削平を受け、また、河川の北側には北目新堰が掘削されており遺構の遺存状態は決してよいものではなかった。この辺りは当時もっと高く、現在の平坦な景観とは随分異なったものであった。自然堤防が発達し、微高地になっていたのであり、水田化する際現在のように削平したのである。その微高地を居住域としていた。柱穴を含むピットや土壤が検出されたが、建物の確認には至らなかった。また、検出した遺構の殆どは底面まで10cm前後と浅い。河川から良好な遺物の出土をみたのはある程度の深さがあり、そのことで保護されていたからに外ならない。調査は6本の土層観察ベルトを残し、6ブロックを区画して掘り下げた。検出面には灰白色の火山灰が流れたような形態で検出された。この河川に流れ込んでいたと考えられるSD1201にも同様に観察された。遺物は火山灰を含む層からは出土していないために河川が機能していた時期及び居住していた時期を探るうえで手掛かりとなる。この河川跡は羽越線東に位置する線掘り調査区4Tでも確認されているが、南側断面にに本来の2~3層を削る形で新しい流れができたことがわかる。河川は東から西に流れていたと考えられ、左岸には居住域が形成されていた。右岸においても河川跡から墨書「宜」がみられ、居住が推測されるが、遺構は検出されなかった。

### (1) 河川覆土について

基本的には6層で全体的に細砂乃至粗砂である。岸辺にも細砂の堆積がみられる。1層目には915年降灰の火山灰=十和田a(To-a)が含まれるが、遺物は含まれない。遺物は2~4層にみられ、これらの層には何れも大量の樹木が混入している。この樹木は圧倒的にケヤキが多い。西の流心に平行に横たわっているのは直径約60cmのクリであり、手斧痕がみられた。これらが入り込むことで、河川は浅くなり、流れを緩やかにしたものと思われる。東の土層からは検出面のすぐ下が西の4層目に相応することは上流部の東側上面がかなり削平されていることを示す。枝や葉が粗砂や細砂の中に混じり、その中に土器と木製品が含まれている。河底はa-a'ベルトで表われているが暗青灰色粗砂である。他のベルト付近では大量の樹木の堆積があり底まで掘り下げていないが同様と思われる。

### (2) 遺物の出土状況について

河川出土の遺物は流れを保っている時期が長いほど攪拌や移動、後世の遺物の混入がみられ、資料的には多面的な観察・比較を要する。この河川は1層目に火山灰が含まれ、遺物はその下2層から4層に含まれ、その年代は全て火山灰=915年以前である。しかし、覆土の不規則な堆積状態においても指摘されるが、遺物は層位的に出土していない。遺物の分布は検出した30m全域にわたってみられるが、とくに東と中央部及び西の3ヶ所で木が重なり合い、際立って多く見られる地点に集中している。この共通点は流れが止まり、渾んだ結果としてそこに偶然多く遺存したというよりは、当時において何らかの意図をもって、その場所に投棄されたと考える。土器は東側で、木製品は中央部の流れに直交する木

の付近と前述したクリの南で多く出土している。中央部の木は左右岸を結ぶ橋の機能を有していると考えられるが、この付近では舟車や舟を描いた墨書き製品、盤・椀等の挽物、鐵等とくに多くの木製品が出土した。この木が据えられた状態から遺物投棄の段階には河川はかなり浅くなっていたのではないかと考えられる。

### (3) 出土遺物について

#### ① 土 器

河川跡からは8箱程の土器が出土している。とりわけ環等供膳形態のものが目立ち、底部へラ切り須恵器の割合が高い。佐佐町におけるこれまでの調査からも殆ど例外なくかかる須恵器は遺物の中に含まれるが、主体的な出土がみられるのは初めてである。

概して飽海・酒田の遺跡では赤焼土器が出土土器の大半を占める。それは遺跡の形成年代を端的に示すものといえる。また、供膳形態土器の組成として赤焼土器・糸切り須恵器・内黒土師器の三種があげられる。新しくなるにつれて、器形の変化は勿論この比率も変化していく。須恵器の割合が低下し、赤焼土器が90%以上を占めるようになる。

その背景には律令制的土器生産・管理・供給体制や在地社会の変容が考えられる。織密で規範的なものから口縁部歪みの目立つ量産タイプへの推移が、須恵器から赤焼土器への移行に合致している。その変容期については、段階的ではあるが9世紀後半頃から始まり火山灰降下の915年前後ではほぼ須恵器は使用されていないと推定される。

D区河川跡から出土した土器は半分以上がヘラ切り須恵器である。また、年代を推定する大きな根拠ともなる墨書きがみられる。「大伴」・「大伴子」の2点が確認され、文献から「大伴」から「伴」への改姓が823年に行われたことが知られる。庄内地方では年紀を付す木簡等の出土例がなく、土器編年にとって実年代を作った正確な根拠が期待されるなかでこの2点は下限の確かな資料となるものである。また、この河川跡からは計52点の墨書き土器が出土しており、「大伴」の他に「神奴」が注目される。併せて墨書き「宣」が25点、「木」が9点出土し、その中には同筆にかかるものも多く見られ、同時期の使用土器やその器形を探るうえで興味深い資料となる。「宣」は全て須恵器に付されているがヘラ切り・糸切り両方の切り離しがみられ、「木」はヘラ切り須恵器と赤焼土器にみられる。理化学分析の結果、この赤焼土器は焼成前に赤鉄鉱を塗布していることが確認され、意図的に赤く発色させていたことがわかる。この他には60・94・96・97・100・102・103に同様の例が認められる。祭祀に関わった特別の目的を有するものであろう。

河川跡から出土したヘラ切り須恵器無高台壇はおおよそ次の7タイプに分類される。

- 底径73mm~85mmで口縁部にかけてゆるやかに立ち上がるタイプで、墨書き「大伴」・「大伴子」・「王」がみられる(5・6・58)
- 底径90mm前後と大きく、器高も高い深型で立ち上がりの角度が急なタイプ、体部に墨書き「十」がみられるものがある(40~44・51)
- 底部のつくりが丸底になっているタイプ(45・46・49・60)
- 器高が低く、底径76mm~92mmで底部から丸みを帯びて立ち上がり、口唇部で外反す

るタイプ(20・27・52・53)

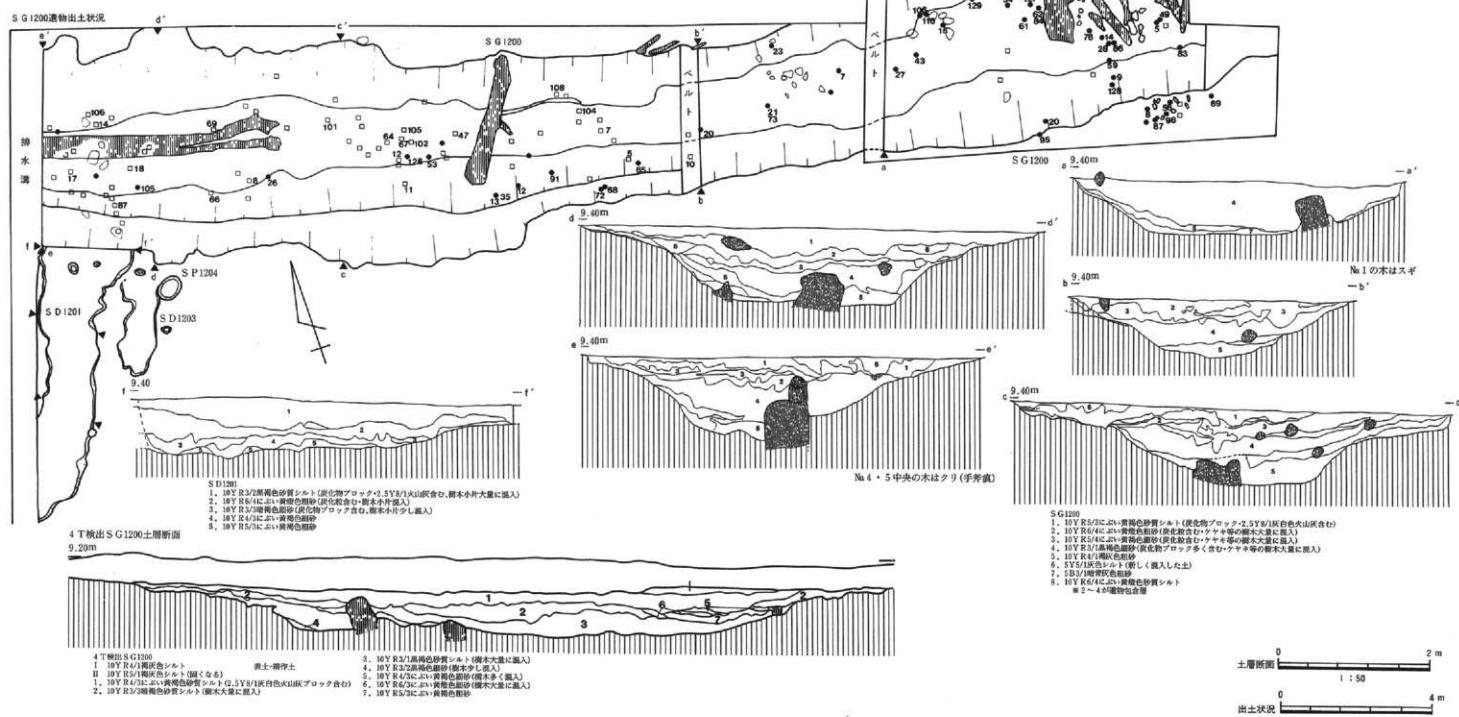
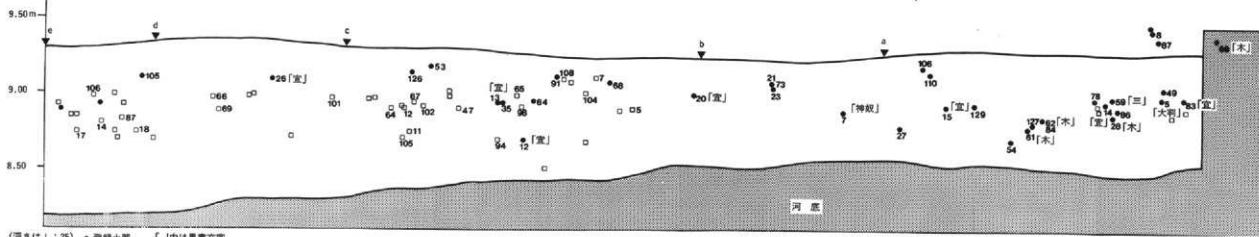
- e. 器高が40mm以上と高く、底径が68mmと小さく底部からの立ち上がりが鋭角的で、口唇部で外反するタイプ、墨書「木」が特徴的にみられる(62・65・66)
- f. 底径が60mm前後と小さく、底部からゆるやかに立ち上がり、糸切りのものとほぼ共通するタイプ、墨書「宜」が付されたものが多い(11・13・22・24・25)
- g. 器高が30mm前後と低く、底部から口縁部にかけほぼ直線的にひらくタイプ(37・38・56)  
年代観についてはaが前述の如く823年を下限としており、9世紀第1四半期にあてられるが、bはそれに先行するものと考えられる。また、fは糸切り須恵器坏と併用されるところから9世紀第3四半期に比定できる。

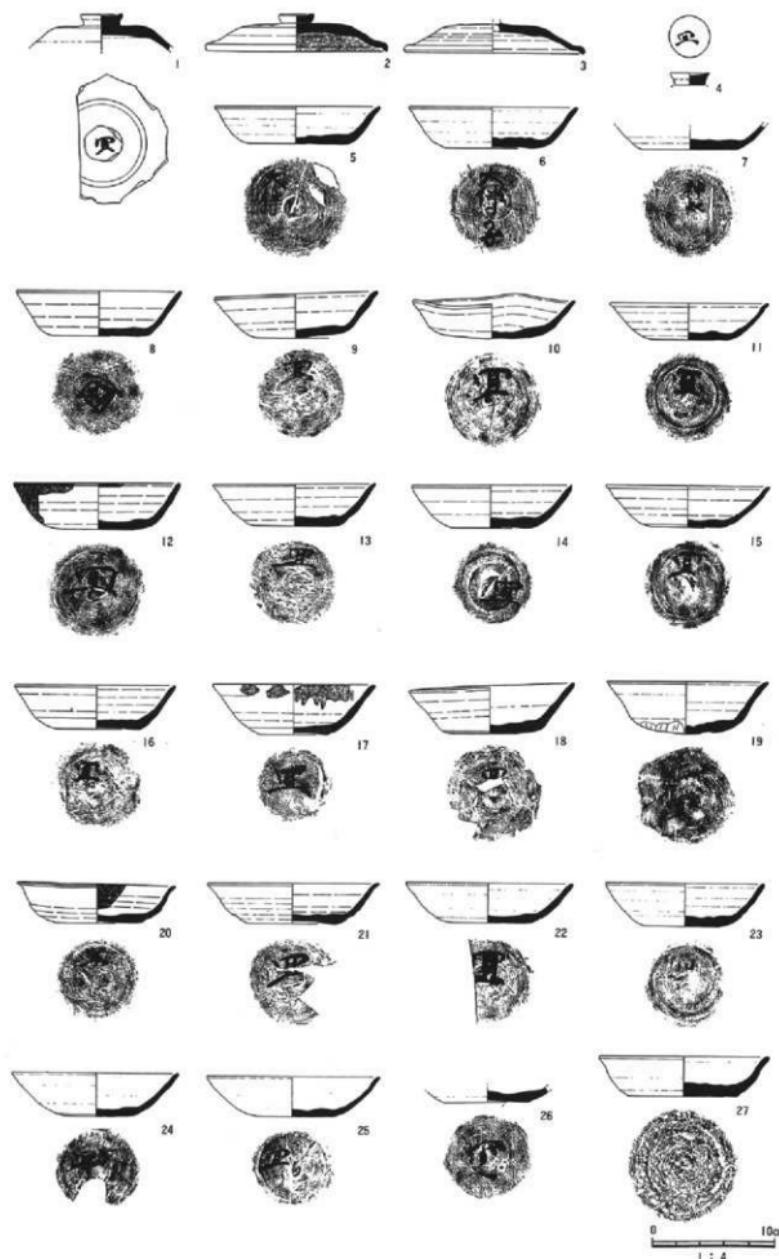
## ② 木製品

河川跡としては小規模ながら箱数にして30箱の木製品が土器と併出してあり、土器年代と同時期の遺物ととらえられる。平安時代における集落でも一定数の木製品は土器と共に使用されていたことは想像に難くないが、その性質上遺存は溝や河川、井戸跡、湿地などに極めて限定される。ここでの出土地点は前述したとおり、河川中央部と西側に偏っている傾向がみられる。全体として盤7点、皿3点、椀2点等の木器と蓋、曲物、底板、折敷、箸及び農具の歓2点の他に多様な棒状や板状の木製品が多数確認される。中には用途不明のものも多くみられる。供膳容器としての盤や皿、椀はロクロを使用して製作された挽物である。盤の中には秋田・払田柵跡で出土している例がある底部に「#」の線刻されたもの1点含まれる。県内では川西町道伝遺跡に類例がみられる。椀は2点とも底部に2cm程の穴があけられており、本来の使用目的とは異なると思われる。また、皿にはロクロを使用した際、材を固定したときに残る鉄爪の痕が観察される。河川中央部において、ケヤキ材のブロックも出土している。図に示した93の円錐形の栓状木製品も出土している。これらのことから一般的な消費というには不自然なものが含まれている。30m程度の短い検出区間、小河川ながら、これだけの木製品が遺存するには条件と背景が必要である。結論的に述べれば、小規模ながらも生産に関わっていた場所だからではなかろうか。ロクロをはじめ製作するためには一般集落では必要としない道具を具備しなければならない。技術的にも同様である。ここで、改めて本質的な問題が提起される。それは当該期の集落に木製品は広範にかつ多様な製品が普及していたのか、そしてそれらは自給したものか他からの供給によるものかという問題である。確かに現在のものと製作技法的に殆ど変わらない曲物が多くの集落で、とくに井戸眼等で出土する。しかしながら、この河川跡から窺える状況を一般集落の一例と普遍化し得るのかどうか。共伴する多くの墨書き土器との関連も大きな課題である。

また、仏教に関連していると思われる木製品が2点確認される。第27図-65の蓮弁に座す仏を表している墨描木製品と第28図-70の桔である。仏教の普及を示すものであろう。

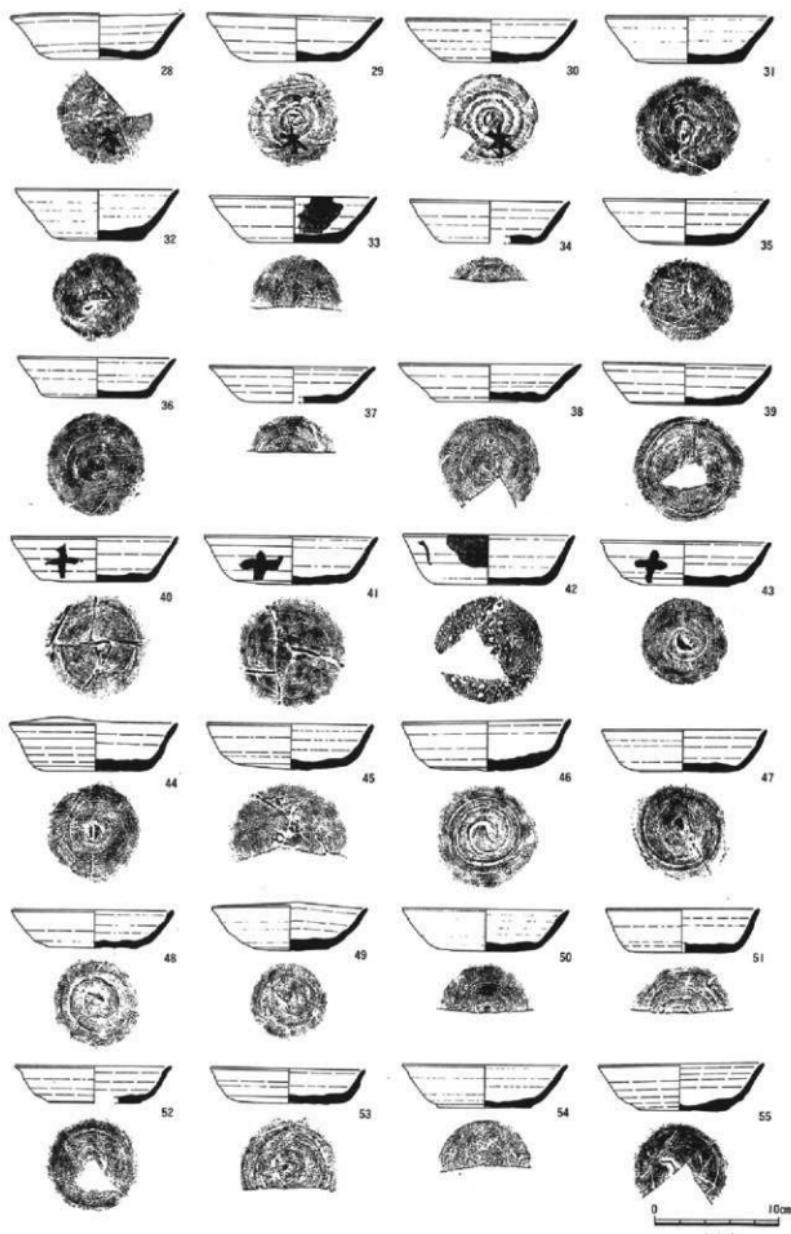
SG I200出土遺物平面分布

第17図 SG I200河川跡平面図・断面図  
遺物出土状況・垂疊分布

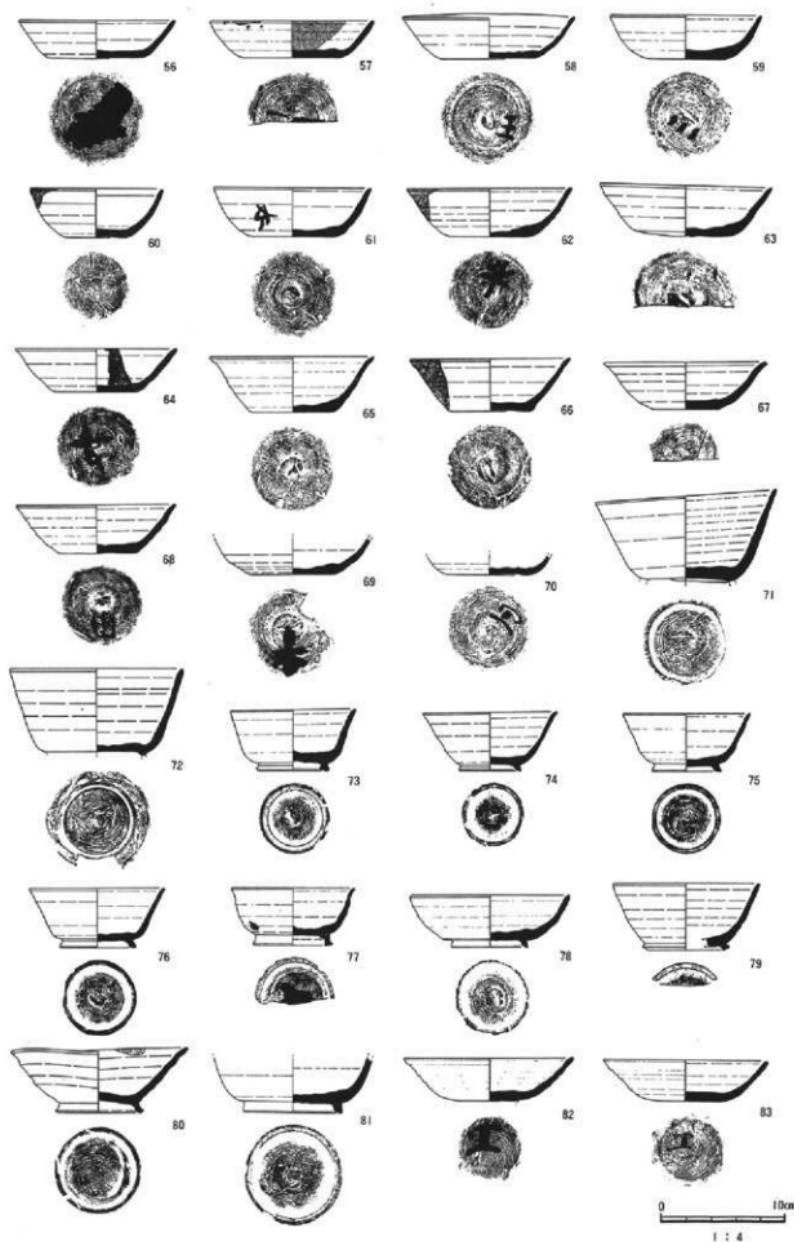


第18図 SG 1200河川跡遺物実測図(1)

III 検出遺構と出土遺物

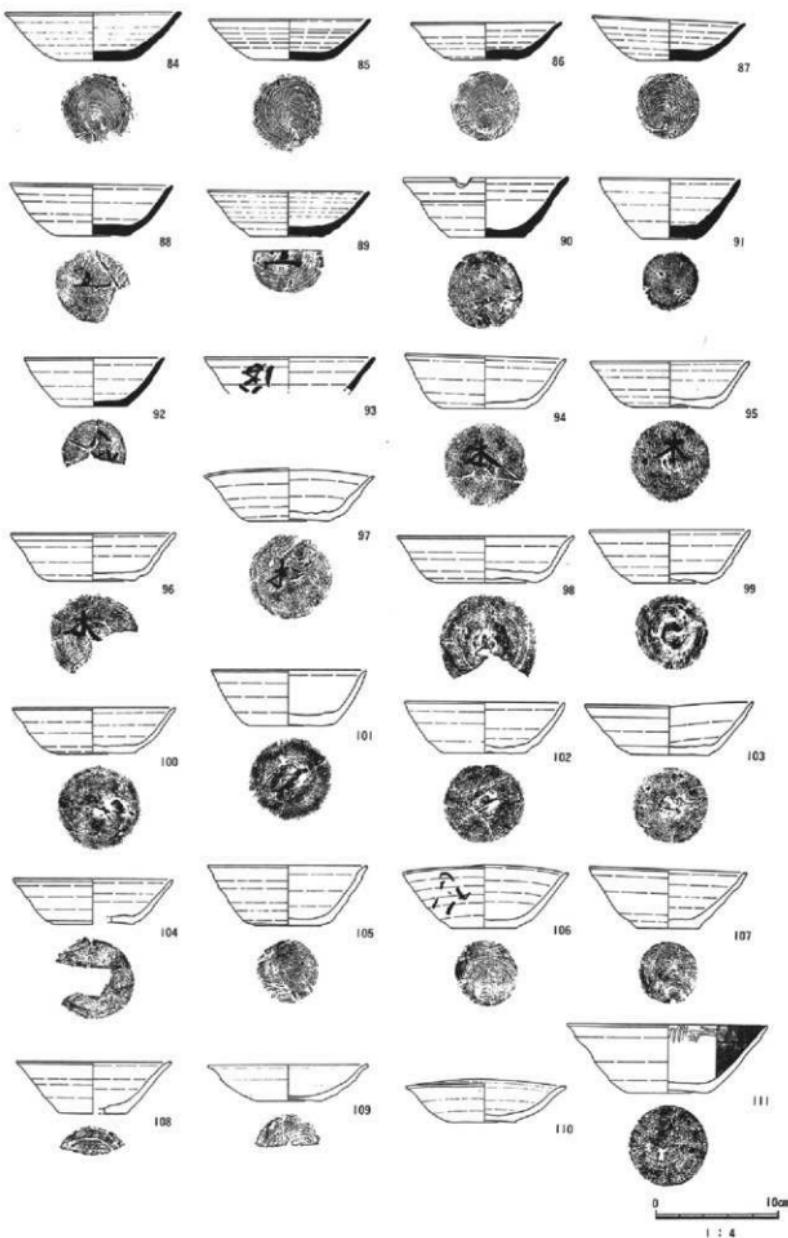


第19図 S G 1280河川跡遺物実測図(2)

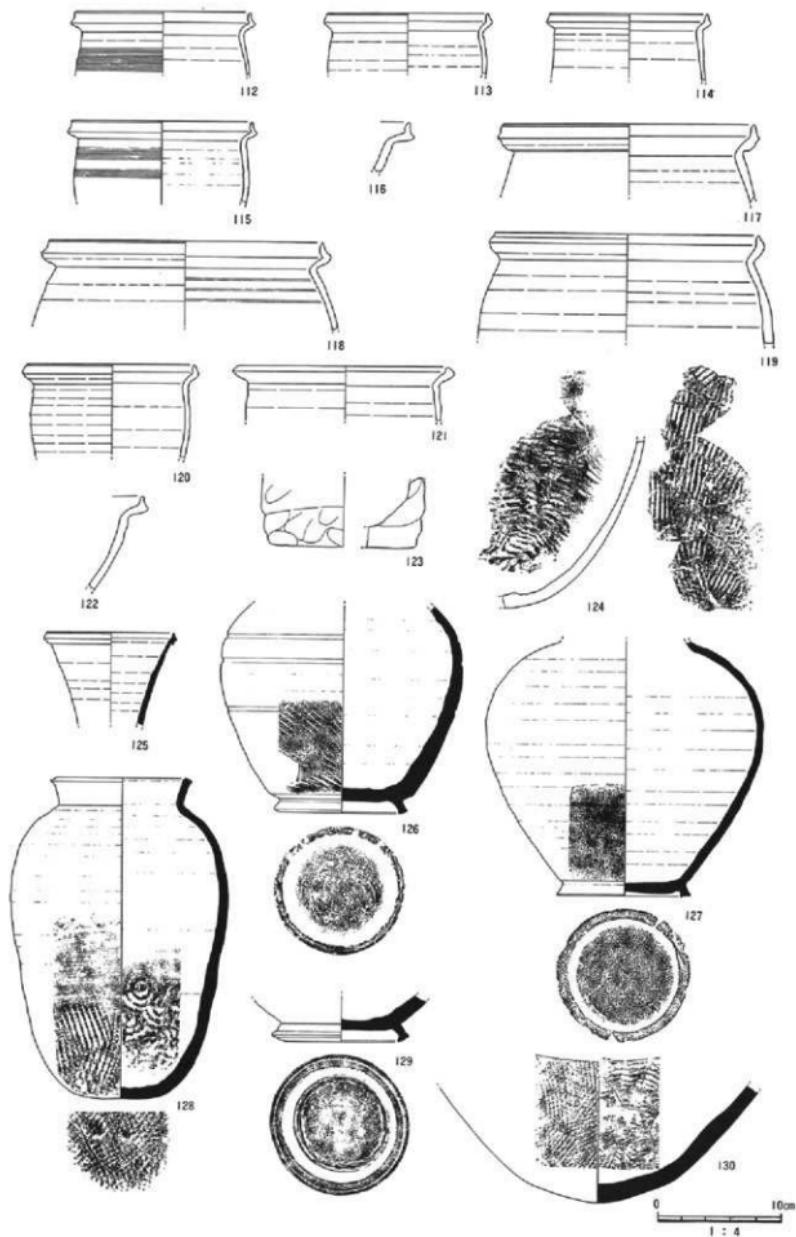


第20図 SG1200河川跡遺物実測図(3)

III 検出遺構と出土遺物

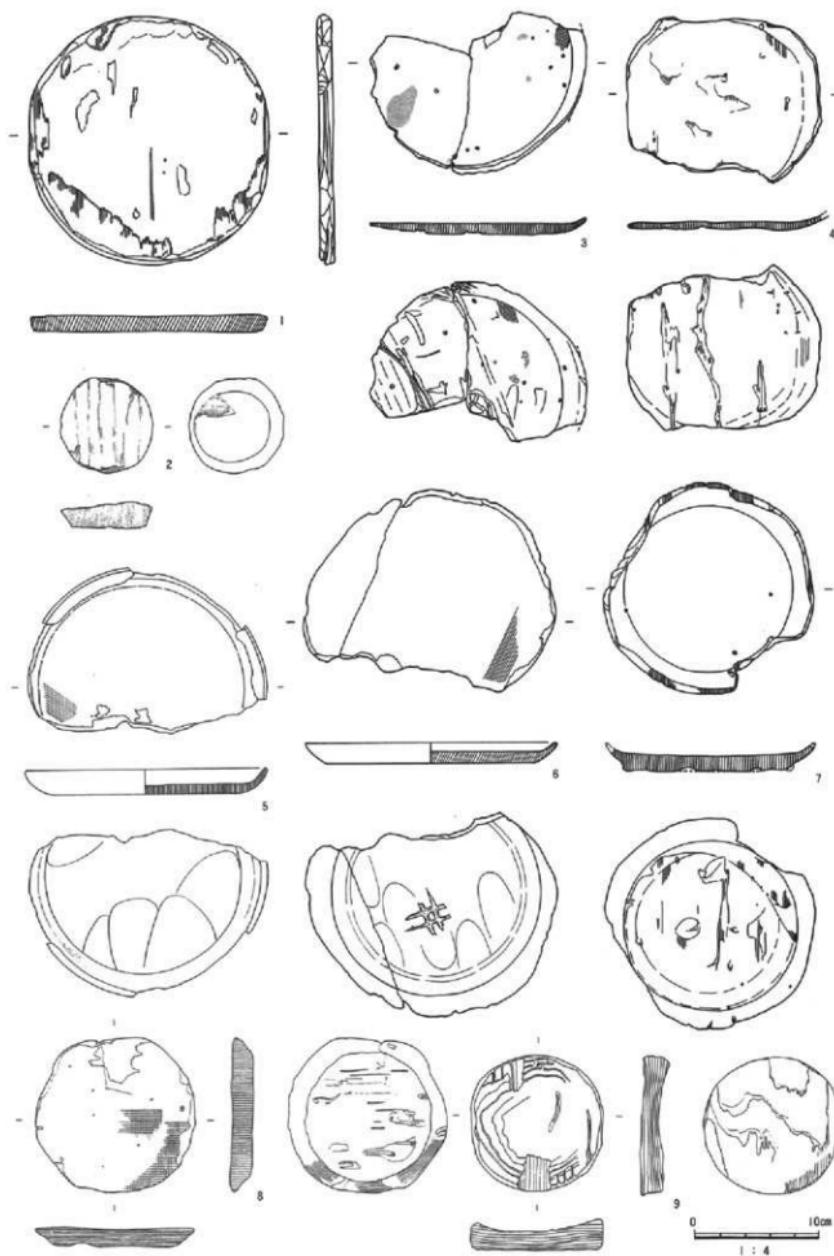


第21図 S G1200河川跡遺物実測図(4)

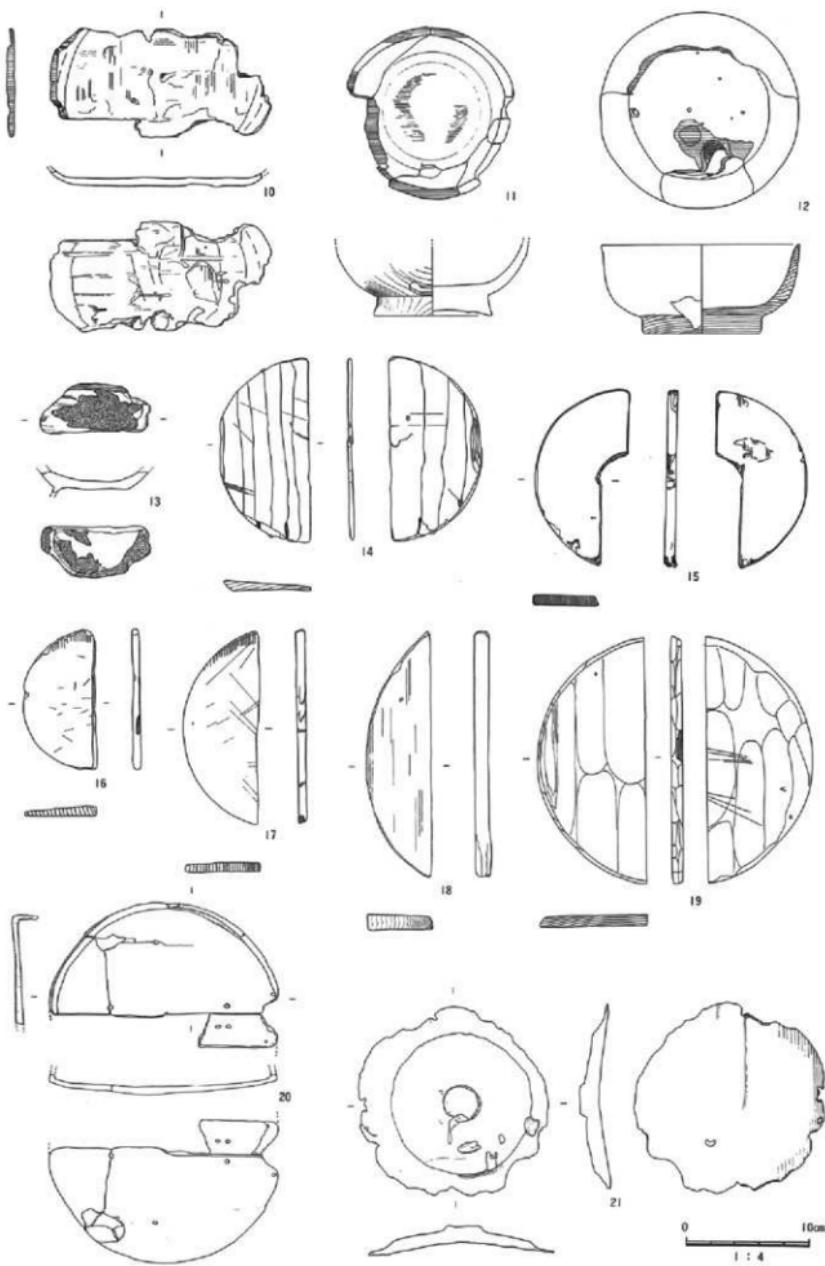


第22図 SG 1200河川跡遺物実測図(5)

III 検出遺構と出土遺物

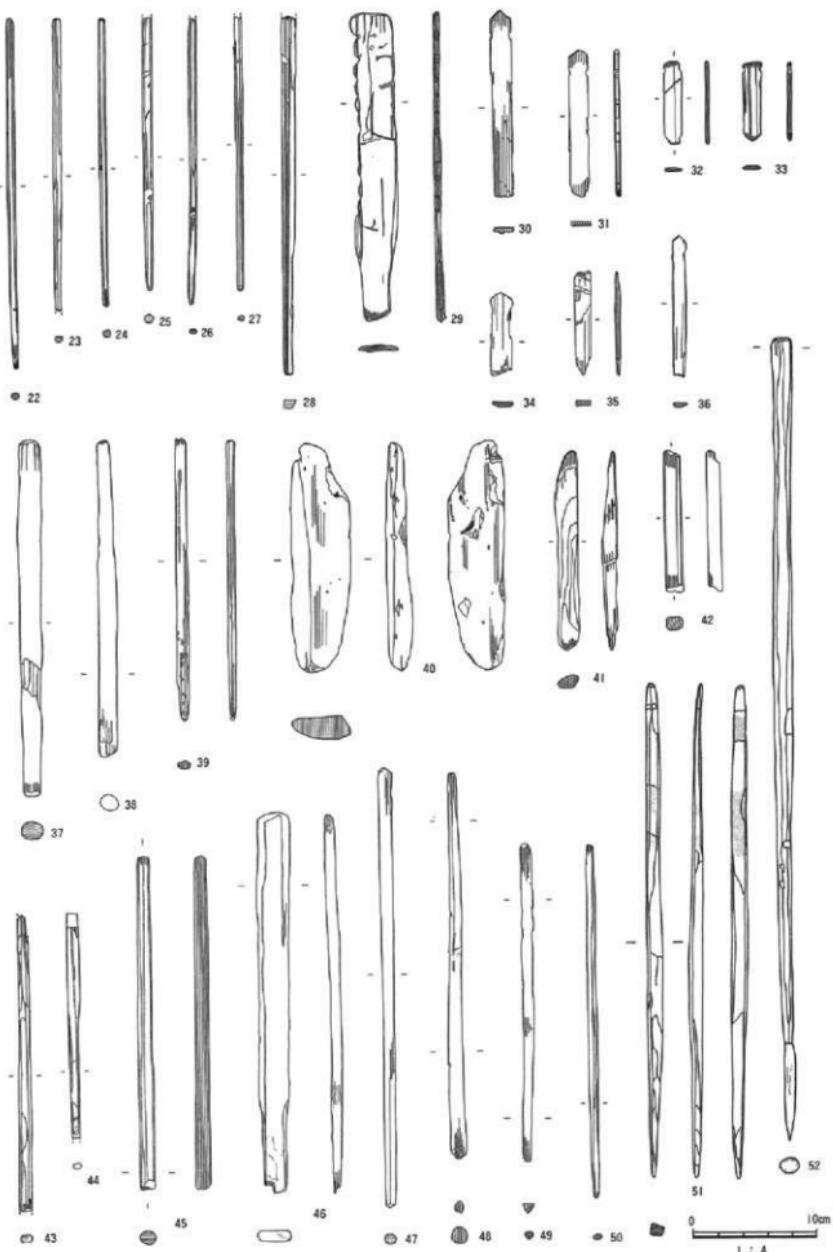


第23図 SG 1200河川跡遺物実測図(6)



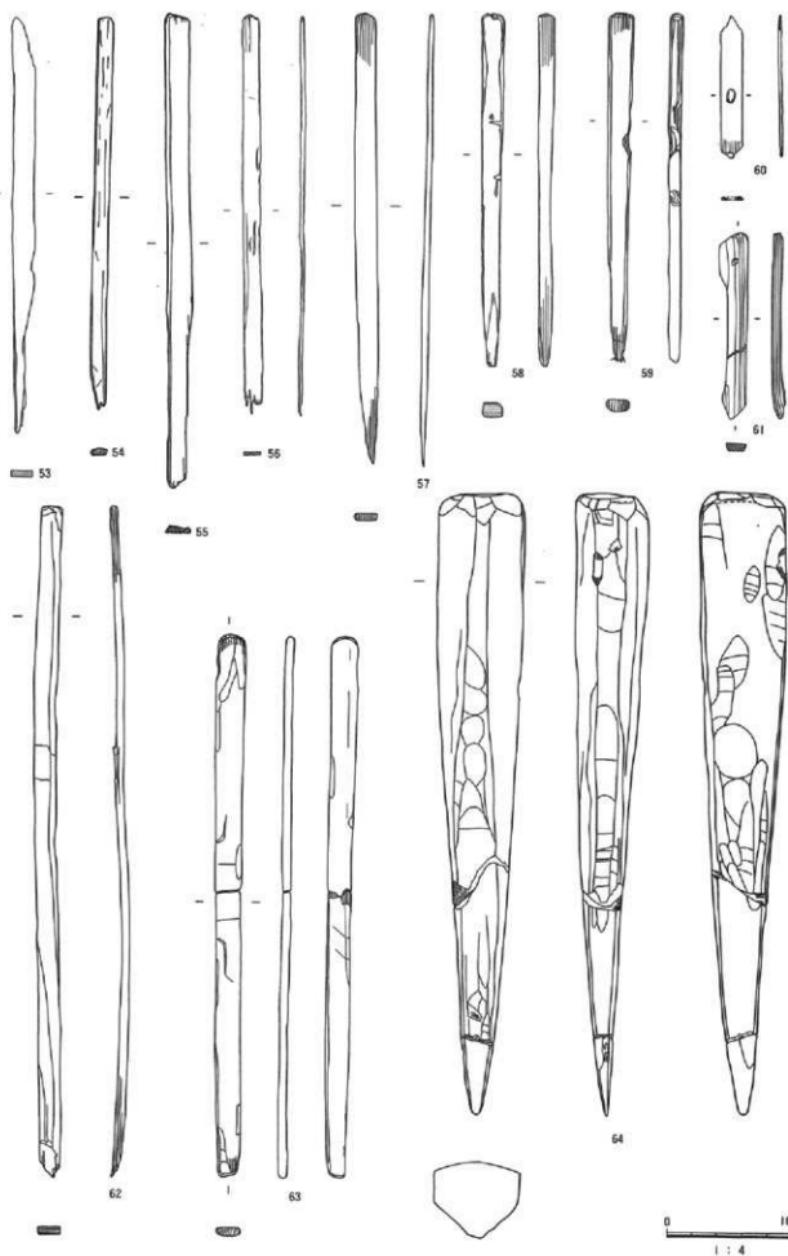
第24図 SG 1200河川跡遺物実測図(7)

III 検出遺構と出土遺物



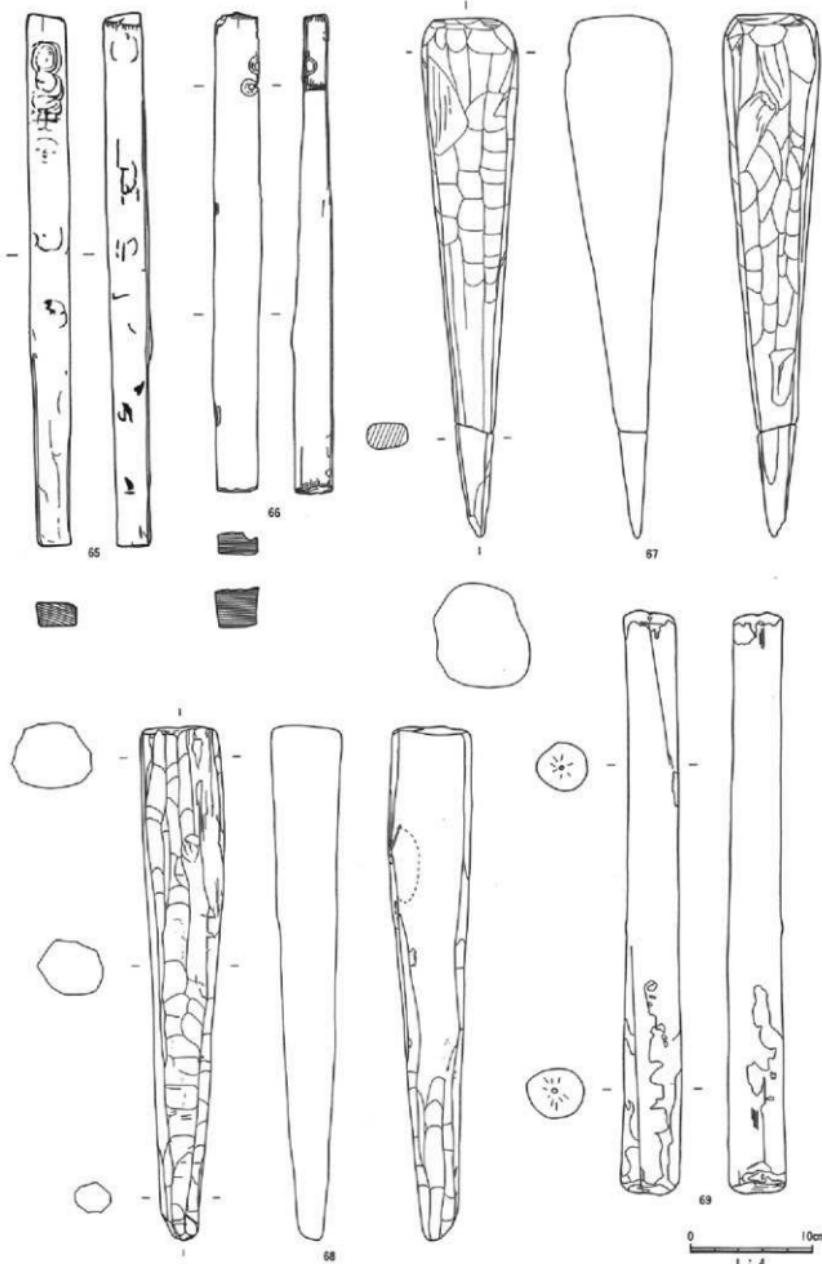
第25図 S G1200河川跡遺物実測図(8)

III 検出遺構と出土遺物

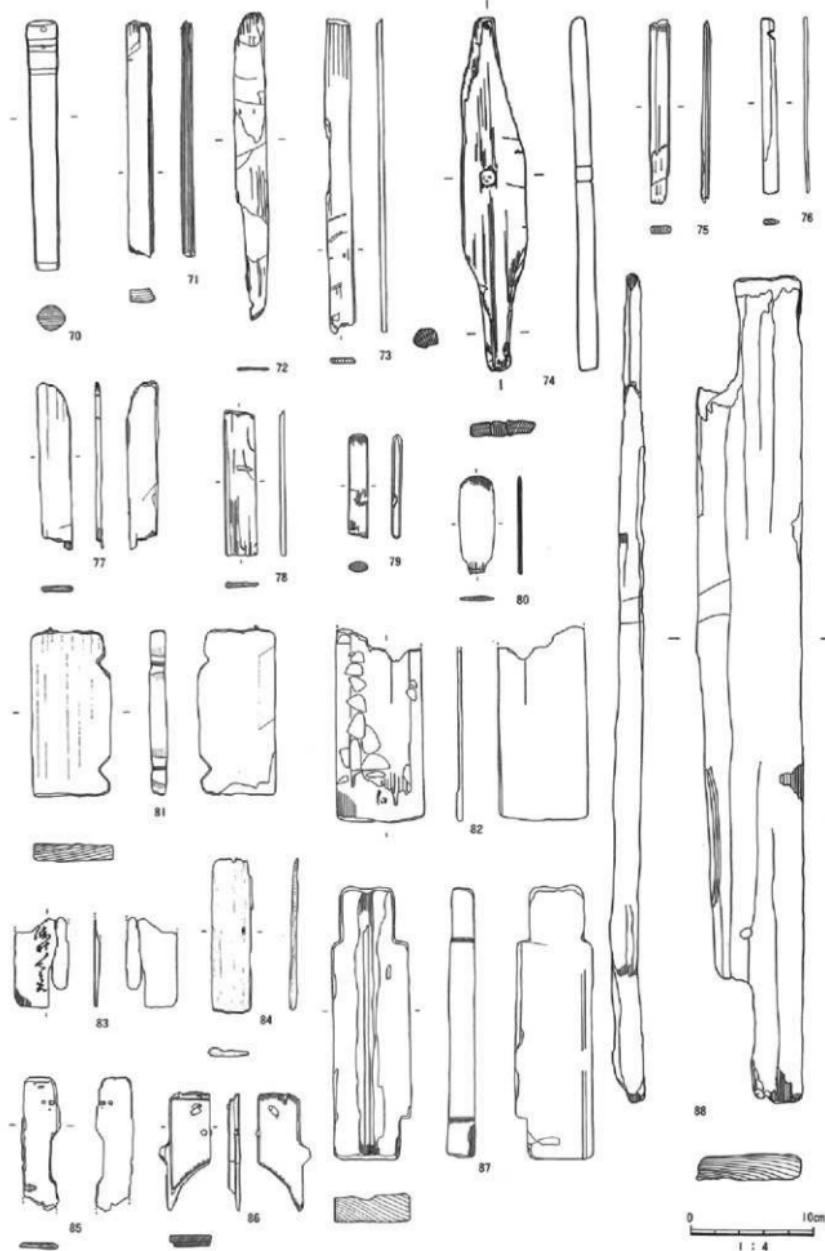


第26図 S G 1200河川跡遺物実測図(9)

III 検出遺構と出土遺物

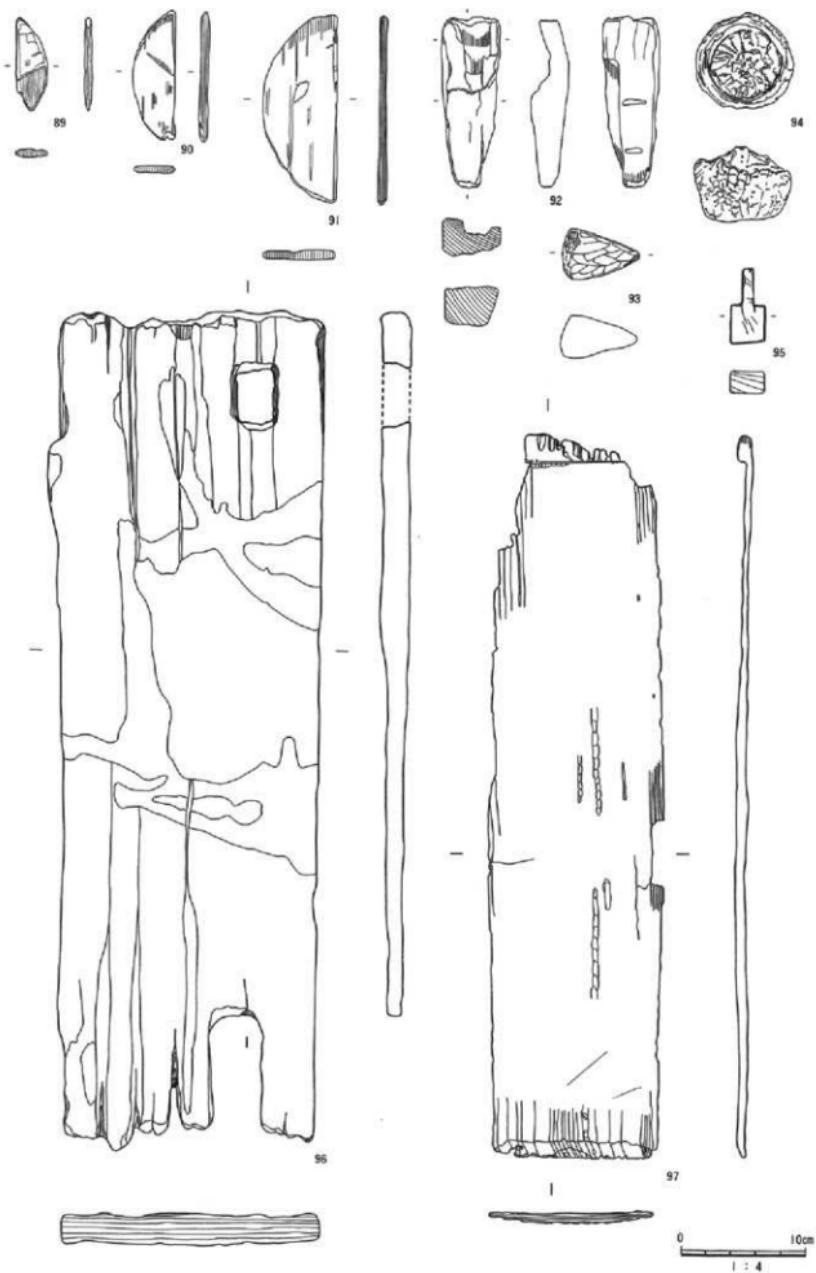


第27図 SG 1200河川跡遺物実測図(10)

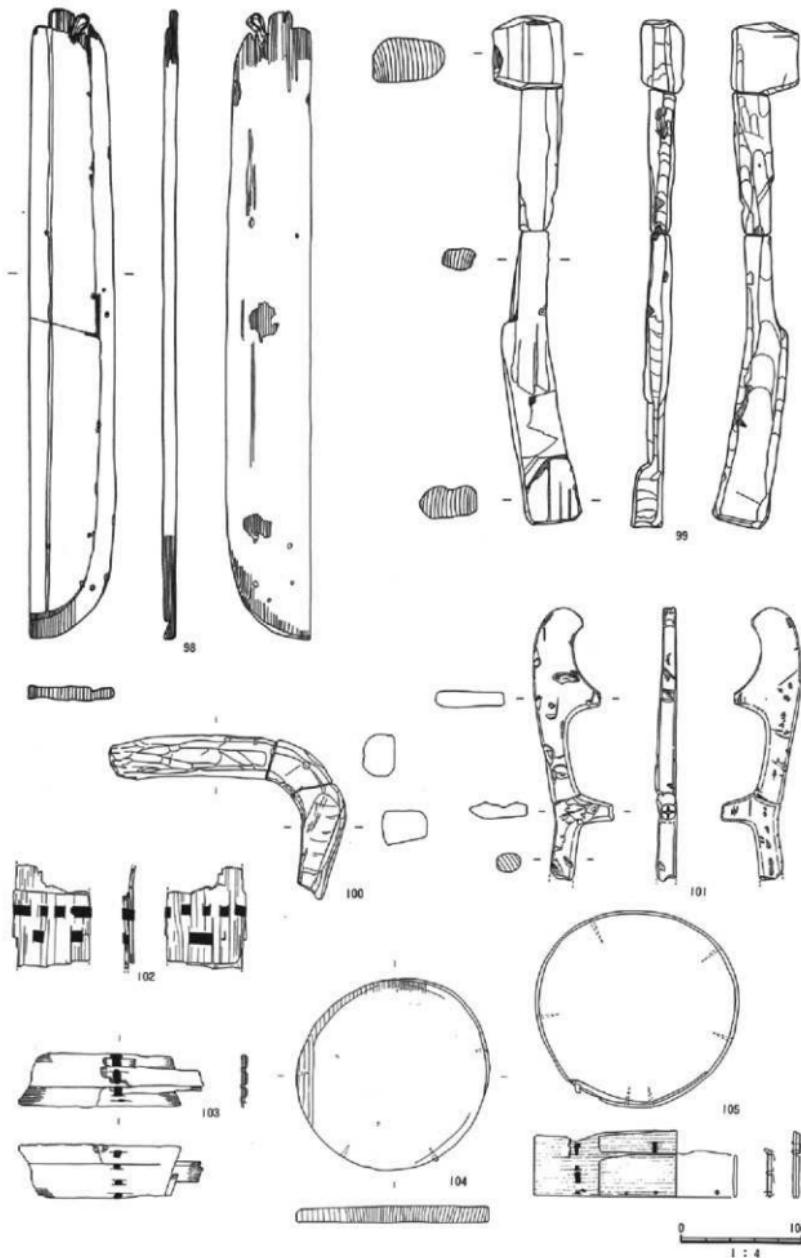


第28図 SG 1200河川跡遺物実測図(1)

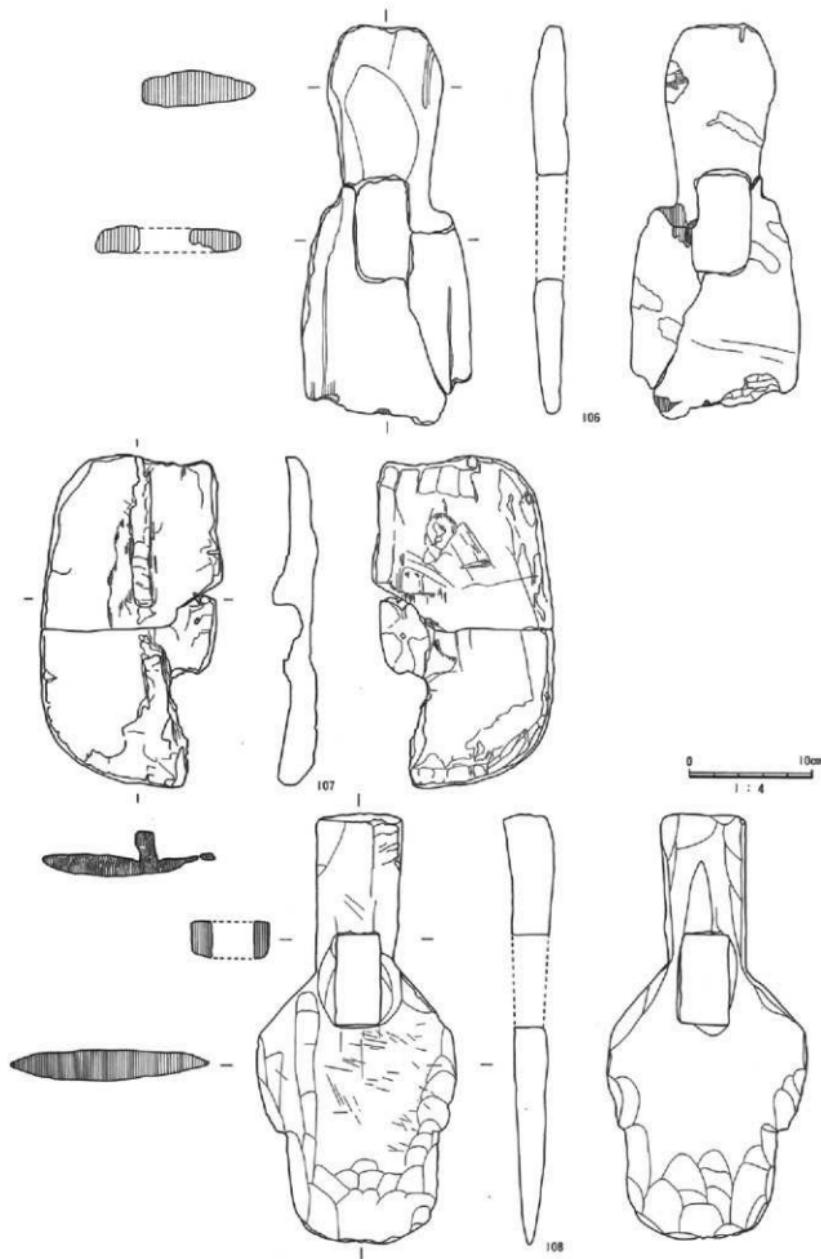
III 検出遺構と出土遺物



第29図 SG 1200河川跡遺物実測図(12)



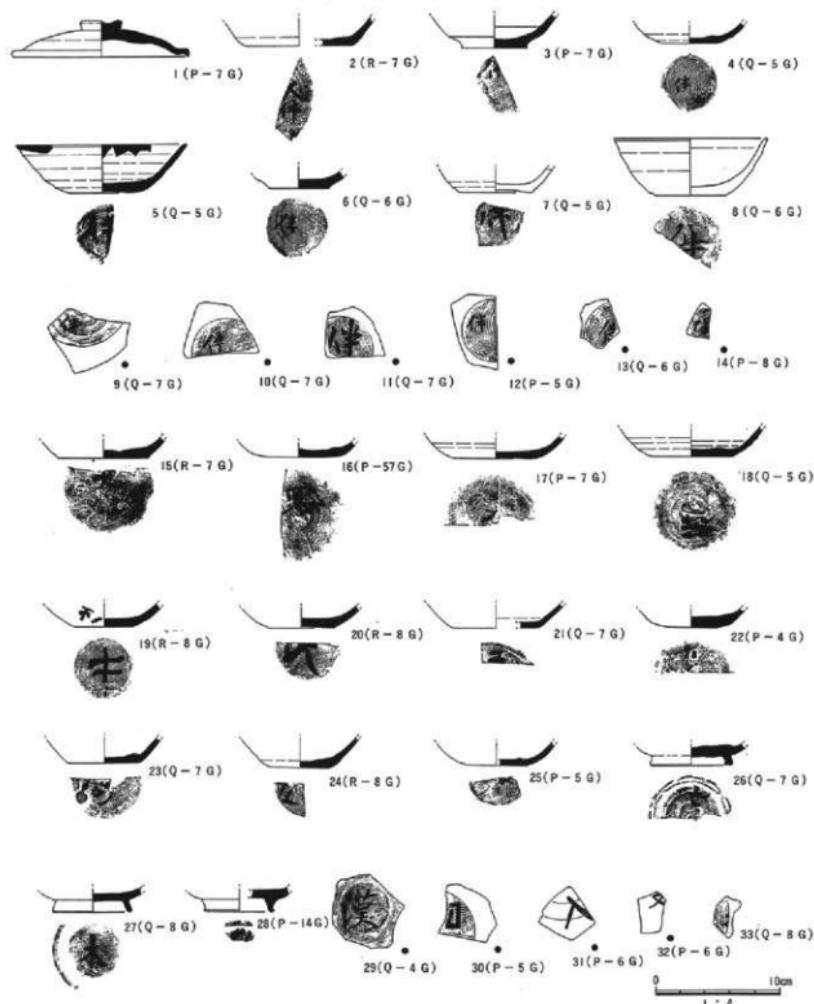
第30図 SG 1200河川跡遺物実測図(13)



第31図 SG1200河川跡遺物実測図14

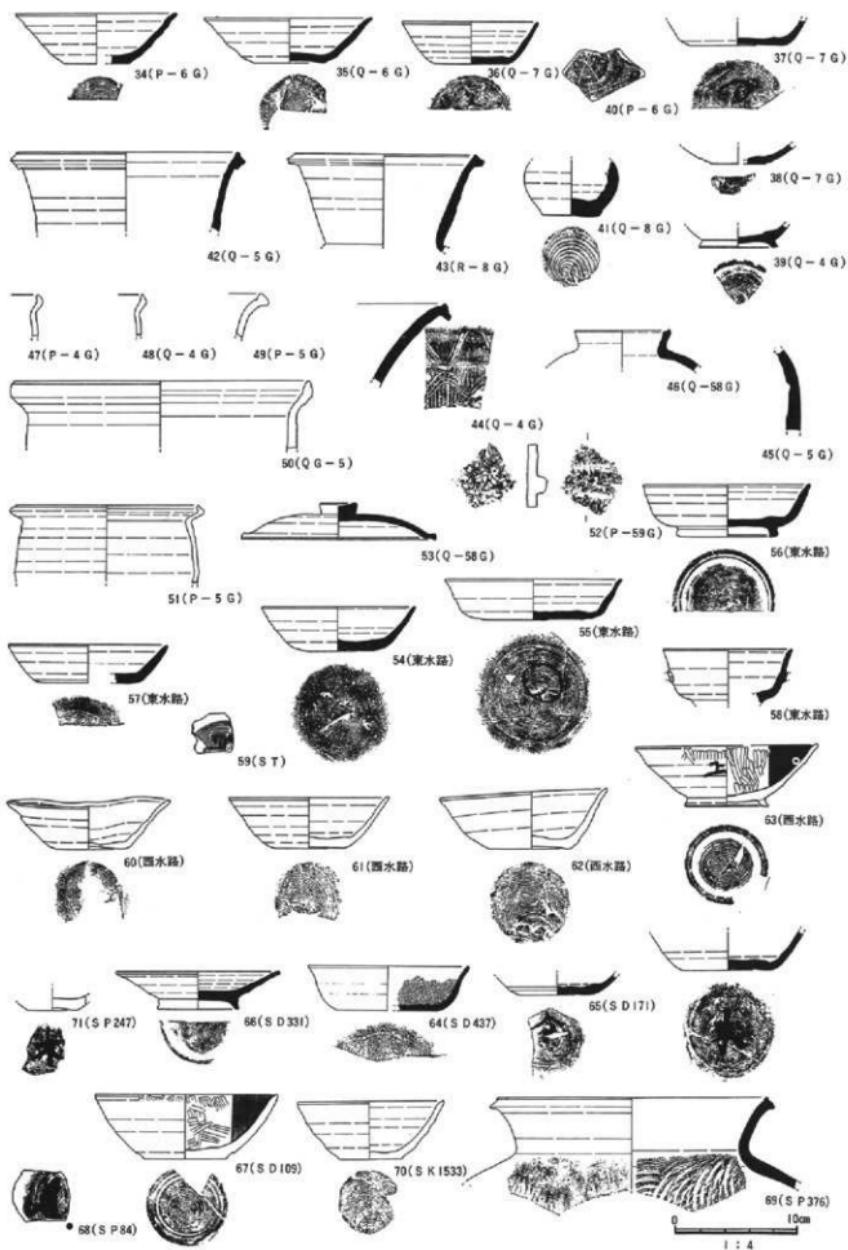
## 8 その他の遺物

先ず墨書き器が目立つ。A区ではとくに赤焼土器に付された「伴」が多い。9はヘラ切りであり、「大伴」から改姓されてあまり時期を置かない頃のものと思われる。その他氏族名としては29の「漢」第34図-16の「刑」が所見する。施釉陶器は第34図-23が緑釉陶器、24が灰釉陶器で2点確認されるが、緑釉陶器については猿投黒窯90号第2段階と推定され、9世紀第3四半期に比定される。A区から3.7cm四方の石帯が1点出土している。

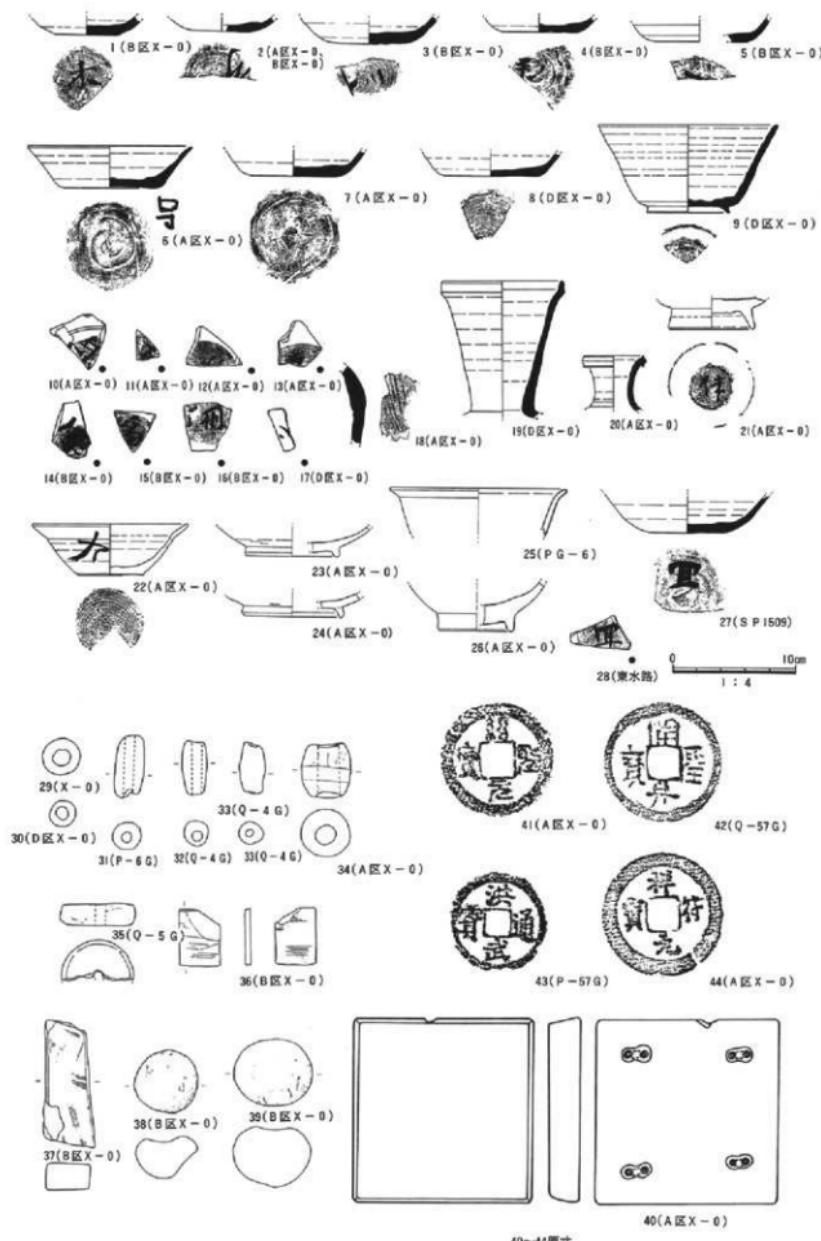


第32図 A・B区グリッド出土遺物実測図(1)

III 検出遺構と出土遺物



第33図 A+B区グリッド出土遺物実測図(2)



第34図 その他出土遺物

## III 檢出遺構と出土遺物

表4 SG1200河川跡土器観察表(1)

探査回数	種別	器種	計測値(mm)				底部切端	調整・成形		出土地点	備考
			口径	底径	器高	器厚		外面	内面		
第18回	3	須恵器	蓋	(148)			6	ロクロ	ロクロ	SG1200	
	4	II	蓋(縫)							II	墨書「宜」
	5	II	环	130	85	31	5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	墨書「火井 持田宿道者」
	6	II	II	134	73	34	4	II	II	II	墨書「大子子」外側鋸歯
	7	II	II		85		4	II	II	II	墨書「神製」
	8	II	II	132	76	37	4	II	II	II	墨書「宜」
	9	II	II	134	75	38	5	II	II	II	墨書「宜」
	10	II	II	134	85	38	4	II	II	II	墨書「宜」
	11	II	II	130	72	30	2.5	II	II	II	墨書「宜」
	12	II	II	134	75	38	5	II	II	II	墨書「宜」
	13	II	II	129	74	35	5	II	II	II	墨書「宜」
	14	II	II	132	69	35	5	II	II	II	墨書「宜」
	15	II	II	135	70	33.5	3.5	II	II	II	墨書「宜」
	16	II	II	133	73	36	4.5	II	II	II	墨書「宜」
	17	II	II	135	62	41	4	回転条切り	II	II	墨書「宜」
	18	II	II	136	80	39	4.5	ヘラ切り	II	II	墨書「宜」
	19	II	II	(133)	(80)	44	5	II	II	II	墨書「宜」
	20	II	II	128	76	32	3	II	II	II	墨書「宜」
	21	II	II	(140)	74	33	4	II	II	II	墨書「宜」
	22	II	II	(134)	75	32.5	5	II	II	II	墨書「宜」
	23	II	II	(130)	69	36	4.5	II	II	II	墨書文字不明
	24	II	II	(136)	70	35	4	II	II	II	墨書「宜」
	25	II	II	141	66	33	4	II	II	II	墨書「宜」
	26	II	II	II	72		4.5	II	II	II	墨書「宜」
	27	II	II	138	92	33	5	II	II	II	墨書「火・木・須恵 内面端
第19回	28	II	II	142	80	38	5	II	II	II	墨書「木」重ね焼き痕
	29	II	II	144	76	37	5	II	II	II	墨書「木」重ね焼き痕
	30	II	II	140	80	35	4	II	II	II	墨書「木」重ね焼き痕
	31	II	II	135	65	39	5	II	II	II	墨書文字不明 重ね焼き痕
	32	II	II	132	74	42	5	II	II	II	
	33	II	II	(134)	72	38	4.5	II	II	II	内面端概
	34	II	II	(130)	(78)	35	5	II	II	II	
	35	II	II	134	78	38	4.5	II	II	II	
	36	II	II	128	87	33	4.5	II	II	II	内面端痕 利用痕
	37	II	II	(135)	(72)	29	4	II	II	II	
	38	II	II	(145)	84	32	4.5	II	II	II	
	39	II	II	137	90	35	5.5	II	II	II	体部から底部へ煤
	40	II	II	137	89	37	3	II	II	II	墨書「十」
	41	II	II	142	90	38	4	II	II	II	墨書「十」
	42	II	II	138	90	41	5	II	II	II	墨書「十」側試焼台風
	43	II	II	140	71	46	4	II	II	II	墨書「十」側試焼台風
	44	II	II	139	88	40	4	II	II	II	底部墨痕
	45	II	II	(134)	90	34	5	II	II	II	
	46	II	II	138	88	40	4	II	II	II	
	47	II	II	135	85	34	3.5	II	II	II	
	48	II	II	(134)	72	31	4	II	II	II	底部墨付痕
第20回	49	II	II	126	62	37	4.5	II	II	II	
	50	II	II	(134)	(78)	35	5.5	II	II	II	
	51	II	II	(126)	(82)	35	4.5	II	II	II	
	52	II	II	130	78	30	3.5	II	II	II	
	53	II	II	125	85	29	5	II	II	II	
	54	II	II	(134)	75	35	4.5	II	II	II	底部ケズリ 塗装高台風
	55	II	II	138	75	38	4	II	II	II	
	56	II	II	129	80	32	3.5	II	II	II	底部墨痕
	57	II	II	(134)	75	30	4.5	II	II	II	墨書文字不明 内面端
	58	II	II	141	80	45	3	II	II	II	墨書「王」
	59	II	II	(122)	67	36	4	II	II	II	墨書「三ヵ」
	60	II	II	(108)	55	41	4	II	II	II	内外面横位墨痕
	61	II	II	128	76	42	4.5	II	II	II	体部横位墨痕「木」
	62	II	II	134	68	40	3.5	II	II	II	墨書「木」外側墨痕
	63	II	II	140	78	50.5	4	II	II	II	墨書文字不明 利用痕
	64	II	II	133	72	35	4.5	II	II	II	墨書文字不明 利用痕

表5 SG1200河川跡土器観察表(2)

拂因	No	種別	器種	計測値(mm)				底部切削	調整・成形		出土地点	備考
				口径	底径	器高	胎厚		外面	内面		
第20回	65	須恵器	环	134	68	46	4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SG1200	
	66	#	II	130	68	43	3.5	#	#	#	#	体部僅赤土器
	67	#	II	(132)	65	38	4	#	#	#	#	
	68	#	II	131	65	38.5	3	#	#	#	#	墨書文字不明
	69	#	II		72		3.5	#	#	#	#	墨書「木」
	70	#	II		79		3	#	#	#	#	墨書「宜」
	71	#	高台付环	148	72	75	5	#	#	#	#	
	72	#	II	142	82	72	4.5	#	#	#	#	
	73	#	II	104	58	51	5	#	#	#	#	
	74	#	II	111	51	48	3	#	#	#	#	
	75	#	II	105	57	48	2.5	#	#	#	#	軸用環か底部基底
	76	#	II	(112)	62	49	3	#	#	#	#	
	77	#	II	(102)	65	47	3.5	#	#	#	#	底部墨痕
	78	#	II	132	61	42	4.5	#	#	#	#	
	79	#	II	(120)	(61)	54	4	#	#	#	#	
	80	#	II	146	72	52	5	回転余切り	#	#	#	
	81	#	II		81		5	ヘラ切り	#	#	4T-SG1200	底部墨痕
	82	#	环	140	50	35	4	回転余切り	#	#	SG1200	墨書「宜」
	83	#	II	133	67	34	3.5	#	#	#	#	墨書「宜」
第21回	84	#	II	142	60	49	4.5	#	#	#	#	
	85	#	II	133	58	33	4	#	#	#	#	墨書文字不明
	86	#	II	127	56	30	5	#	#	#	#	
	87	#	II	126	54	34	4.5	#	#	#	#	
	88	#	II	132	60	40	4	#	#	#	#	墨書「宜」
	89	#	II	(132)	59	37	3	#	#	#	SG1200	墨書「宜」
	90	#	II	135	63	49	5	#	#	#	SG1200	内外面焼付帯
	91	#	II	(114)	46	49	4.5	#	#	#	#	
	92	?	II	(113)	(52)	40	5	#	#	#	#	墨書文字不明
	94	赤燒土器	II	(132)	68	39	4	ヘラ切り	#	#	#	墨書「木」内秀面赤燒
	95	#	II	130	66	38	4	#	#	#	#	墨書「木」
	96	#	II	135	73	48	4.5	#	#	#	#	墨書「木」内秀面赤燒
	97	#	II	137	68	37	4	ヘラ+ナデ	#	#	#	
	98	#	II	(146)	82	37	4.5	ヘラ切り	#	#	#	
	99	#	II	133	64	43	4.5	#	#	#	#	
	100	#	II	135	68	37	4	#	#	#	#	内外面赤燒鉛
	101	#	II	(127)	73	46	4.5	#	#	#	#	
	102	#	II	132	68	42	4	#	#	#	#	内外面赤燒鉛
	103	#	II	138	65	40	4	#	#	#	#	内外面赤燒鉛
	104	#	II	135	66	37	4	#	#	#	#	内外面赤燒鉛
	105	#	II	128	52	49	4	回転余切り	#	#	#	
	106	#	II	135	55	49	3.5	#	#	#	#	墨書文字不明
	107	#	II	130	52	47	4	#	#	#	#	
第22回	108	#	II	(127)	(56)	42	5	#	#	#	#	
	109	#	III	(130)	(52)	39	4.5	#	#	#	#	
	110	#	II	131	52	31	4.5	#	#	#	#	
	111	#	II	(164)	66	56	5	余切りケズリ	ロクロ+ミガキ	#	#	
	112	赤燒土器	葉	(145)		3.5				#		
	113	#	II	131		3.5				#		
	114	#	II	(129)		4				#		
	115	#	II	(148)		4.5				#		
	116	#	II	(264)		6.5				#		
	117	#	II	(223)		5				#		
	118	#	II	(214)		7				#		内外面口縁部焼

表6 SG1200河川跡土器観察表(3)

擇回 No	種別	器種	計測値(cm)				底部切離	調整・成形		出土地点	備考	
			口径	底径	高さ	厚さ		外側	内側			
第22回	120	赤陶土器	环	(136)			4			S G1200		
	121	II	II	(169)			5			II		
	123	II	円錐形		(120)					II		
	125	須恵器	長頸壺	104			4	ロクロ	ロクロ	II		
	126	II	甕	104	196	10		II	ロクロ・タキ	II	頭部部接続状況	
	127	II	II	110	234	5.5		ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	II		
	128	II	甕	108	265	7		ロクロ+ナメ	ロクロ+タキ	II	底部タキ	
	129	須恵器	甕	94		10		ロクロ+ハメ	ロクロ+タキ	II	高台付	
	1	須恵器	蓋	(174)		30	5.5	ロクロ	ロクロ	P-7G	内面軋用窓	
第32回	2	II	环	(90)		4.5	ヘラ切り	II	II	R-7G	墨書「大年」	
	3	II	II	52		5	回転条切り	II	II	P-7G	墨書「伴」	
	4	II	II	45		3.5	II	II	Q-5G	墨書「伴」		
	5	II	II	(138)	(56)	4	II	II	II	II	墨書「伴」保度	
	6	II	II	50	(40)		II	II	Q-6G	墨書「伴」		
	7	赤陶土器	II	(60)			II	II	Q-5G	墨書「伴」		
	8	須恵器	II	58			II	II	Q-6G	墨書「伴」		
	9	II	II	(124)	(70)	(47)	4	ヘラ切り	II	II	墨書「伴」	
	10	II	II	(55)		4	回転条切り	II	II	II	墨書「伴」	
	11	II	II	(55)			回転条切り	II	II	II	墨書「伴」	
	12	II	II	(51)			II	II	P-5G	墨書「伴」		
	13	II	II	(60)			II	II	Q-6G	墨書「伴」		
	14	II	II	(75)		4.5	ヘラ切り	II	II	R-7G	墨書「伴」	
	16	II	II	78		4	II	II	P-5G	墨書「宜」		
	17	II	II	(68)		4	II	II	P-7-8G	墨書文字不明		
	18	II	II	66		3.5	II	II	Q-5G	墨書「羽々」		
第33回	19	II	II	49		5.5	回転条切り	II	II	R-8G	墨書「キカ」	
	20	II	II	55		4	II	II	II	II	墨書「木」	
	21	II	II	(70)		3	ヘラ切り	II	II	Q-7G	墨書文字不明	
	22	II	II	58			II	II	P-4G	墨書文字不明		
	23	II	II	60		4	回転条切り	II	II	Q-7-8G	墨書「高々」	
	24	II	II	(50)		3	II	II	R-8G	墨書文字不明		
	25	II	II	(50)		4	II	II	P-5G	墨書文字不明		
	26	II	高台付环	68			ヘラ切り	II	II	Q-7G	墨書「七カ」	
	27	II	高台付盖	66			回転条切り	II	II	Q-8G	墨書「木」	
	28	II	高台付环	(55)			II	II	P-14G	墨書文字不明		
	29	II	环	(62)			II	II	Q-4G	墨書「灘」		
	30	II	II	(55)			II	II	P-5G	墨書文字不明		
	31	II	II			3.5		II	II	P-6G	墨書「人カ」	
	32	II	II			5	回転条切り	II	II	II	墨書文字不明	
	34	II	II	(134)	(55)	41	4.5	II	II	P-6-7G Q-7G		
	35	II	II	(138)	60	37	5	II	II	Q-6-7G P-6G		
	36	II	II	112	62	34	3.5	ヘラ切り	II	II	Q-7G	
	37	II	II	80		4	II	II	II	II	墨書文字不明	
	38	II	II	(45)		4	回転条切り	II	II	II	墨書「伴」	
	39	II	高台付环	(64)		4	ヘラ切り	II	II	Q-4G	線刻	
	41	II	甕	48		9	回転条切り	II	II	Q-8G		
	42	II	短颈甕	(180)		6.5	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	Q-5G		
	43	II	長颈甕	(146)		7	II	II	II	R-8G		
	44	II	甕	(540)		8	II	II	ロクロ+タキ	Q-4G	内面側部直角接続状況	
	45	II	横瓶			7.5	ロクロ	II	ロクロ	Q-5G		
	46	II	II	(76)		5		II	ロクロ	P-58G		
	47	赤陶土器	甕			5		II	II	P-4G		
	48	II	II			4		II	II	Q-4G		

表7 SG 1200河川跡木製品調査表(4)

辨別番号	種別	器種	計測値(mm)				出土地点	備考
			長さ	幅	厚さ	高さ		
第23回	1	木製品	204	192	13		SG 1200	
	2	〃	77	77	20		〃	
	3	〃	102	9			〃	
	4	〃	130	5			〃	
	5	〃	197	87	5	20	〃	
	6	〃	205	156	4	17	〃	
	7	〃	169	138		23	〃	
	8	〃	126	132	15		〃	
	9	〃	113	110	17		〃	
第24回	10	〃	137	7			〃	
	11	輪	96	9			〃	
	12	〃	160	95	9	73	〃	
	13	〃	85	60		10	〃	
	14	蓋	150	72	8		〃	
	15	〃	144	52	8		〃	
	16	〃	115	58	7		〃	
	17	〃	158	62	7		〃	
	18	〃	200	53	12		〃	添付書
	19	〃	201	87	9		〃	
	20	〃	187	93	6		〃	
	21	〃	150	150	15		〃	
第25回	22	箸	290	7	6		〃	
	23	〃	242		5		〃	
	24	〃	239	6	5.5		〃	
	25	〃	236	5.5	7		〃	
	26	〃	237	7.5	4		〃	
	27	〃	226	6	5		〃	
	28	〃	236	5	8		〃	
	29	〃	254	10	5		〃	
	30	〃	153	32	4		〃	
	31	〃	119	14	4		〃	
	32	〃	67	14	2.5		〃	
	33	〃	65	15	3		〃	
	34	棒状製品	64	17	4		〃	
	35	〃	86	13	4		〃	
	36	〃	114	11	4		〃	
	37	〃	293	17	15		〃	
	38	〃	260	15	13		〃	
	39	〃	321	16	6.5		〃	
	40	〃	187	48	20		〃	
	41	〃	163	18	12		〃	
	42	〃	115	15	11		〃	
	43	〃	245	10	7		〃	
	44	〃	186	7	5		〃	
	45	〃	276	12	11		〃	
	46	〃	315	27	9		〃	
	47	〃	362	10	9		〃	
	48	〃	318	13	13		〃	
	49	〃	273	9	8		〃	
	50	〃	291	8	5		〃	
	51	〃	406	11	10		〃	
	52	〃	669	15	13		〃	
	53	〃	345	17	5		〃	
	54	〃	325	12.5	5		〃	

## III 検出遺構と出土遺物

表8 S G1200河川跡木製品観察表(5)

排 回 №	種 別	器 種	計 測 値 (mm)				出 土 地 点	備 考
			長さ	幅	厚さ	高さ		
第26回	55	木製品	392	18	6		S G1200	
	56	〃	330	14	2		〃	
	57	〃	369	18	4.5		〃	
	58	〃	291	16	11		〃	
	59	〃	287	19	10		〃	
	60	〃	116	17	2		〃	
	61	〃	152	16	5.5		〃	
	62	〃	530	18	8		〃	
	63	〃	445	19	7		〃	
	64	〃	513	68	62.5		〃	
第27回	65	〃	330	24	14		弘の面カ	
	66	〃	396	38	29		〃	
	67	〃	430	81	84		〃	
	68	〃	430	65	54		〃	
	69	〃	479	42	44		〃	
	70	棒	206	21	21		〃	
第28回	71	棒状製品	195	20	10		〃	
	72	〃	255	25	2		〃	
	73	〃	259	19	4		〃	
	74	〃	291	52	15		〃	
	75	〃	152	17	6		〃	
	76	〃	145	12	4		〃	
	77	〃	136	25	4		〃	
	78	〃	118	27	4		〃	
	79	〃	85	15.5	8		〃	
	80	〃	80	28	3		〃	
	81	〃	135	64	14		〃	
	82	〃	260	71	5		黒竈	
	83	〃	74	43	4		黒竈	
	84	〃	127	33	5		〃	
	85	〃	169	31	4		〃	
	86	〃	96	35	9		〃	
	87	〃	220	61	22		〃	
	88	板状製品	682	86	20		〃	
第29回	89	〃	77	25	6		〃	
	90	〃	106	34	6.5		〃	
	91	〃	155	62	7		〃	
	92	〃	139	42	30		〃	
	93	〃	42	63			〃	
	94	木製容器	78	53	60	10	〃	
	95	〃	60	27	18		〃	
	96	板状製品	685	210	23		〃	
	97	〃	595	133	8		〃	
第30回	98	〃	529	79	10		〃	
	99	不明	420	57	36		〃	
	100	不明	195	34	25		〃	
	101	不明	223	55	14		〃	
	102	曲物	67	84	10		〃	
	103	〃				43	〃	
	104	〃	157	156	13		〃	
第31回	105	〃		160	3	54	〃	
	106	紫	325	137	28		〃	
	107	〃	270	139	18		〃	
	108	〃	350	157	25		〃	

表9 A・B区グリッド等遺物観察表(6)

探 因 №	種 別	器 種	計 測 値 (mm)				底部切離	調 整・成 形		出 土 地 点	備 考
			口径	底径	器高	器厚		外 面	内 面		
第33回	49	赤燒土器	鍋			5		ロクロ	ロクロ	P-5G	
	50	"	甕	(252)		9		ロクロ・ナデ	ロクロ・ナデ	Q-5G	
	51	"	"	(150)		5		ロクロ	ロクロ	P-5G	
	52	"	五態力			7				P-59G	毛ミ痕
	53	須恵器	蓋	(159)		5		ロクロ	ロクロ	Q-58	
	54	"	坏	126	74	36	3.5	ヘラ切り	〃	〃	東水路
	55	"	"	(140)	92	33	3	〃	〃	〃	墨書「〇」
	56	"	高台付环	(136)	82	43	6	〃	〃	〃	
	57	"	坏	(135)	(84)	31	5.5	〃	〃	〃	
	59	"	双耳坏	(105)			3.5	〃	〃	〃	
	60	赤燒土器	坏	134	54	48	2.5	圓軸条切り	〃	〃	西水路
	61	"	"	(131)	57	42	3.5	〃	〃	〃	
	62	"	"	136	64	45	4.5	〃	〃	〃	
	63	土師器(内黒)	高台付环	146	67	50	3.5	圓軸条切り	ロクロ・ミガキ	ロクロ	西水路
	64	須恵器	坏	(130)	(80)	37	4	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	S D437
第34回	65	"	"	"	(60)		4	〃	〃	〃	S D171
	66	"	高台付盖	(134)	66	31.5	3.5	圓軸条切り	〃	〃	S D331
	67	土師器(内黒)	坏	(150)	66	53	6	〃	ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	S D109
	69	"	甕	(220)		7		ロクロ・ミガキ	ロクロ・ミガキ	ロクロ・タタキ	S P376
	70	赤燒土器	坏	(120)	52	48	4.5	圓軸条切り	ロクロ	ロクロ	S K1533
	71	"	"	"	46			〃	〃	〃	S P247
	72	須恵器	"	"	72		4	ヘラ切り	〃	〃	S X215
	1	"	"	"	53		5.5	圓軸条切り	〃	〃	B区-0
	2	"	"	"	55		4	ヘラ切り	〃	〃	A区X-0
	3	"	"	(56)			4.5	圓軸条切り	〃	〃	D区X-0
	4	"	"	(62)				ヘラ切り	〃	〃	B区X-0
	5	"	"	(80)		4	〃	〃	〃	〃	B区X-0
	6	"	"	"	75	35	3.5	〃	〃	〃	A区X-0
	7	"	"	"	75		4	〃	〃	〃	A区-0
	8	"	"	(74)			4	圓軸条切り	〃	〃	D区X-0
	9	"	高台付环	(67)	(72)	5	ヘラ切り	〃	〃	〃	D区X-0
	21	土師器(内黒)	"	"	70			圓軸条切り	ロクロ・ミガキ	〃	A区X-0
	22	赤燒土器	坏	(128)	56	41	3	〃	ロクロ	〃	A区X-0
	23	縫輪陶器	碗	"	(76)		3.5	ヘラ切り			A区X-0
	24	灰輪陶器	"	"	(78)		5	〃			A区X-0
	25	青磁	"	(144)			4.5	〃			P-6G
	26	"	"	(60)		5					A区X-0
	27	須恵器	坏	"	(72)		4	〃			S P1509 東水路
	31	土製品	土鍋	兵士 S2	幅23		厚さ				P-6G
	32	"	"	47	20						Q-4G
	33	"	"	43	21						Q-4G
	34	灰輪陶器	"	47	40						A区X-0
	35	土製品	鉗頭車	62			18				Q-5G
	36	石製品	擦石	46	34		4.5				B区X-0
	37	"	砥石	110	40		20				B区X-0
	38	"	凹石	51							B区X-0
	39	"	凹石	55							B区X-0
	40	"	石卷								A区X-0
	41	銅製品	古鏡								A区X-0
	42	"	"								Q-57G
	43	"	"								P-57G
	44	"	"								A区X-0

## IV まとめと考察

今調査は高瀬川地区における県営ほ場整備事業に起因する緊急発掘調査である。平成4年度に既に羽越本線をはさんで反対側の水路工事に伴い線掘り調査を行い、土壌・溝跡・井戸跡等の遺構が確認された。遺跡は南北750m・東西250mにわたり分布している。遺跡全体として北端部分にあたるA・B区及び南端に位置するC～E区の5ヶ所を主に、更に両端をつなぐ形で管水路部分を2m幅で線掘りした。おおよそ遺跡の概要が把握し得た。その結果A区とD区を中心両端に居住域が所在することが確認されたが、当初予想されたそとの間についても遺構の検出は2T・4Tに限定された。調査区からは全体として110箱以上の遺物が出土した。その内集中的に出土したのはA区溝跡(S D73)とD区河川跡(S G1200)である。とくに河川跡からは約8箱の土器と30箱の木製品が出土した。削平をかなり受けていることも明白であるが、遺構的にみれば、もともと集落と推定されるのは本遺跡全体から見れば、南北両端に営まれていたと考えられる。南端に位置するD区が先行すると考えられるが、A・B区においてもD区と同じ墨書きが須恵器坏に数点所見されことから同時期に存在した可能性が指摘できる。

が、D区とA・B区の下限時期については大きく異なる。何らかの事情で居住域を高瀬川の川上から川下に移したものとも推定される。出羽国にとって最上川北半の現酒田・鮭海地域は出羽国府（井口国府）の所在地として政治的に重要な位置を占めており、集落の形成や移動・移住が自由に行えたとは思えず、強い規制があったと推測されるのである。供膳形態土器からみてD区がヘア切り須恵器坏が主体的であるのに対して、A・B区は明らかに赤燒土器坏が中心であり、両者には100年以上の時間差があると思われる。後述するが両者には住民の共通性が見られる。墨書き土器「大伴」と「伴」の出土である。周知のとおり、この氏族名は淳和天皇の諱「大伴」を避けるため823年に氏族名を「伴」に改姓されたものだが、本来的には同族である。D区では「大伴」のみ所見され、「伴」は1点も出土していない。A・B区では「伴」が21点確認され、「大伴」も1点認められる。また、「木」はD区で10点、A・B区でも8点の出土がみられる。

宮ノ下遺跡周辺の遺跡も含めて、今調査で出土した墨書き土器に注目し若干のまとめをおこないたい。次にこれまでの遺構・遺物の検討から本遺跡に関して、その性格と年代観について考察を加えたい。

### (1) 墨書き土器について

庄内地方におけるこれまでの発掘調査で、墨書き土器は1850点以上確認されており、数量的には隣県と比べてもかなり多い。墨書き土器は律令制下の具体的な地方行政や集落での生活・祭祀の在り方等を追究するうえで貴重で、有効な素材となっており、近年注目をあげている。文字資料としてのみならず、考古遺物としてとらえるなら土器編年にとっても今日では不可欠の資料となっている。今回の調査では計126点の墨書き土器が出土している。この内3点については厳密には墨書きではなく、漆のようなもので書かれた文字である。種別

では須恵器が104点、赤焼土器が17点、内黒土師器が5点である。器種としては蓋の鉢2点を除いて全て壺に墨書きされている。墨書きは須恵器無高台壺で見た場合、ヘラ切りが64点、糸切りが31点、高台壺の2点はヘラ切りである。赤焼土器では17点中、3点がヘラ切りである。ヘラ切り須恵器壺に墨書きされている割合が高い。出土地点からみるとSG1200河川跡からの出土が52点、その周辺部からが7点あり、最もまとまって出土している。つづいてSD73溝跡からの13点である。墨書き位置は体部が20点、蓋鉢の頂部が2点の他は底部である。須恵器に付された墨書きと赤焼土器に墨書きされた段階では、墨書きのもつ意味や機能が変化していると理解されている。一般的に説かれるように墨書き土器が量的に多く見られるのは供膳形態土器として須恵器が主体的な段階であり、本遺跡もその例外ではなく。D区SG1200河川跡の墨書き土器はその典型といえる。墨書きの目的・機能は大別すれば、帰属と祭祀であろう。その意味では墨書きは文字に限定されるものではなく、記号でも十分機能するのであり、現に全国的にもそういう種類の墨書きが多くみられる。

今調査で墨書きされた文字について着目すると、「宣」が最も多く29点、次いで「伴」が21点、「木」が18点、「十」が3点確認される。「宣」はヘラ切りと糸切りの違いがあるが須恵器に限られて墨書きされている。「伴」は前述したように上限の年代が推定できる貴重な墨書きであるが、須恵器が14点、赤焼土器が4点、内黒土師器が3点に所見される。また、「伴」はD区及びその周辺においても全く出土していない。河川跡の出土土器をみても、改姓前の9世紀第1四半期までに全て比定できるものではなく、確実にそれ以降まで下る土器が少なからず含まれる。「伴」氏に改姓後も居住は同じ所で継続していたと推測される。にもかかわらず、「伴」がA・B区に限定されるのは如何なる理由に拠るものだろうか。D区の須恵器2点に如何なる目的で「大伴」・「大伴子」という墨書きが記されたのかと関連する問題ではなかろうか。

周辺遺跡においては、「大伴人」の出土例が酒田市生石2遺跡で須恵器蓋1点にみられる。「伴」については大坪遺跡出土木簡の中に「富」の負担者として「伴祚万呂」が所見される。また、本遺跡と同じく今年度調査が行われた北目長田遺跡においても赤焼土器壺1点にみられる。墨書き文字についてはこの「大伴」の他に同じ河川跡から出土した「神奴」が注目される。県内初出であり、全国的にも例がないのではなかろうか。遺跡の北西約5.3kmの吹浦に鳥海山を神体とする延喜式内社大物忌神社が鎮座しており、周辺には神戸が所在していたことが分かる。これと関連するものだろうか。

また、A区SD73溝跡から出土している赤焼土器壺の体部に正位で記された「四天王」とその右の「導」が興味深い。四天王は仏教で四至を守護、鎮護するものとして理解され、秋田城には四天王寺が置かれていた。「導」は特異な墨書きであるが、周辺の大坪遺跡で18点確認されるが「忌寸」の合わせ文字と推定されている。秋田城でも1点同じ字形がみられる。大坪遺跡のものはヘラ切り須恵器壺であり、ここでは10世紀代に比定される赤焼土器という違いからかなりの時期差が指摘される。体部に正位で書かれた「十」についても秋田城に出土例がある。A区出土の「漢」は渡来系の氏族名と推定される。

全体的に直接官衙乃至その関連施設を示すものではないが、先掲墨書のように一般集落とは異なるものが確認され、それは当然遺跡の性格を反映しているものであろう。

次に庄内の最上川北半地域でこれまで確認されている墨書き器について概観してみたい。

当該地域は9世紀初頭からの出羽国府が置かれていた有力な比定地である。創建については『日本三代実録』仁和3(887)年5月20日条に所見するように延暦年間とする説と小野守の陸奥守在任期間から導出された弘仁年間とする説があり、微妙な時期差が生ずるが9世紀第1四半期でおさまる。律令制下の地方行政にとって最も重要な施設が置かれ、政治が実際に行われていたにもかかわらず、墨書き文字からみれば、例えば秋田城や払田柵跡出土のものと比較しても官衙的なものを見いだすことができない。それは継続調査が行われている酒田市城輪柵跡についても同様である。「厨」という墨書きを例にとっても庄内だけでなく、県内においても未だに確認されていない。寛平8(896)年の年紀をもつ木簡が出土した置賜郡衙の推定地たる川西町道伝遺跡でもそれは確認されてはいない。数多くの土器に付された墨書きは国を越えて共通している、例えば「千」・「万」・「豈」・「富」等に代表されるような極めて一般的な、集落的なものが圧倒的である。

一方酒田・飽海郡域において墨書き器の出土点数が多い遺跡は板材列を伴う団み施設が検出される所が多い。酒田市の手藏田5遺跡(26点)、生石2遺跡(544点)、南興野遺跡(85点)、熊野田遺跡(205点)、八幡町の沼田遺跡(106点)、俵田遺跡(16点)そして遊佐町では小深田遺跡(47点)、大坪遺跡(130点)等があげられる。板材列は当時の集落において決して一般的ではない。区画して、他と区別する必要があったと考えられ、それは公的性格を帯びていたからであろう。しかし、その具体的な性格・機能が判然としない。確実に存在したはずの出羽郡衙・飽海郡衙や延喜式に所見する飽海駅・遊佐駅も確認されていない。かなり広範囲にわたり平野部の発掘調査が行われているにもかかわらずである。これまでの調査成果をふまえて当該地域の歴史像を再検討、再構築してみる必要性を痛感するのである。そのためにも最上川南北をも含めた墨書き器の見直しが必須であり、有効な手段であると考える。

## (2) 遺跡の性格と年代観について

出土土器の組成・形態から遺跡の年代を探っていきたい。その後性格について考え、まとめとしたい。前述のとおり、遺跡は南北間750mにわたって細長く分布し、今調査区はその南北端を対象としている。両端とも現在の庄内高瀬川水系により形成された自然堤防上に立地していたと思われる。また、調査は両端の間についても線掘で行っている。その区間で遺構を検出したのは2T及び4T・5Tのみであり、2Tは溝跡が1条のみである。これらのことから当初予想された遺跡の分布とは異なり南北部分は連続していないと推定される。全体的にかなり削平を受けていることから線掘調査の区間でも遺構が所在した可能性は考えられるが、直接連続していることを示すものは確認できなかった。更に南北部分においても土器等に顕著な相違が認められ、D区に広がる集落の形成がA・B区に先行したことが窺える。ただ、A・B区においてもD区で所見される墨書きと同じ文字がみられ

ることから同時期に存在したことがあったとも思われる。S B 5 建物跡や S D 649 溝跡が先行するが、A・B区で例えば純柱の掘立柱建物がつくられ、全面的に展開するのは10世紀前後のことである。供膳形態土器に占める須恵器の割合の著しい低さ、S D 73溝跡の投棄土器、S E 266井戸跡最下層で検出の火山灰等から915年前後と比定される。火山灰降下時点でのこの井戸は使用されており、居住していたのである。対照的にD区ではこの火山灰を含む層には遺物はなく、居住はしていないかったものと考える。墨書「大伴」の出土及びヘラ切り須恵器の多さからD区に広がる集落の形成期は9世紀前半、第1四半期までさかのぼり得る。遊佐町内でヘラ切り須恵器が主体的な集落の発掘例は初めてであり、改めて最上川以北での集落の形成期がいつ頃で、どの辺りから形成・整備されたのかという問題を喚起させる。これまでの調査でヘラ切り須恵器が量的に多く出土しているのは酒田東部丘陵から平野部約1~1.5kmの所に位置する遺跡である。酒田市生石2遺跡と平田町の桜林遺跡周辺部及び遊佐町宮ノ下遺跡と上高田遺跡周辺部に地域的にまとまりがみられ、平野部まで面的に広がらない。

窯跡についてもその近くにそれぞれ剣龍神社東西窯跡及び山楯5窯跡、願瀬山窯跡群が確認される。形成期の集落分布を示していると思われる。おそらく、最上川から平田町飛鳥周辺に上陸し、先の遺跡を結び吹浦周辺までつながる南北方向の線状に8世紀末~9世紀前後の集落乃至居住域が所在していたのではなかろうか。

つまり官道に沿う形で行政的に整備がなされたものと考えられ、それに近接して出羽郡衙・飽海郡衙そして飽海駅・遊佐町も置かれたと推定される。が、未だ検出は確認されていず、これから調査に期すところが大きい。これら周辺部には国府や郡衙の管理下にある正倉等公的施設も所在したはずである。本遺跡D区河川跡から出土した多くの木製品から、左岸の居住域についてその製作に関わる場と想定した。施設としての建物跡は未確認だが、工房が考えられ、それは公的な性格を有するものと思われる。規模的にみて、郡衙の管理下にある工房の一つではなかろうか。墨書土器の出土点数の多さもかかる性格に由来するものであろう。

遺跡全体としては南端部分D区と北端部分A・B区は住民としての「大伴」「伴」氏の共通性が指摘できるが、その性格は継続されてはいない。

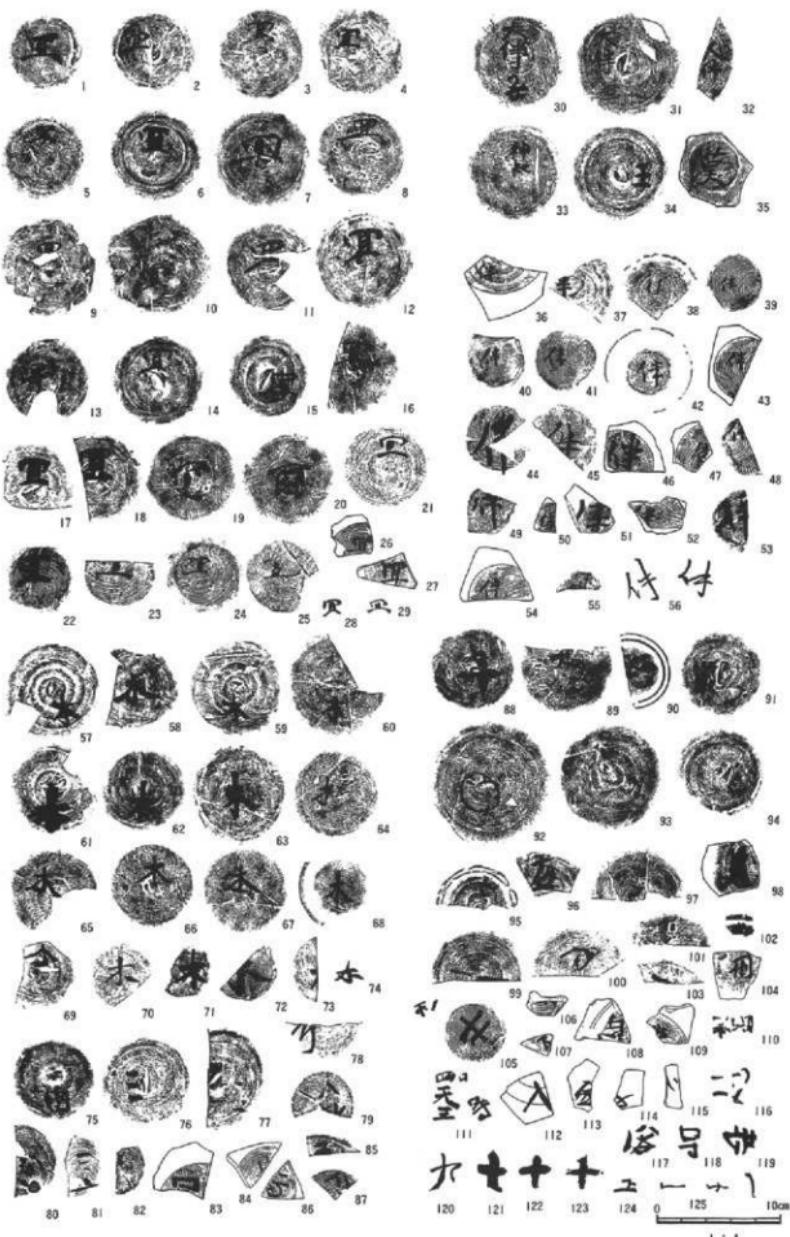
最後に今調査ではヘラ切り須恵器が多く出土し、供給地を比較する必要からA・B区の東方500mに位置する剣龍神社西窯跡の土器を表面採取した。また、以前から遊佐町教育委員会の保管になる同窯跡出土土器と伝えられるものについても比較、検討を加え底径や器形的特徴が共通していることから、この度の採取土器と同じ剣龍神社西窯跡のものと判断され、図化して併せて第36図に掲載した。年代観としては8世紀第3四半期が想定され、最上川以北地域で現在確認される窯跡の中で最も古いものである。今後の正式な調査に期待したい。

表10 墓書土器出土地点一覧(1)

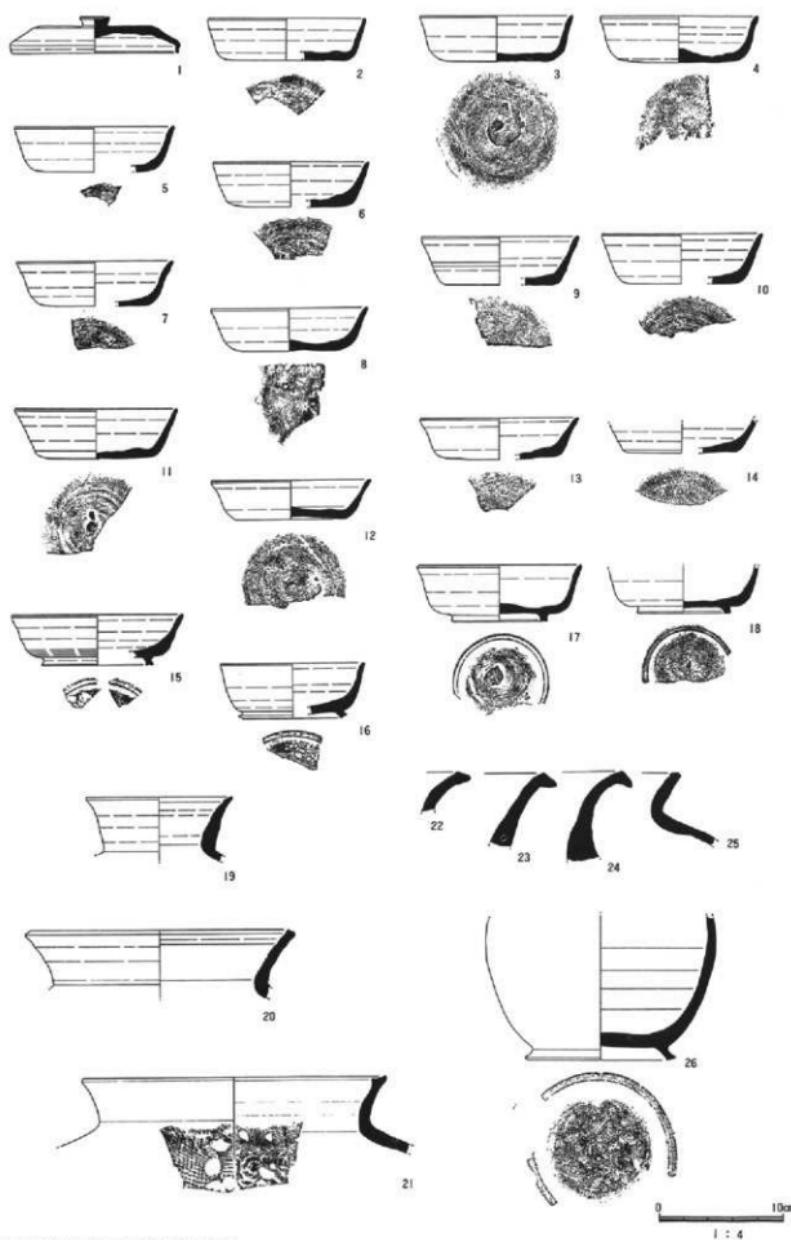
番号	辨団番号	種別・器種	底部切り口	墨書文字	墨書き位置	出土地点	備考
1	18- 17	須恵器	坪	糸切り	宣	底部	SG1200
2	18- 25	須恵器	坪	ヘラ切り	ノ	底部	SG1200
3	18- 9	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
4	18- 16	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
5	18- 20	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
6	18- 11	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
7	18- 12	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
8	18- 13	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
9	18- 18	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
10	18- 19	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
11	18- 21	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
12	18- 10	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
13	18- 24	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
14	18- 15	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200 内面漆付着
15	18- 14	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
16	32- 16	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	P-5TG
17	34- 27	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	東水路S1P109
18	18- 22	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
19	18- 26	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
20	18- 8	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
21	20- 70	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
22	20- 82	須恵器	坪	糸切り	ノ	底部	SG1200
23	21- 89	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
24	20- 83	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
25	21- 88	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SG1200
26	33- 58	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	東水路1~2区
27	34- 28	須恵器	坪	ヘラ切り	ノ	底部	東水路トントチ
28	18- 1	須恵器	圓	ノ	ノ	軸	東水路
29	18- 4	須恵器	坪	ノ	ノ	軸	SG1200
30	18- 6	須恵器	坪	ノ	大伴子	底部	SG1200 内外面煤灰 灯明皿カ
31	18- 5	須恵器	坪	ノ	大伴	底部	SG1200 漆帷布
32	32- 2	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	R-7G
33	18- 7	須恵器	坪	ノ	神奴	底部	SG1200
34	20- 58	須恵器	坪	ノ	王	底部	SG1200
35	32- 29	須恵器	坪	糸切り	裏	底部	Q-4G
36	32- 9	須恵器	坪	ヘラ切り	伴	底部	Q-7G
37	34- 4	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	B区X-0
38	15-108	内黑	高台坪	糸切り	ノ	底部	SD73
39	32- 4	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	Q-5G
40	10- 4	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	SD77-P-5G
41	32- 6	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	Q-6G
42	34- 21	内黒	高台坪	ノ	ノ	底部	A区X-0
43	32- 12	須恵器	坪	ノ	ノ	底部	P-5G
44	15- 92	赤陶	ノ	ノ	ノ	底部	SD73
45	32- 8	赤陶	ノ	ノ	ノ	底部	Q-6G
46	32- 11	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	Q-7G
47	32- 13	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	Q-6G
48	32- 3	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	P-7G
49	32- 7	赤陶	ノ	ノ	ノ	底部	Q-5G
50	32- 14	須恵器	ノ	糸切り	ノ	底部	P-8G
51	34- 14	須恵器	ノ	ヘラ切り	ノ	底部	B区X-0
52	15-103	内黒	坪	糸切り	ノ	底部	SD73
53	32- 5	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	Q-5G
54	32- 18	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	Q-7G
55	33- 38	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	Q-7G
56	14- 77	赤陶	ノ	ノ	ノ	体部	SD73
57	19- 30	須恵器	ノ	ヘラ切り	木	底部	SG1200
58	12- 2	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	SD73
59	19- 29	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	SG1200
60	19- 28	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	SG1200
61	20- 69	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	SG1200
62	20- 62	須恵器	ノ	ノ	ノ	底部	SG1200 口縁部塗灰
63	33- 72	須恵器	坪	ヘラ切り	木	底部	S X215

表10 墓書土器出土地点一覧(2)

番号	鉢・圓番号	種別・器種	底部切り離し	墨書き文字	墨書き位置	出土地点	備考
64	21- 97	赤焼	口	余切り	木	底部	S G1200
65	21- 96	赤焼	口	ヘラ切り	タ	底部	S G1200
66	21- 95	赤焼	口	口	タ	底部	S G1200
67	21- 94	赤焼	口	口	タ	底部	S G1200
68	32- 27	須恵器	高台皿	余切り	タ	底部	Q-8G
69	33- 66	須恵器	环	ヘラ切り	タ	底部	S D171
70	34- 1	須恵器	口	余切り	タ	底部	B区X-0
71	33- 71	赤焼	口	口	タ	底部	S P247
72	32- 20	須恵器	口	口	タ	底部	R-8G
73	12- 3	須恵器	口	口	タ	底部	S D73
74	20- 61	須恵器	口	ヘラ切り	タ	体部	S G1200
75	20- 68	須恵器	口	口	不明	底部	S G1200
76	20- 59	須恵器	口	口	三カ	底部	S G1200
77	20- 63	須恵器	口	口	不明	底部	S G1200
78	34- 2	須恵器	口	口	万	底部	A+B区 X-0
79	21- 92	赤焼	口	余切り	不明	底部	S G1200
80	32- 23	須恵器	口	口	高カ	底部	Q-7G・Q-8G
81	34- 3	須恵器	口	口	不明	底部	D区X-0
82	32- 25	須恵器	口	口	不明	底部	P-5G
83	32- 30	須恵器	口	口	不明	底部	P-5G
84	34- 12	須恵器	口	口	不明	底部	A区X-0
85	32- 21	須恵器	口	ヘラ切り	不明	底部	Q-7G
86	34- 15	須恵器	口	口	不明	底部	B区X-0
87	32- 24	須恵器	口	余切り	不明	底部	R-8G
88	20- 64	須恵器	口	ヘラ切り	不明	底部	S G1200
89	32- 15	須恵器	口	口	大カ	底部	R-7G
90	12- 5	須恵器	高台坏	口	武	底部	S D73
91	32- 18	須恵器	环	口	羽カ	底部	Q-5G
92	33- 55	須恵器	口	口	○	底部	東水路
93	19- 31	須恵器	口	口	不明	底部	S G1200
94	18- 23	須恵器	口	口	不明	底部	S G1200
95	32- 26	須恵器	高台坏	口	七カ	底部	Q-7G
96	12- 4	須恵器	环	口	右カ	底部	S D73
97	32- 17	須恵器	口	口	不明	底部	D-7G・P-8G
98	33- 68	須恵器	口	口	不明	底部	S P84
99	20- 57	須恵器	口	口	不明	底部	S G1200
100	33- 37	須恵器	口	口	不明	底部	Q-7G
101	32- 22	須恵器	口	ヘラ切り	不明	底部	P-4G
102	32- 28	須恵器	口	余切り	不明	底部	P-14G
103	34- 5	須恵器	口	余切り	不明	底部	B区X-0
104	34- 16	須恵器	口	余切り	兩カ	底部	B区-0
105	32- 19	須恵器	口	口	キカ	体・底部	R-8G
106	32- 33	赤焼	口	口	不明	底部	Q-8G
107	34- 11	須恵器	口	ヘラ切り	不明	底部	A区X-0
108	34- 10	須恵器	口	口	不明	底部	A区X-0
109	34- 13	須恵器	口	余切り	不明	底部	A区X-0
110	15- 90	赤焼	口	不明	不明	体部	S D73
111	14- 78	赤焼	口	余切り	四天王・寺	体部	S D73
112	32- 31	須恵器	口	不明	入カ	体部	P-5G
113	15- 91	赤焼	口	余切り	不明	体部	S D73
114	32- 32	須恵器	口	不明	不明	体部	P-5G
115	34- 17	須恵器	口	不明	不明	体部	D区X-0
116	21-106	赤焼	口	余切り	不明	体部	S G1200
117	21- 93	須恵器	口	不明	不明	体部	S G1200
118	34- 6	須恵器	口	ヘラ切り	不明	底部	A区X-0 内面墨書き
119	15-109	内墨	口	余切り	不明	体部	S D73
120	34- 22	赤焼	口	九カ	体部	A区X-0	
121	19- 41	須恵器	口	ヘラ切り	十	体部	S G1200 漆書きカ
122	19- 43	須恵器	口	口	十	体部	S G1200 漆書きカ
123	19- 40	須恵器	口	口	十	体部	S G1200 漆書きカ
124	33- 63	内墨	高台坏	余切り	不明	体部	西水路
125	12- 18	赤焼	环	口	不明	体部	S D73
126	19- 42	須恵器	口	ヘラ切り	不明	体部	外側火ハネ痕



第35図 墨書文字集成



(註) 1・3～10・12・15～16については測量的教育委員会の  
保管なる「剣龍神社西窯跡出土」と伝えられる土器である。

第35図 剣龍神社西窯跡土器実測図

付編

## 宮ノ下遺跡 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

ほぼ平安時代に限定される遊佐町の集落跡は、当時の出羽国をめぐる社会情勢・環境を反映したものとして山形県の遺跡の中でも重要な研究課題の一つとされている。したがって、それらの遺跡から出土する遺物の分析調査は、当時の情報をより詳細に引き出すものとして注目されている。

本報告では、遊佐町に所在する宮ノ下遺跡より出土した土器の胎土を調べることにより、その土器の背景にある生産、流通、消費の状況について考察する。特に、同時に出土する須恵器と「赤焼土器」について、材質の側面から両者の違いを明らかにして、その背景の違いを考える。また、宮ノ下遺跡出土の須恵器との関係が考えられる剣龍神社西窯出土の須恵器も同時に分析を行い、その検証を行う。さらに、時期が異なるとされているA区とD区の両居住域から出土した土器胎土の比較を行い、土器の生産、流通、消費の状況における時期的変化の有無を確かめる。なお、ここでは土器表面に塗られた赤色顔料についても分析を行い、その材質を確認する。

宮ノ下遺跡では、土器だけではなく比較的多量の木質遺物も出土している。これらのうち、本報告では特に掘立柱建物の柱材と考えられている材についてその樹種同定を行い、周辺域での出土例などとの比較から、柱材の用材選択や周辺植生との関わりなどを考える。本報告ではまた、検出された河遺跡より採取された埋積物より種子を検出し、その種類を特定することで平安前期とされる当時の遺跡周辺の植生および植物利用について考察する。これらの材や種子の分析例から引き出される情報は、自然環境が大きな要因とされている遊佐町の平安時代集落の立地を考える上で、非常に意義のあるものと考えられる。

## I 土器胎土分析

## 1 試料

試料は、宮ノ下遺跡A区、B区およびD区から出土した須恵器および赤焼土器20点（試料番号8～23、①～④）と対照試料として剣龍神社西窯から採取された須恵器7点（試料番号1～7）の合計27点である。各試料の種類、器種、出土地点などを観察結果を示した表1、2に併記する。

## 2 方法

試料番号1～23については薄片を作製し、試料番号①～④の4試料については研磨薄片を作製して顕微鏡観察に供した。

薄片および研磨薄片は、試料の一部を切断して、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製す

る。観察は、偏光顕微鏡を用い、岩石学的な手法を用いて構成鉱物および組織を中心に行ない、各試料の特徴把握および比較検討が可能ならしめる資料の作成に努めた。また、研磨薄片を作製した試料番号①～④については試料表面の赤色の原因を明らかにする目的で反射顕微鏡観察を併用した。

### 3 結 果

試料の胎土中には碎屑片として鉱物片・岩片が含まれ、素地の主要構成物となる粘土鉱物・碎屑片は高温で焼成されているため、加熱変化を生じていることが認められる。本分析では、観察された胎土の碎屑片の種類・量比と、鉱物の加熱変化から推定される焼成温度からI～III型までの胎土を設定した。以下に、焼成温度の推定と各型の胎土の特徴を述べる。なお、各試料の顕微鏡観察の結果は表1に示す。また、表2には土器の種類および出土地別にまとめたものを示す。

#### (1) 焼成温度の推定

一般に粘土を高温焼成すると、その温度条件と化学組成に対応した鉱物が晶出したり(代表的な鉱物はムライト)、熔融・非晶質化などの現象がみられる。観察試料では、焼成温度の推定に次の現象について検討して、指針として適用した。

1) 素地を構成する主要粘土鉱物のセリサイトが加熱変化(非晶質化)を受けていない試料の焼成温度は900°Cと推定される。

また、角閃石が存在する場合、角閃石が800°C以上の加熱を受けると酸化角閃石に変化することが知られている。酸化角閃石がさらに900°C異常に加熱されると、鉱物片の周縁から内側に黒色鉄鉱物化し、最終的には不透明鉱物に変化する。

2) セリサイトの一部は確実に加熱変化を受けているが、大部分が残存し、石英・長石類に加熱変化がみられない試料の焼成温度は900°C±と見積もり、セリサイトの残存量が中間的状態に達した状態では900+と推定する。なお、表中では900°C±と900°Cと表現する。

3) セリサイトの大部分は加熱により非晶質化しているが、石英・カリ長石・斜長石にあまり加熱変化がみられない試料の焼成温度を1,150°Cと推定される。ただし、斜長石が曹長石である場合は次項を適用し、さらに細分化する。

4) 曹長石は1,118°Cで溶化する。曹長石の加熱変化は単純ではなく、縁辺部非晶質化→褐色変色→針状ムライト晶出(疎~密)→中心部にムライトの二段晶出→全面的な針状ムライトの成長の順で、途中段階では中心部に曹長石の残晶が認められる。この加熱変化の非晶質化~褐色変化の段階は、1,120~1,150°Cに相当するものと考えられ、1,120~1,150°Cと表現する。ただし、今回の観察試料中の斜長石は曹長石よりCaに富む中性長石または曹灰長石に相当するため、曹長石より溶融温度が高くなるため本項は適用できない。

5) 石英に高温クラックおよび部分的な溶融組織がみられ、カリ長石に顯著な溶融組織が認められるが、ムライトは生成していない試料の焼成温度は1,150°C±と推定される。なお、表中では1,150°C±を1,150°Cと表現する。

表 1 賽微鏡觀察結果一覽表

表 2 頭微鏡觀察結果一覽表 (種類別)

- 6) カリ長石が完全に近く溶化し、曹長石が非晶質化して周辺が褐色に変色している状態はムライト化の初期段階とみなされ、焼成温度は1,500～1,200°Cと推定される。ここではこの段階の焼成温度を1,150°C+と表現する。
- 7) ムライトの生成が確認される試料の焼成温度を1,200°C±と推定する。この状態ではカリ長石の一部は完全溶融していることが多い。なお、表中では1,200°C±を1,200°Cと表現する。
- 8) 針状ムライトが密に生成されている試料は1,250°C+の焼成温度と見積もられる。7)と8)の中間は1,200～1,250°Cと判定する。

各試料の推定焼成温度を表1および2に示す。種類別にみれば須恵器試料の多くは1,150°C-または1,150°C±を示し、一部は1,200°C-から1,200°C+までの温度を示す。一方、赤焼土器のほとんどは900°C-から900°C+までの温度を示し、試料番号18の1点のみ1,150°C-を示す。

#### (2) 各型の胎土の特徴

##### a) I型

I型に区分した試料は、粘土鉱物が多量～少量の範囲で含まれ、粘土鉱物として鱗片状または纖維状のセリサイトが認められる。このことから焼成温度は900°C前後と推定される試料群である。碎屑片としての石英・カリ長石が少なく、単斜輝石が比較的多いこと、および岩片として凝灰岩・安山岩が多く含まれ、他の型に試料と比較して火山岩類起源の物質が多いことが特徴である。I型の試料は岩鉄量の多寡によりI-1型とI-2型に細区分される。

I-1型とした試料は試料番号17, ①, ③, ④の4試料で、いずれも粘土鉱物としてセリサイトが多量～中量程度残留し、含鉄量が少ない特徴を有する。ただし、試料番号①は他の試料に認められない石英が少量含まれ、またチャートが極めて微量認められること、および他の試料には少量含まれる安山岩が認められないことから、I-1'とする。

I-2型とした試料は試料番号12, 13, 22, 23, ②の5試料である。試料番号②を除く4試料は粘土鉱物としてセリサイト中量～少量程度残留し、含鉄量が多い特徴を有する。試料番号②は例外的にセリサイトは微量残存するにすぎない。おそらく900°Cをやや上回る温度で焼成され、セリサイトが非晶質化したものと考えられる。したがって、これについてはI-2'とする。

##### b) II型

素地鉱物の特徴は、少量～微量の石英が含まれること、粘土鉱物としてのセリサイトは加熱変化し、存在したとしても微量～きわめて微量であること、含鉄量に乏しいことが挙げられる。また、碎屑片では、鉱物片として石英・カリ長石・斜長石・角閃石・単斜輝石・斜方輝石、岩方としてチャート・泥岩・凝灰岩・安山岩の出現頻度が高く、火山岩類およびその他の複合した岩石から由来する複雑な組み合わせを示す。

II型は15試料が属する。試料番号10, 15, 18の3試料は1,150°C-の焼成温度が推定され

るが、他の12試料（試料番号1～4, 6～8, 14, 16, 19, 20）はいずれも1,150°C土が焼成温度と推定される。

### c) III型

鉱物片として含まれる斜長石中にムライトが生成され、1,200°C前後の焼成温度が推定され、高温焼成されている特徴を有する。鉱物片として輝石類・角閃石が含まれることが極端に少なく、岩片としては凝灰岩は含まれるもののが安山岩の出現頻度は低い。従って、この型に属する試料の原土はI型・II型の試料と異なり、現世火山岩に由来する物質の影響は少なく、凝灰岩の存在を考慮すると新第三紀堆積岩の供給物が多いことが考えられる。

III型には試料番号5, 9, 11, 21の4試料が属する。

#### (3) 試料表面の赤色物質について

##### a) 試料番号①

試料番号①の表面には、鏡下で平均0.01mm、最大肥厚部で0.02mmの厚さの赤褐色を呈する物質がみられる。この部分を特殊光源を用いた直交ポーラ下で観察すると赤褐色の内部反射がみられるが、反射顕微鏡下では内部反射は認められるものの金属鉱物を確認することはできない。従って、きわめて微細な赤鉄鉱が含まれているが、ベンガラのように赤鉄鉱が濃集した物質ではなく、含酸化鉄粘土と判定される。本物質は素地の粘土と完全に離着し剥離はみられないことから試料表面に塗布した後に焼成され、発色したと考えられる。

##### b) 試料番号②

試料番号②の表面には、鏡下で黒色を呈する薄膜が平均的には0.05mm、最大肥厚部で0.015mmの厚さで付着している。本試料は素地そのものが含鉄粘土を用いた赤色土器で素地が赤鉄鉱で膠結されているため、この部分を特殊光源用いた直交ポーラ下で観察すると素地の赤褐色の内部反射が著しく、膜の部分は不明瞭となるが、内部反射はみられない。反射顕微鏡下では金属鉱物を確認することはできない。試料表面の赤色は素地そのものの色であり、黒色巻はおそらくカーボンが付着したものであろう。

##### c) 試料番号③

試料番号③の表面付近は、鏡下で赤褐色を呈する素地で構成されているが、平均的に表面から0.05mmの部分はとくに発色が著しい。含鉄量に富む粘土とやや含鉄量の少ない粘土を混合している赤色土器で素地が含鉄量に富む粘土の部分は赤鉄鉱で膠結されているため、赤色の発色が良好で、とくに表面付近では含鉄量が多いため発色が著しい。全般を通じてベンガラ等を塗布した形跡はみられず、試料表面の赤色は素地そのものの色であると判定される。

##### d) 試料番号④

試料番号④の表面には、鏡下で平均0.04mm、最大肥厚部で0.07mmの厚さの赤褐色を呈する物質がみられる。この部分を特殊光源を用いた直交ポーラ下で観察すると赤橙色の内部反射がみられるが、反射顕微鏡下では暗赤褐色内部反射は認められるものの金属鉱物を確認することはできない。この状況は試料番号①と類似し本試料で典型的である。結論とし

て本試料の赤色物質はきわめて微細な赤鉄鉱であるが、ベンガラのように赤鉄鉱が濃集した物質ではなく、含酸化鉄粘土と判定される。写真図版では赤色鉄粘土と碎屑片となっている安山岩片が同時に塗り込められている状態で、素地が十分に軟らかい状態で赤色粘土を塗布したことを示している。従って、含酸化鉄粘土は試料表面に塗布した後に焼成され、発色したと考えられる。このことは素地の粘土と含酸化鉄粘土が完全に接着し剥離はみられないことからも証明される。

#### 4 考 察

##### (1) 胎土に認められる須恵器と赤焼土器の違い

今回の分析により、須恵器と赤焼土器との間に比較的明瞭な胎土の違いが認められた。その違いの最も大きな特徴は焼成温度であり、両者は明らかに異なる焼成技術により製作されたものであると考えられる。これまでの分析例と比べると、推定された赤焼土器の焼成温度は、同時代の国内の他の地域におけるいわゆる土師器とほぼ同様である。おそらく他の地域における土師器と大差ない技術により製作されたものであろう。一方、鉱物片や岩石片の産状において、宮ノ下遺跡出土の試料でみると、須恵器と赤焼土器との間に、石英とチャートおよび安山岩の産状に若干の違いが認められる。このことは、宮ノ下遺跡の須恵器と赤焼土器との間には、焼成技術だけではなく、両者に使われた粘土および砂の採取地も異なっていた可能性がある。

ところで、土器表面の塗布物の分析の対象とされた試料番号①～④の4点のうち、須恵器とされた3点はどれも赤焼土器と同様のI型とされ、赤焼土器とされた1点は岩石片と鉱物片の産状において須恵器に類似した傾向を示す。これらの試料の存在は、宮ノ下遺跡における須恵器と赤焼土器との中間的土器の存在を示唆しているのかも知れない。

##### (2) 剣龍神社西窯の須恵器との関係について

剣龍神社西窯の試料7点のうち6点はII型に分類され、1点はIII型に分類された。どちらの胎土型も宮ノ下遺跡出土の須恵器に認められるから、その関係を全く否定するものではない。しかし、詳細にみれば岩石片の産状において、剣龍神社西窯の試料には安山岩が含まれる傾向があり、宮ノ下遺跡の須恵器には安山岩が全く認められないか微量という違いも認めることができる。したがって、現時点では特に剣龍神社西窯で焼かれたものが宮ノ下遺跡に持ち込まれたということを積極的に示すような結果ではなかったといえる。ただし、剣龍神社西窯試料の中にも試料番号5や7のように安山岩の認められないものもあり、さらに類例の蓄積をもって検討したい。

##### (3) 胎土から推定される地質について

試料の胎土に観察された鉱物片のうち、石英については様々な由来が考えられるが、斜長石、單斜輝石、斜方輝石などは安山岩に由来し、黒雲母や角閃石はカコウ岩またはデイサイトなどに由来する。また、岩石片ではチャート、泥岩、凝灰岩、安山岩が特徴といえる。これらの岩石の分布を庄内平野周辺で見れば、安山岩は島海山、月山などの第四紀の

火山または庄内平野南方に分布する新第三紀の安山岩質溶岩などがある。またカコウ岩の分布域として近いのは山形ー新潟県境に広がる朝日岳を中心とする朝日帯があり、デイサイトは月山に分布が認められる。さらに凝灰岩では庄内平野東縁～東南縁を新第三紀の凝灰岩がある。チャートについては、これを産するような中～古生層の分布は少なくとも庄内平野縁辺では認められていない。近接地では、朝日帯の南部に認められる程度である。以上、今回の試料が示す地質学的背景のうち、チャートを除けば概ね庄内平野周辺地域を示唆するとみてよい。ただし、今後、チャートの分布と庄内平野周辺地域における表層堆積物中におけるチャートの存在を確かめる必要がある。チャートの産状次第では、チャートの認められる今回の須恵器試料の产地について再検討が迫られる可能性がある。

#### (4) おわりに

鮎海郡遊佐町では江戸時代末期の文化8年(1813)に瓦製造が開始され、その後、各地で瓦の製造が行われてきた歴史がある。これらは主として遊佐町藤岡地区、および酒田市生石地区の粘土が使用されてきたが、前者は既に採掘し尽くされている。このほか、粘土産地は八幡町泥沢地区・新出地区にあり、少し範囲を広げると、東田川郡柳引町たらのき代地区、羽黒町桜ヶ丘地区、新庄市折形地区に粘土の産出が知られる。これらの粘土は炻器粘土で比較的耐火度が高く、可塑性に富んでいることから、土器はもちろん須恵器原料として利用できる性質を有している。すなわち、庄内平野は土器の原材料に乏しい地域というわけではない。今回の結果をみてもチャートの問題は残るが、周辺地質と全く異なるという試料もない。庄内地域ひいては山形県における古代の土器をめぐる事情を解明するためには、遺跡出土試料、窯跡出土試料および各地(例えば水系別)の自然堆積物の分析例の蓄積をするとともに、発掘調査による土器、遺構、遺跡全体の特徴、性格等の解析に取り入れられるような、資料作りが必要であろう。

## II 挖立柱材の樹種同定

### 1 試 料

試料は、掘立柱建物跡の柱穴から出土した柱根 6 点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表 3 に記した。

### 2 方 法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行い、その特徴から種類を同定する。

### 3 結 果

試料は、全てクリに同定された（表 3）。解剖学的特徴などを以下に記す。

#### ●クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔眼部は 1 ~ 4 列、孔眼外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～橢円形、小道管は単独および 2 ~ 3 個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った橢円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ~ 15 細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

表 3 樹種同定結果

番号	遺構・試料名	時代・時期	用途	樹種
1	S B 1 挖立柱建物跡 E B 29	平安時代（9 ~ 10世紀頃）	柱材	クリ
2	S B 1 挖立柱建物跡 E B 38	平安時代（9 ~ 10世紀頃）	柱材	クリ
3	S B 1 挖立柱建物跡 E B 370	平安時代（9 ~ 10世紀頃）	柱材	クリ
4	S B 1 挖立柱建物跡 E B 373	平安時代（9 ~ 10世紀頃）	柱材	クリ
5	S B 1 挖立柱建物跡 E B 525	平安時代（9 ~ 10世紀頃）	柱材	クリ
6	S B 1 挖立柱建物跡 E B 371	平安時代（9 ~ 10世紀頃）	柱材	クリ

### 4 考 察

柱材は全てクリであった。本地域では、これまでにも石田遺跡や木原遺跡などで同時期の柱材について樹種同定を行っているが（未公表資料）、結果はほとんどがクリである。このことから、本地域では平安時代の掘立柱建物の柱材にクリを選択的に利用していたことが推定される。クリが多用された背景には、強度および耐朽性に優れた材質を有することが考えられる。

本地域では、クリの他にスギも井戸材などを中心に多数確認されている（未公表資料）。

のことから、クリとスギが重要な構築材であったことが推定される。両種の使用状況を見ると、遺跡によってやや異なる傾向がある。このことは、それぞれの集落の活動範囲の植生などが関与している可能性があるが、現時点では詳細は明らかではない。今後類例の蓄積をさらに行うと共に、古植生や文献史料からの検討が必要である。

### III SG1200河川跡出土の種子同定

#### 1 試 料

試料は、SG1200河川跡から得られた種実遺体1式である。

#### 2 方 法

双眼実態顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

#### 3 結 果

以下に検出された種類と個数、ならびに形態的特徴について記す。

● カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イタイ科カヤ属

種子が1個体検出された。梢円形で、長さ1.5cm、幅1cm程度。先端部はやや尖る。種皮は薄くて固く。表面はざらつき、縦方向に筋がみられる。現在の分布域からすると、変種のチャボガヤであると考えられるが、種実では判別が難しいため、カヤとして同定する。

● オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura) クルミ科クルミ属

核が17個体検出された。褐灰色。大きさは3cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部はやや尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。内部は子葉が入る2つの大きなくぼみがある。

● クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果皮が1個体検出された。半球形で大きさは3cm程度。下面に穀斗の座についていた部分が大きく残り、梢円形で褐色でざらつく。そのほかの部分は黒色で平滑、光沢がある。種皮は薄くて堅く、裏には内果皮(いわゆる渋皮)が付着している。

● モモ (*Prunus persica* Batsch) パラ科サクラ属

核(内果皮)が22個体検出された。褐色～黒褐色で大きさは2cm程度。核の形は梢円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

● トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume.) トチノキ科トチノキ属

種子ならびに果実が29個体検出された。果実はほとんどが未熟である。黒褐色で大きさは、大きなもので3cm程度。卵型で、果皮は厚く弾力がある。果皮には3つの筋が走り、

しばしば裂開する。種子は大きなもので3cm程度。いびつな球形で、種皮は薄く堅い。表面には黒く艶のある部分と、黒褐色でざらつく部分がある。

●ツバキ (*Cammelia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

種子が2個体検出された。黒色で大きさは2cm程度。種皮は厚くてやや弾力がある。下端に小さな「へそ」がある。

●エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

核が4個体検出された。灰黒色。側面観は梢円形、上面観は円形。長さ1cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の深い溝がある。核は厚く硬い。

#### 4 考 察

今回検出されたものはいずれも固くて残りやすい種実である。また未熟なものや表面が磨耗した種実も多いことからすると、人為的に破棄されたのではなく、自然に流れ込んできた可能性が高い。これらのうち、モモは栽培のために古い時代に渡来したとされ、東北地方でも多くの遺跡から多数検出されている。その他の種類については、現在でも付近の山野に普通に見られる種類であり、当時も多く成育していたものと考えられる。このうち、トチノキ、クリ、オニグルミ、カヤは食用として、ツバキは摺油の原料として、エゴノキは洗濯や漁労に使われることから、いずれも有用な植物であったと考えられる。なお、河岸林を作る要素としては、トチノキやオニグルミが検出されており、河川沿いでの生育が示唆される。また、他の種類も林縁部に生育する場合が多いことから、いずれの種実遺体も遺跡近傍に生育していたものに由来すると思われる。

## 報告書抄録

ふりがな	ふやのしたねせきはくつちよきほうこくしょ						
書名	宮ノ下遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第32集						
編著者名	斎藤俊一 黒沼幹男						
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 Tel 0236-72-5301						
発行年月日	西暦 1996年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
宮ノ下遺跡	山形県 飽海郡 遊佐町 大字北目 字宮ノ下他	6461 2086	39度 02分 15秒	139度 54分 42秒	19950508 ～19950913	10,150	県営ほ場 整備事業 (高瀬川 地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮ノ下遺跡	集落跡	平安	掘立柱建物跡 6 井戸跡 1 土坑 14 溝跡 25 河川跡 1 ピット列 1	須恵器 赤焼土器 黒色土器 木製品 石製品	庄内高瀬川の自然堤防上に広がる平安初期から中期にかけての集落跡である。墨書き土器と木製品の出土点数が多い。墨書き土器は总数で126点確認し、「伴」・「大伴」・「漢」・「四天王」・「神奴」等が、注目される。近くに木製品の工房の存在も想定される。		

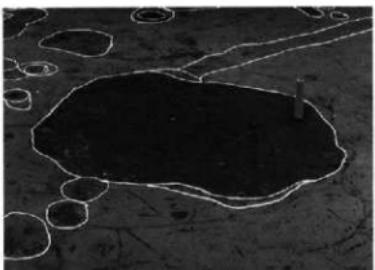
図 版



A区・B区調査区全景



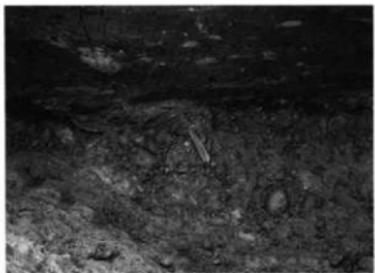
遺構検出状況（D区北）



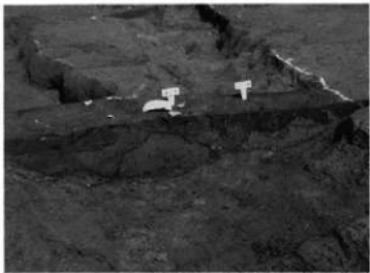
A区 S E 266井戸跡遺構検出（東から）



A区 S E 266井戸跡土層断面（西から）



A区 S E 266井戸跡検出状況（西から）



A区 S D 109土層断面（南から）



B区 S D 649土層断面（南から）



A区 S D 341土層断面（南から）



B区 S A 1ピット列検出状況（南から）



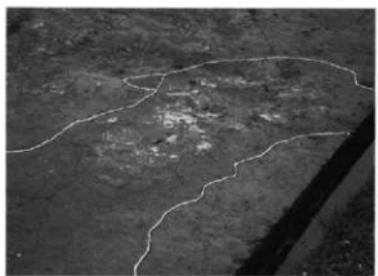
B区 S A 1ピット列半截（北から）



D区近景（西から）



D区 S G 1200検出状況（西から）



D区 S D 1201検出状況（北から）



D区 S D 1201土層断面（北から）



D区 S G 1200調査状況（北から）



D区 S G 1200土層断面（東から）



D区 S G 1200土層断面（東から）



東水路(4 T) S G 1200調査状況（南から）

図版4



D区 S G 1200遺物出土状況（南から）



D区 S G 1200遺物出土状況（東から）



D区 S G 1200遺物出土状況（南から）



D区 S G 1200遺物出土状況（東から）



D区 S G 1200遺物出土状況（南から）



D区 S G 1200遺物出土状況（南から）



D区 S G 1200遺物出土状況（西から）



5 T S K 1533土層断面（西から）



A区 SB 1 建物跡検出状況（南西から）



A区 SB 4 建物跡検出状況（北西から）



A・B区 SB 5 SB 6 建物跡（西から）



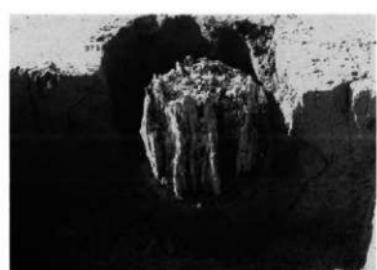
A区 SB 1～3 建物跡（南から）



A区 E B 38土層断面（南から）



A区 E B 190土層断面（南から）



A区 E S B 373土層断面（南から）



A区 E B 370土層断面（南から）



A区 SK 111土層断面（南から）



A区 SP 159完掘状況（南から）



A区 SK 158土層断面（西から）



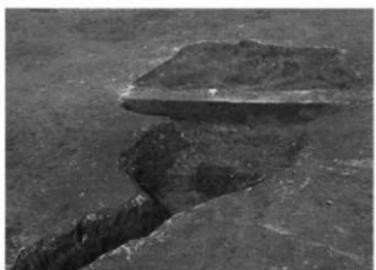
A区 SP 80土層断面（南から）



A区 SK 390土層断面（西から）



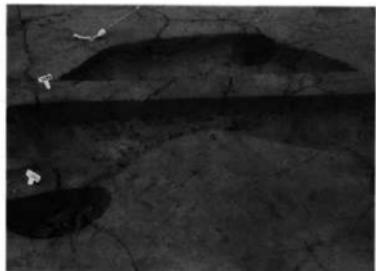
A区 SD 97土層断面（南から）



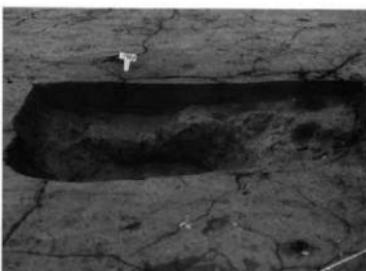
A区 SK 22土層断面（西から）



D区 SK 1241完掘状況面（南から）



D区SK 1224土層断面（南から）



D区SK 1343土層断面（南から）



A区SD 73遺物出土状況（西から）



A区SD 73遺物出土状況（西から）



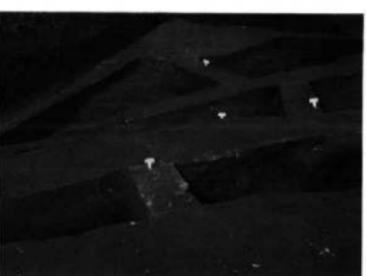
A区SD 73土層断面（南から）



A区SD 73土層断面（南から）

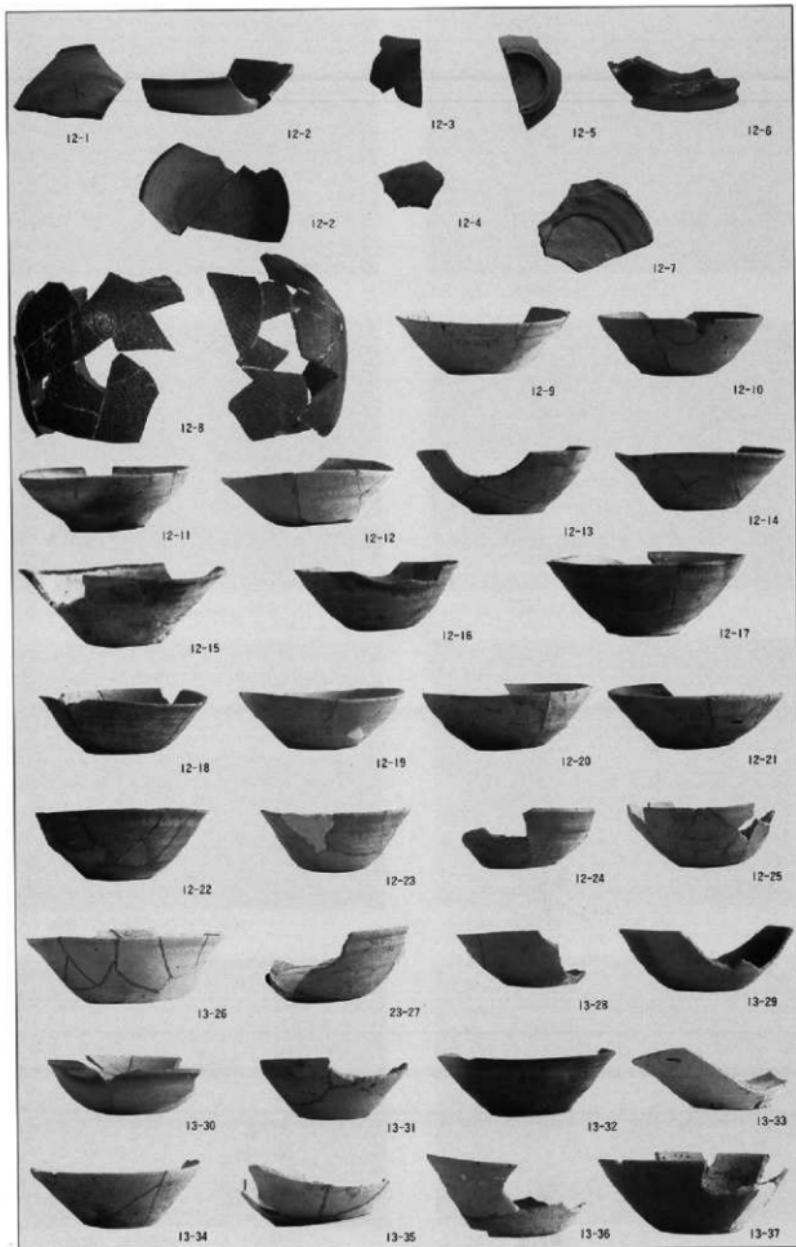


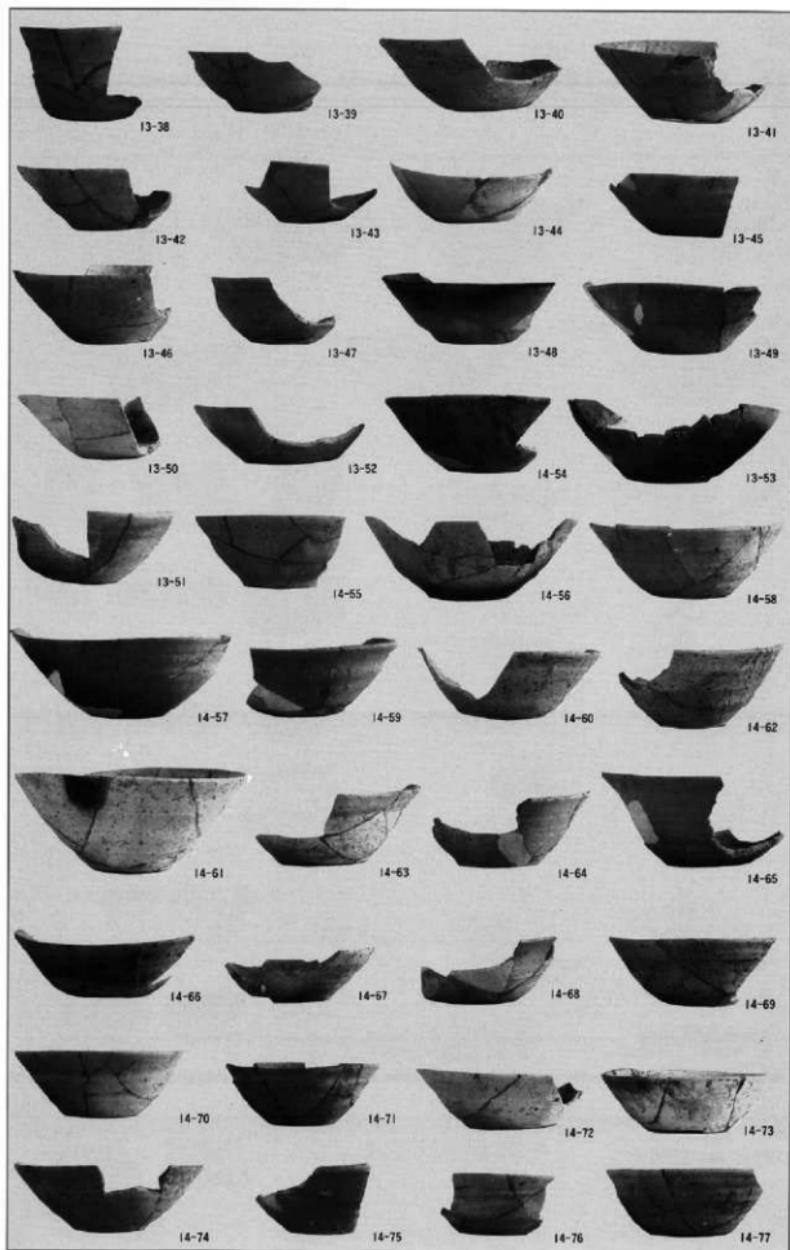
A区SD 77土層断面（南から）



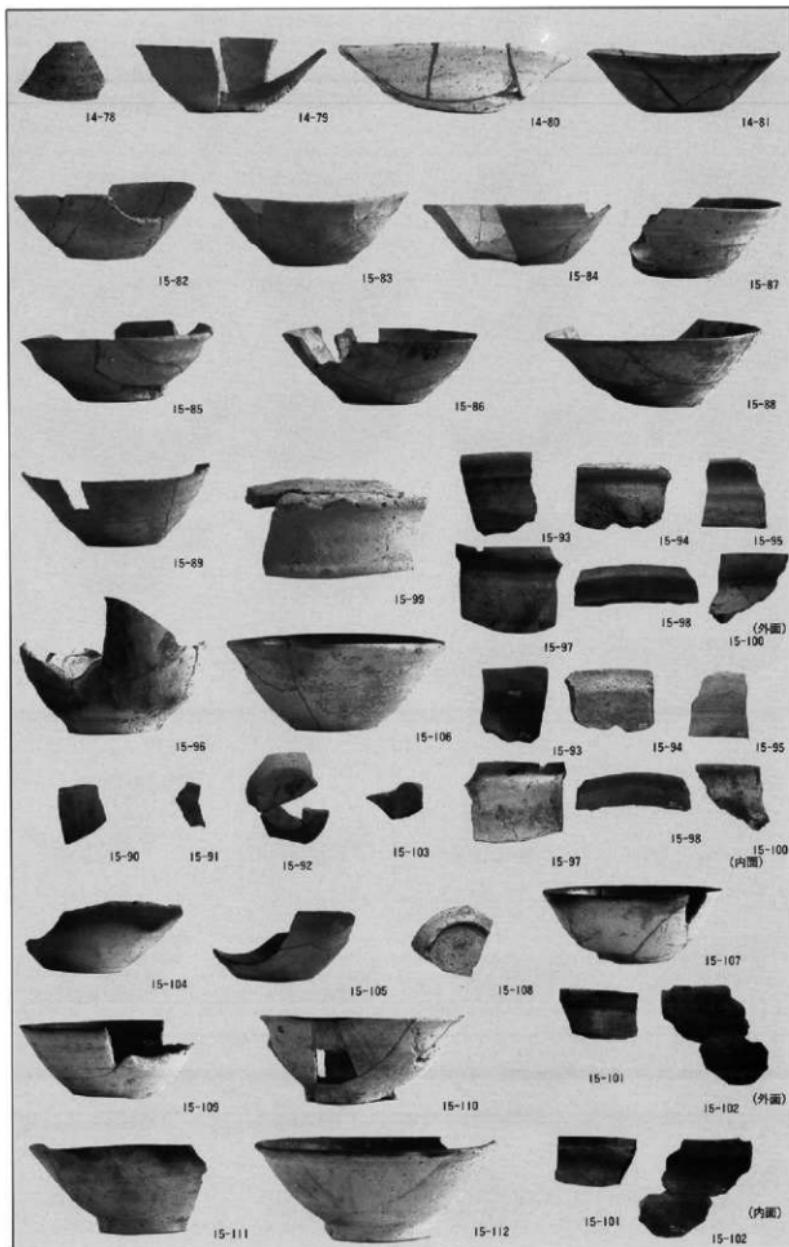
A区SD 5～8完掘状況（南西から）

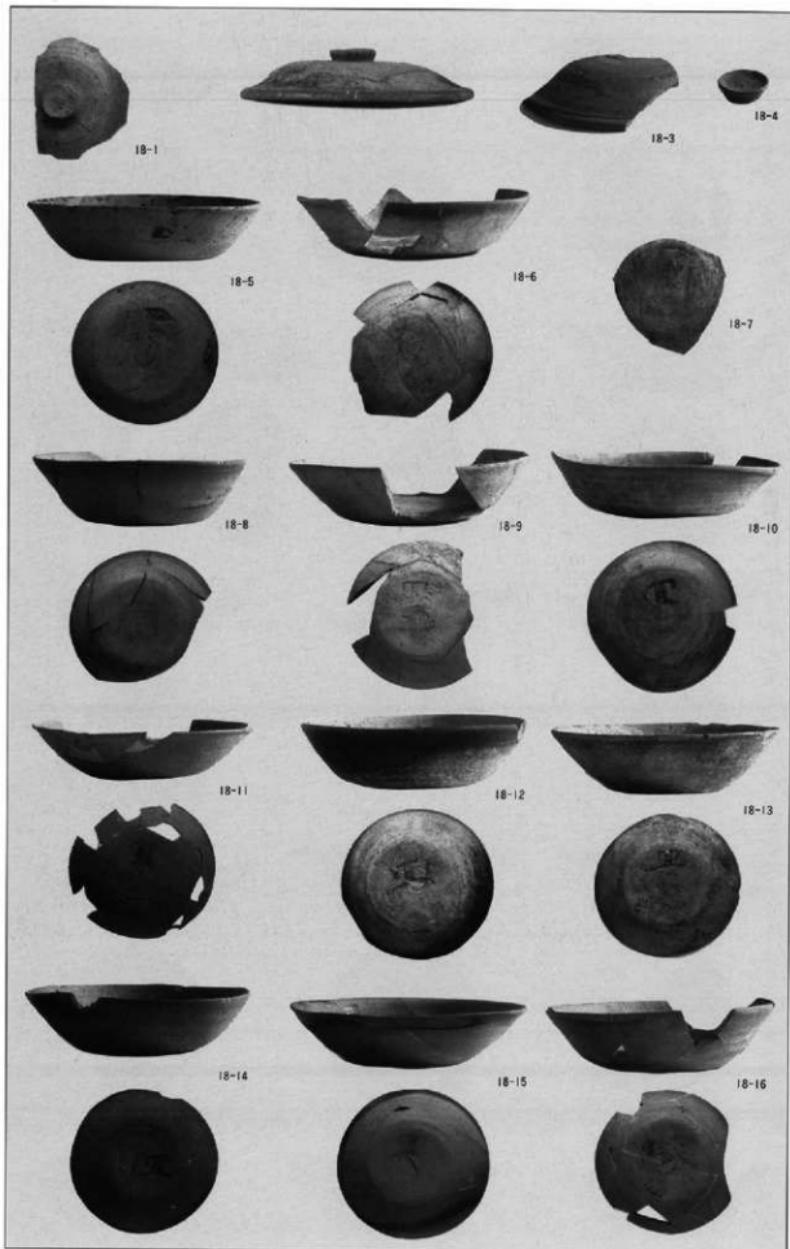
図版 8



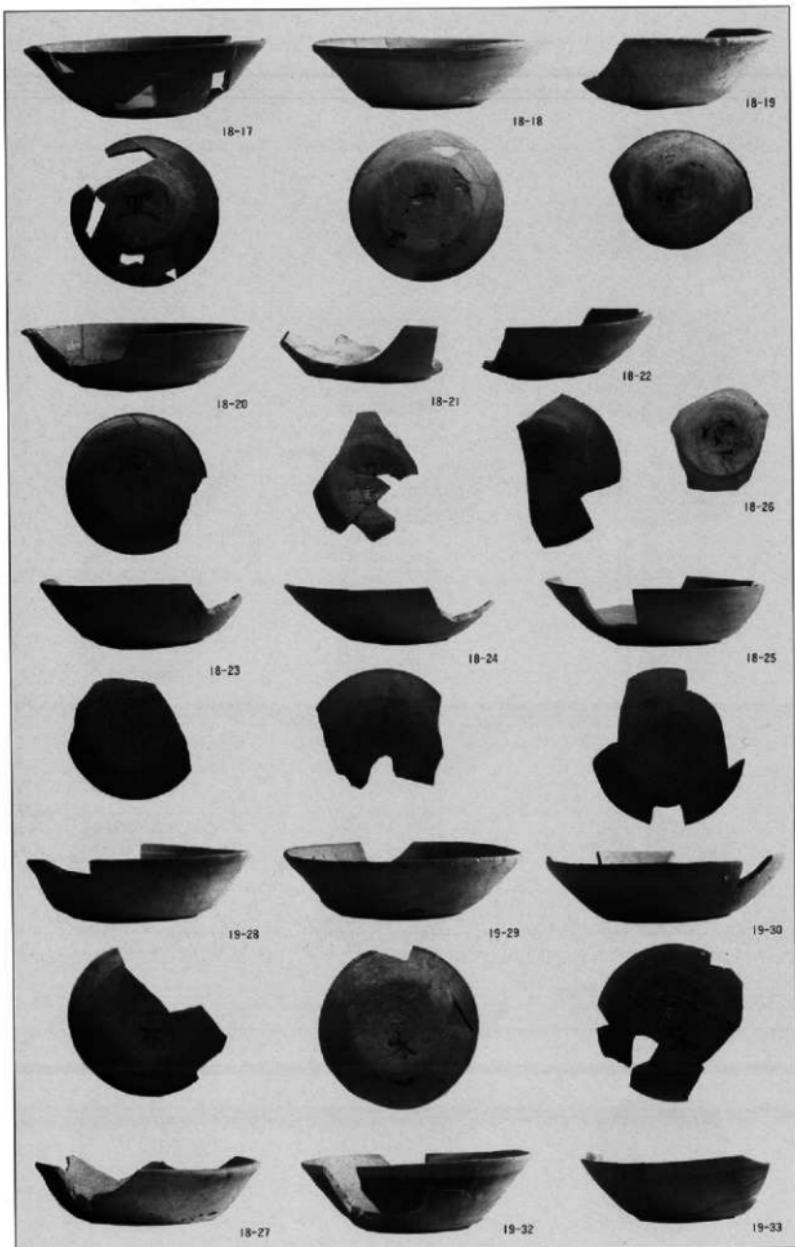


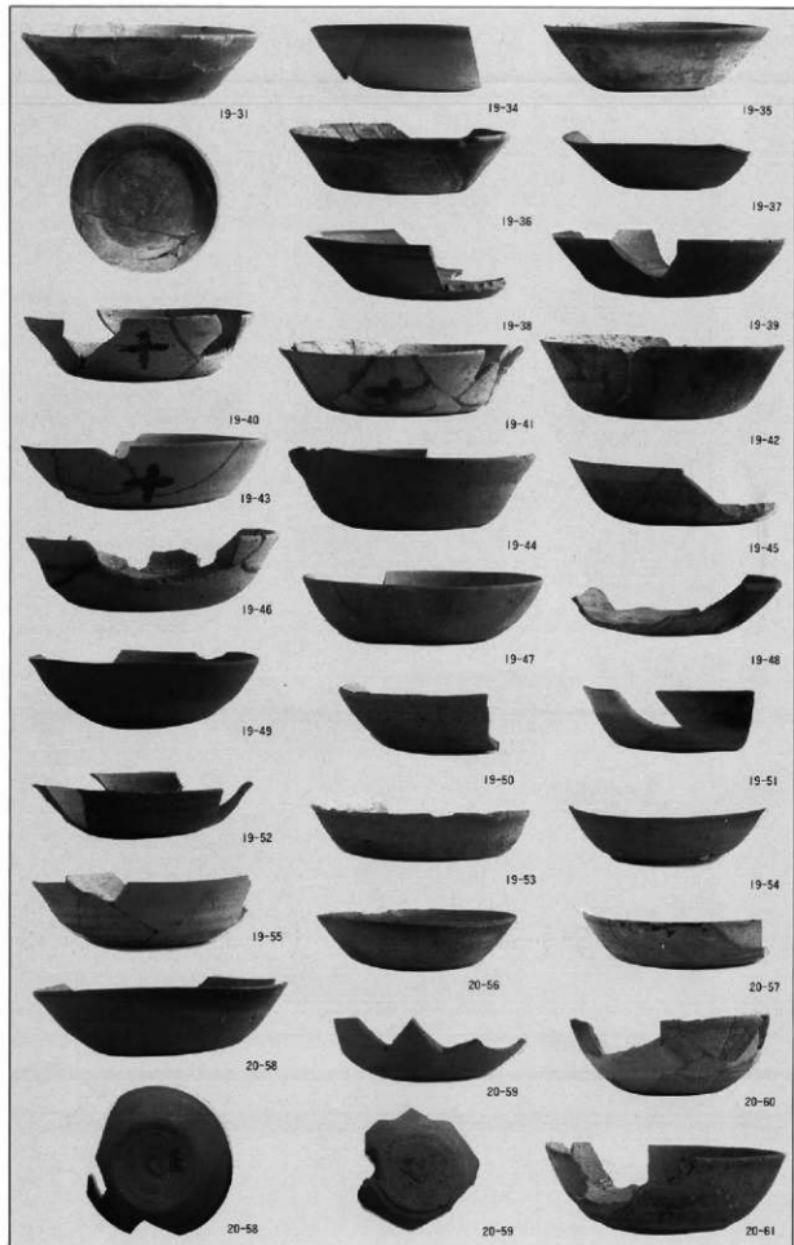
図版10



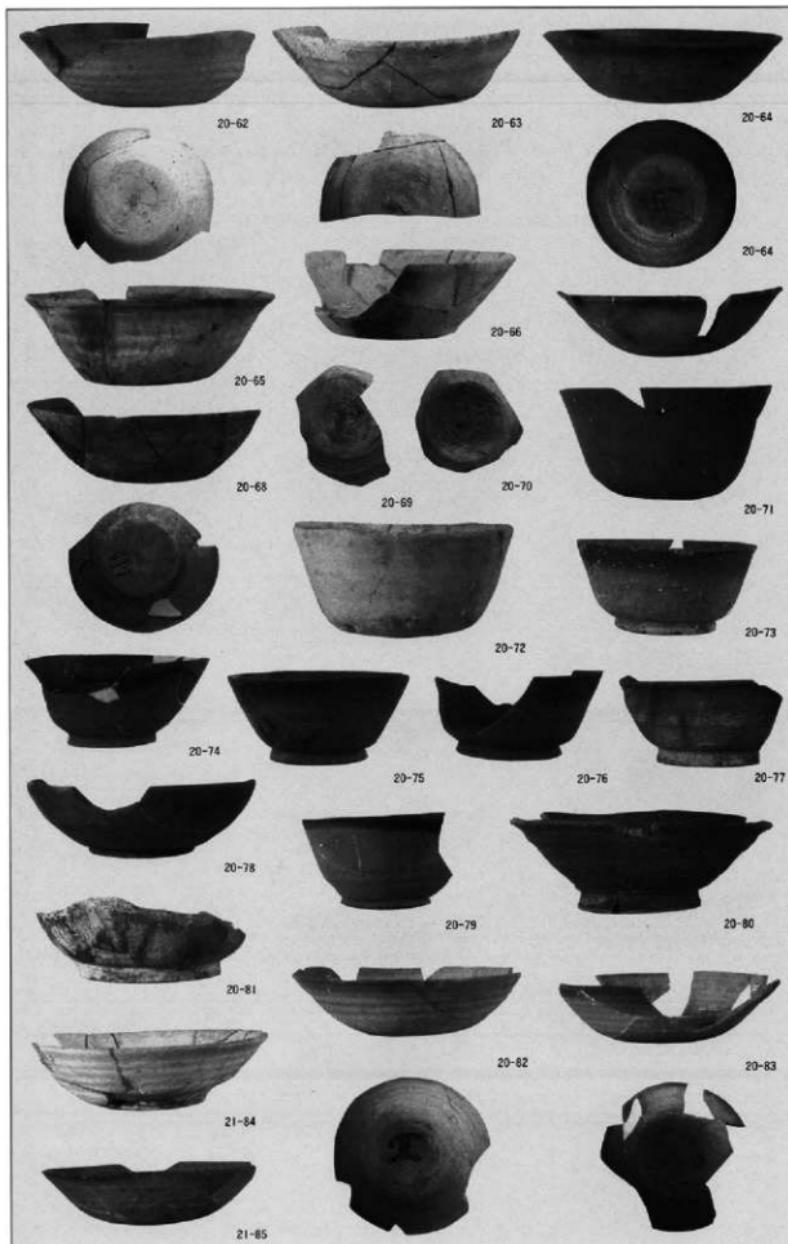


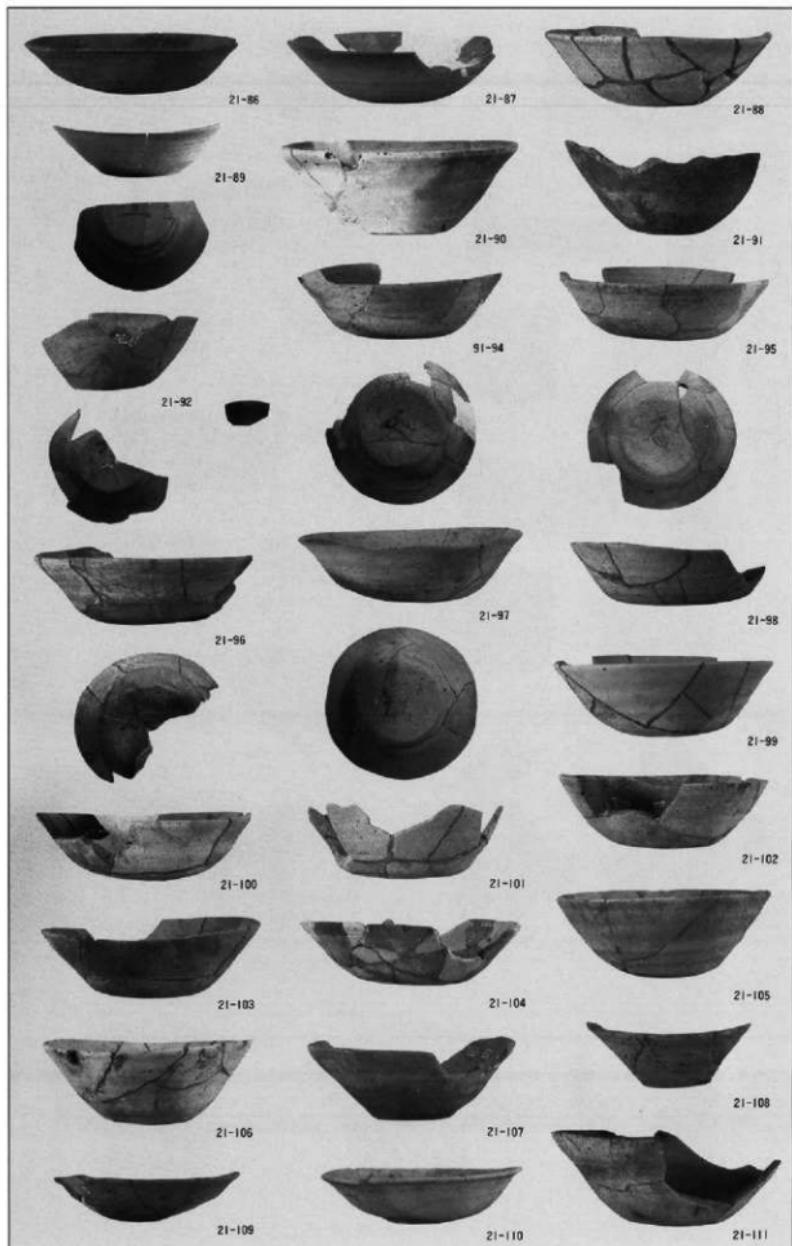
図版12

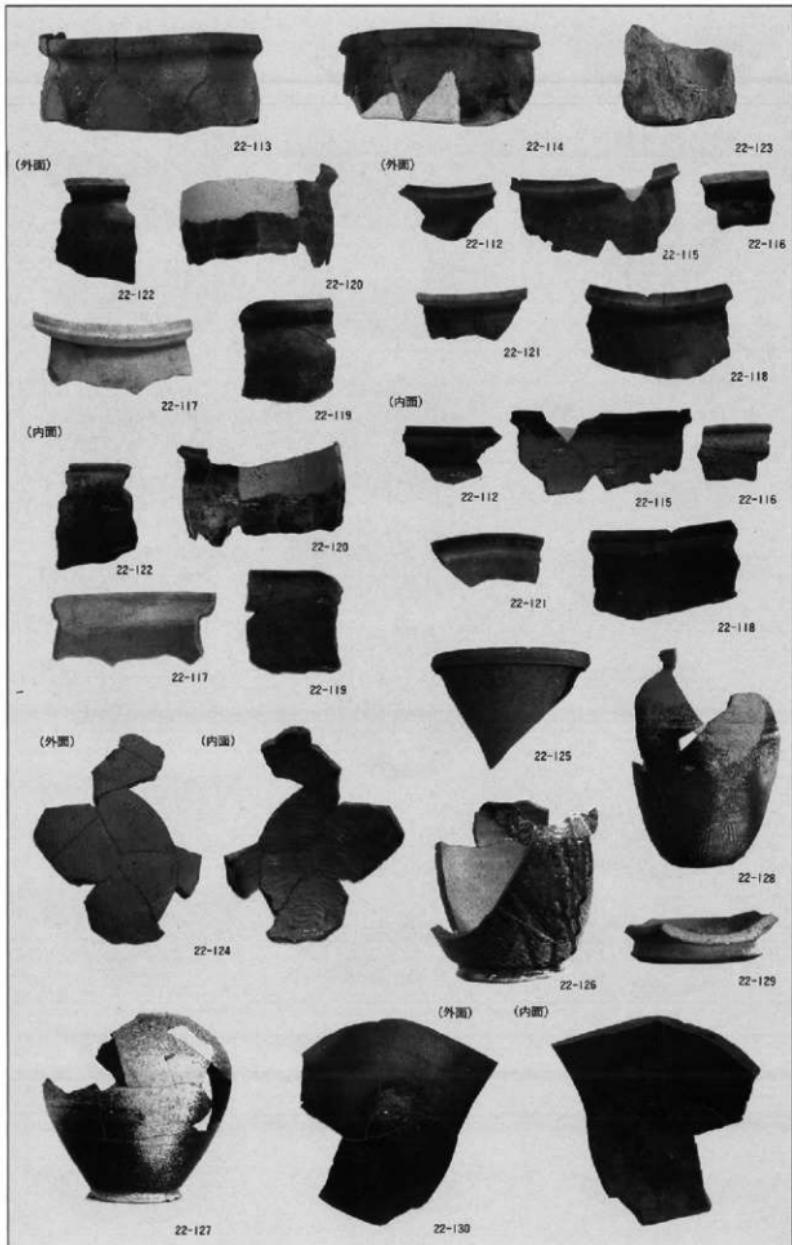


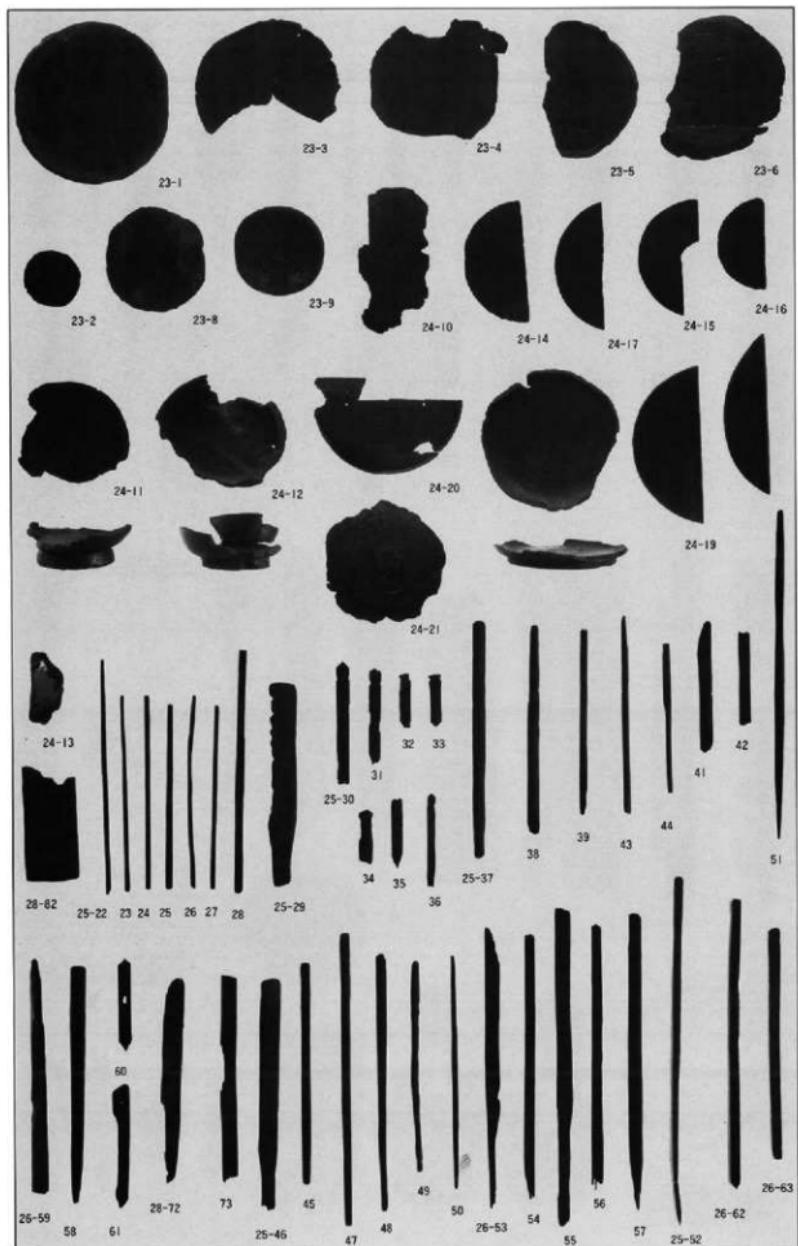


図版14

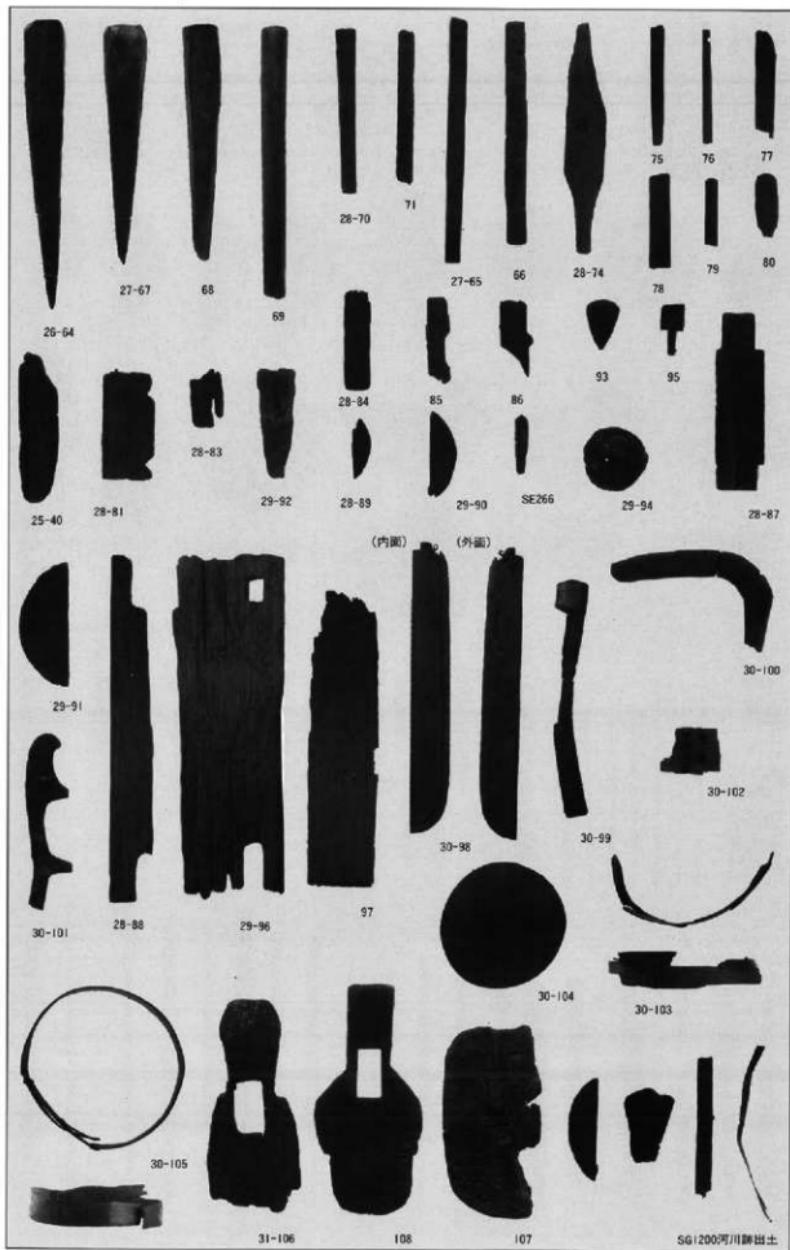


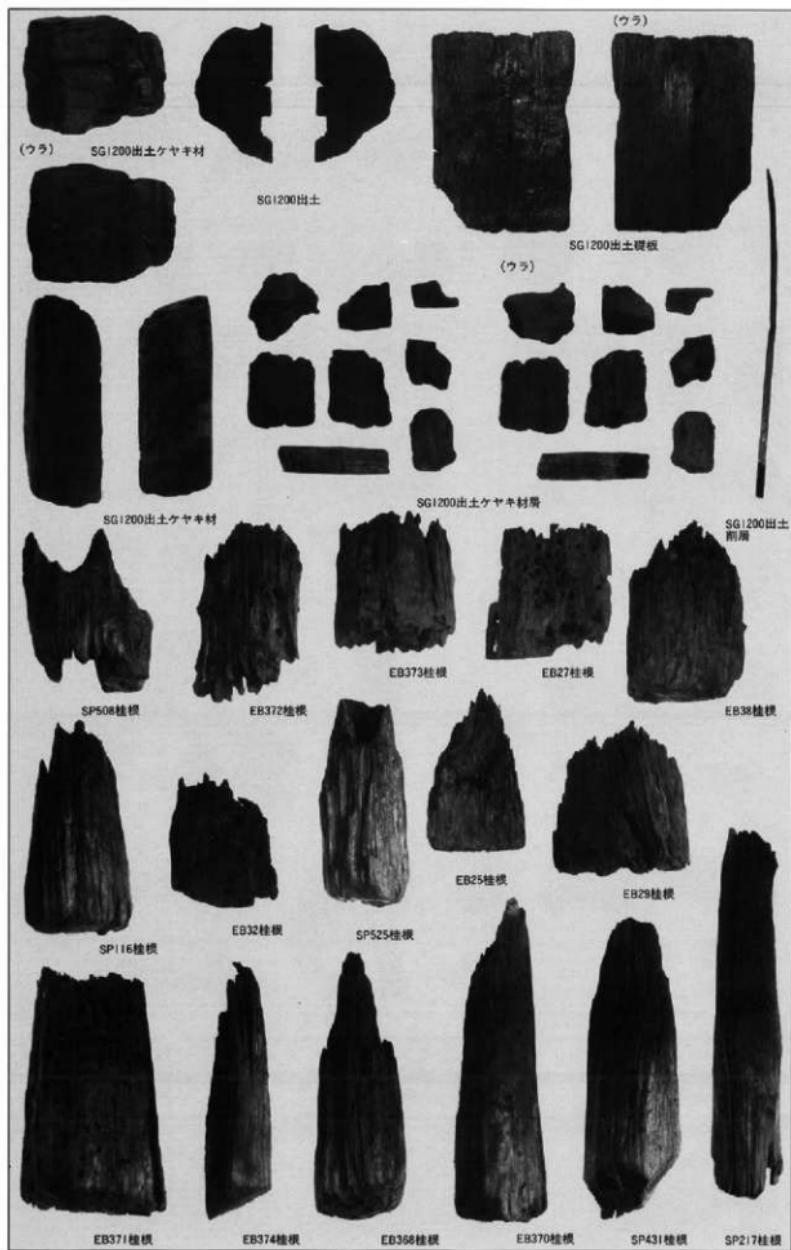


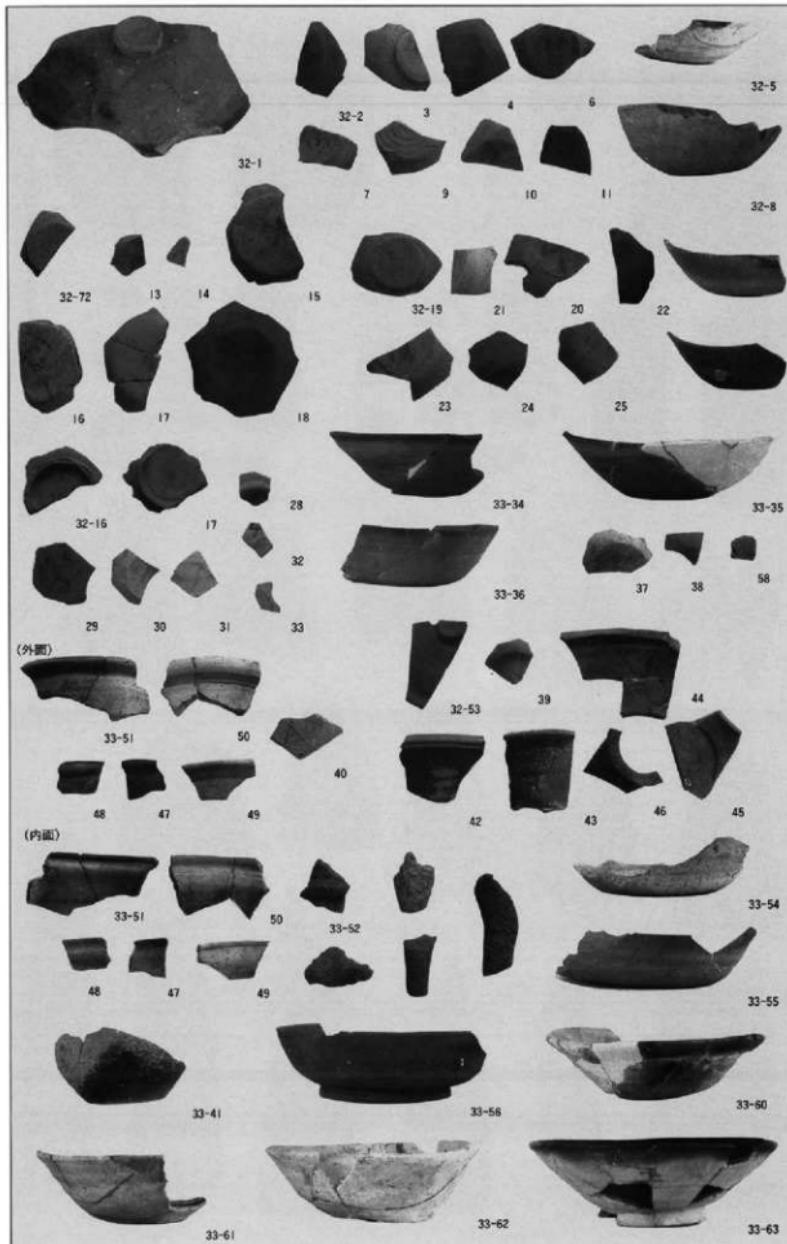


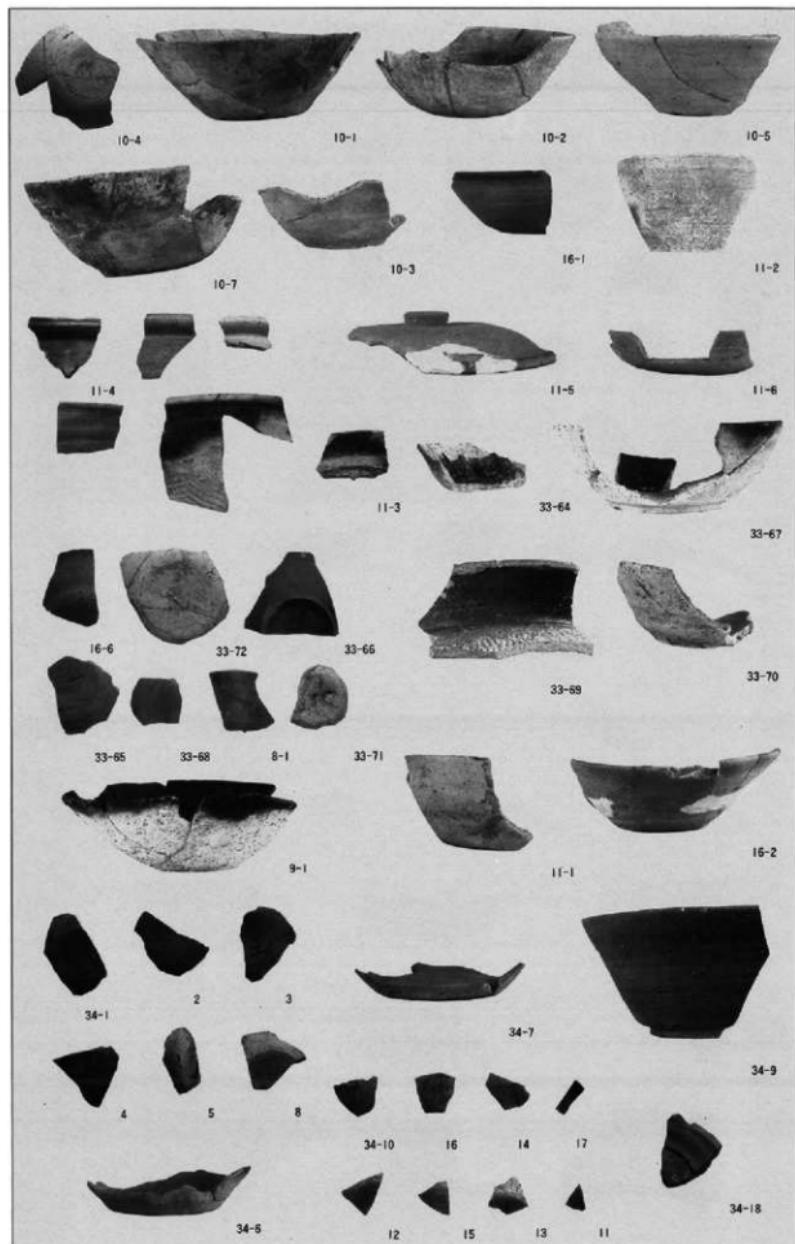


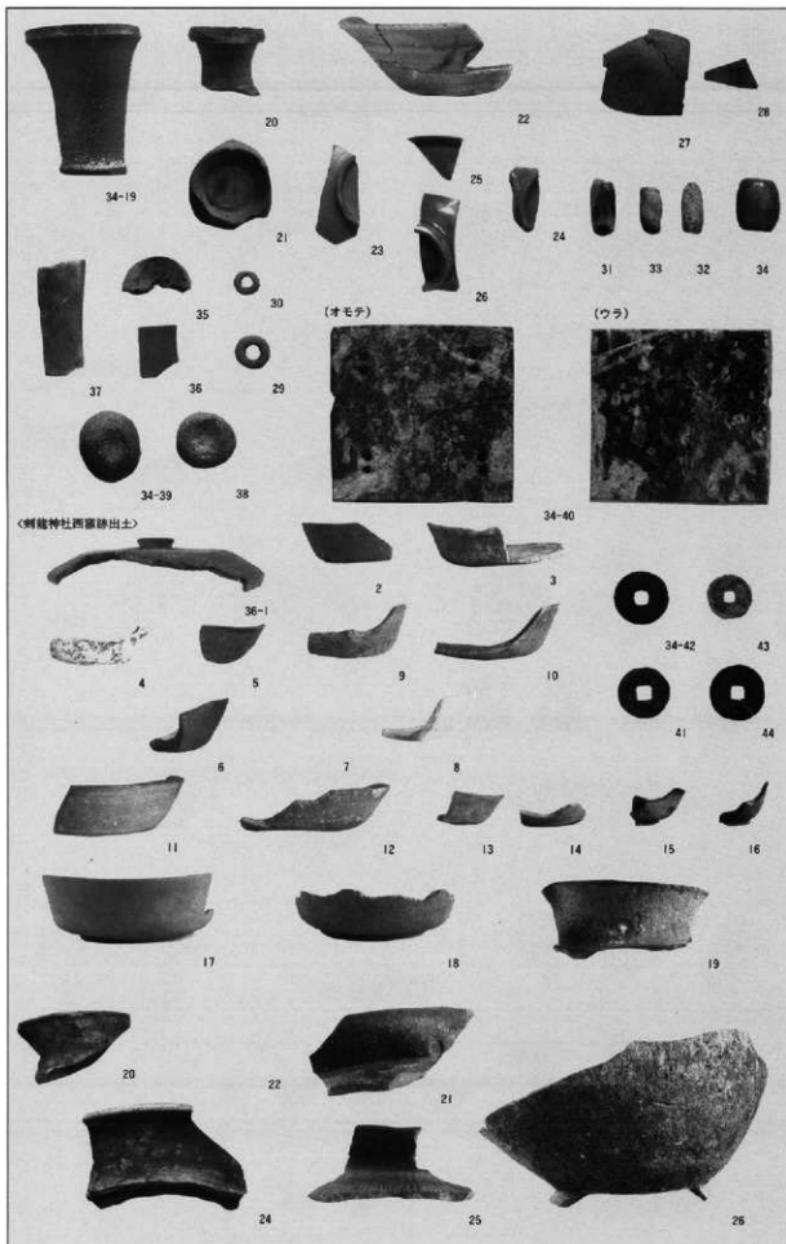
図版18











---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集

宮ノ下遺跡発掘調査報告書

1996年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 大場印刷株式会社

---